

○君の——紫上の。  
 ○うたて所狭うもあるかな——随分多過ぎますな  
 の意。髪があまりに多い  
 ので、うたてくさへ思ふ  
 のである。  
 ○如何におひやらむとす  
 らむ——どれほど多くな  
 ることであらう。  
 ○いと長き人も——髪  
 のたいへん長い人でも。  
 ○むげに後れたるすぢの  
 なきや云々——かう少し  
 も後れ毛のないのも、あ  
 まりとのひ過ぎて趣の  
 ないやうな気がする。  
 ○千尋と祝ひ聞え給ふを  
 ——髪の手尋まで長かれ  
 とお祝ひなさるのを。  
 ○少納言——紫上の乳  
 母。  
 ○はかりなきちひろの云  
 々の歌——補欄参照。  
 ○千尋ともいかでか知ら  
 む云々の歌——補欄参  
 照。  
 ○らうくじきものから  
 ——紫上のよまれた歌の

さまは巧みではあるもの、  
 態度の若々しく優しい  
 のを好いと思召され  
 た。

奏

一七二

「君の御髪は我そがむ」とて、「うたて所狭うもあるかな。如何におひやらむとすらむ」とそぎわづらひ給ふ。「いと長き人も、額髪は少し短くぞあめるを、むげに後れたるすぢのなきや、あまり情なからむ」とそぎはてて、千尋と祝ひ聞え給ふを、少納言あはれにかたじけなしと見奉る。

はかりなきちひろの底のみるぶさの生ひゆくすゑはわれのみぞ見むと聞え給へば、

千尋ともいかでか知らむさだめなくみちひろしほののどけからぬにと物に書きつけておはするさま、らうくじきものから、若うをかしきを、めでたしと思す。

源氏の君は「紫上の御髪は我がそいでやらう」と仰せられて、姫君の髪をとつて御覽になり、「まあ随分澤山な髪でありますかな。これでは將來どのやうに多くなるでせう」と、あまりに多いのでそぐのに困つてゐられた。源氏「頭髮の長い人でも、額の生え際の毛は少し短いものやうであるが、姫君のやうに全く後れ毛のないのも、あまりなさけないやうだ」と仰せられながら、髪をそぎ終つて、「汝の髪は千尋にまで長く伸びよ」と祝はれたので、これを聞いてゐた少納言の乳母は、しみくと身に沁みてありがたいことだと思ひ、源氏の君や紫上の上を見



奏

一七三

てゐた。さて源氏の君の歌に、

はかりなきちひろの底のみるぶさの生ひゆくすゑはわれのみぞ見む  
と仰せられたので、紫上の返歌には、

千尋ともいかでか知らむさだめなくみちひるしほののどけからぬに

と、姫君が何かに書きつけてゐられるさまは、利巧ではゐられるものの、まだ若々しく優しく  
ゐられるのを、源氏は好い姫君だと思つてゐられた。

補

○はかりなきちひろの云々の歌——千尋もあるだらうと思はれる深い海底の海松房のやうに  
御髪の房々と長く生え、御成人なされた姫君の身は、我獨りが愛して行かう。決して誰の手に  
も觸れさせまい。○千尋ともいかでか知らむ云々の歌——海上は潮が満ちたり、干たりして定  
めないものでありますから、その底は千尋もある深いものであるか、それとも浅いものである  
か何とも分りませんの意。然してこの歌の裏の意は、源氏の君は始終あちらへ往つたり、こち  
らへおとづれなされたりして、私と長閑にお話し申すひまもないのですから、君は深い情で私  
を愛して下さつてゐるのかどうかは、少しもわかりません。

評

前からだん／＼と陰惨な物語がつづいたので、この段に至つてからは無邪氣な紫上の姿を描  
いて、はなやかな氣分をよび起してゐる。

今日も、所もなく立ちこみにけり。馬場のおとどのほどに、立てわづらひ

○今日も云々——これか  
ら以下の記事は見物に出

てからの事を記す。  
○所もなく——物見車が  
陸もなく。

○馬場のおとど——左近  
馬場は一條西洞院、右近  
馬場は一條大宮、乙殿屋  
(おとど)は左近の馬場に  
あり、五月の騎射に中少  
將の着座する所。

○立てわづらひて——源  
氏の車を立て困つて。

○やすらひ——躊躇す  
る。

○よろしき女車——可な  
りよい女車。

○乗りこぼれたる——多  
くの女どもが一つ車に乗  
つて、袖口などがこぼれ  
るほど出てゐるのであ  
る。

○人を招き寄せて——源  
氏の供人を。

○ここにやは立たせ給は  
ぬ所さり聞えむ——茲處  
に源氏の御車を立てられ  
ないか、私の場所をさけ  
てお譲り申しませう。  
○いかなるすきもの——

て、上達部の車ども多くて、物騒しげなるわたりかな」とやすらひ給ふに、

よろしき女車の、いたう乗りこぼれたるより、扇をさし出でて、人を招き

寄せて、「ここにやは立たせ給はぬ。所さり聞えむ」と聞えたり。いかなる

すきものならむと思されて、所もげによきわたりなれば、引き寄せさせ給

ひて、「いかでか得給へる所ぞと、ねたさになむ」とのたまへば、よしある

扇のつまを折りて、

「はかなしや人のかさせるあふひゆる神のしるしのけふを待ちける

しめの内には」とある。手を思し出づれば、かの源内侍のすけなりけり。

あさましう、ふり難くも今めくかなと、にくさにはしたなう、

かさしけるころぞあだにおもほゆる八十氏人のなべてあふひを

女ははづかしと思ひ聞えけり。

今日も物見車が隙もなく立ちこんでゐる。馬場の乙場屋のあたりに、何處かに車をとどめる

場所がないかと見さがして、源氏「公卿どもの物見車があまりに多くて、物騒しいところであ  
るかな」と言つて躊躇してゐられた。すると、可なり上品な女車で、澤山の女房どもが乗つて

どんな物敷奇な女であらうか。  
 ○引き寄せさせ給ひて—源氏は自分の車を彼の女の所に引きよせなされて。

○いかで得給へる所ぞ—どうしてこのやうな好い場所をお取りになつたのかと、妬ましく思ひますから、遠慮せずに退いていただきます。これ勿論戯談である。

○扇のつまを折りて—扇のはしを折つて、これに歌を書いた手紙を載せて出したものであらう。

○はかなしや人の云々の歌—補欄参照。  
 ○しめの内には—他人が注連(シメ)を張つて占有してゐる内には立ち入られませんまい。即ち他人のものであるあなたには私どもは何ともいたし方がない。  
 ○ふり難くも—年は老いてもまだ若い氣でゐる

袖どもがこぼれ出てゐる車の中から、扇をさし出して、源氏の君のお供の人達を招き寄せ、女房「此處へ源氏の車を立てられませんか、私のこの場所をおゆづり申してあげませう」と言葉をかけた。源氏はこれをお聞きになり、どのやうな物敷奇な女であらうかとも思はれたし、又車をとどめる場所もまことにないときであつたからして、御自身の車をそこへ引き寄せられて、その女に對し、源氏「どうしてこのやうなよい場所をおとりになりましたか。あまりうらやましく思ひますから、お言葉の通りに譲つていただきます」と仰せられた。すると女は由ありさうな扇の端を折つて、次の歌を書いたものをさしだした。

はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のしるしのけふを待ちける

神垣の注連繩の内では、お逢ひ申すことはとても出来ないでせうか。(即ち源氏の君は既に他の女の主となつてゐられるから、私ども何ともいたし方がありません)と書いてあつた。その筆蹟からして考へて見ると源の掌侍であつた。彼の女は今や年も老いた身でありながら、まだ若々しい氣で、はでやかなことをするのであるかと源氏が思召しになると、無遠慮にすぎない調子で、源氏の君は一首の歌をよまれた。

かざしけるころぞあだにおもほゆる八十氏人のなべてあふひを

と。源の掌侍は恥づかしいことだと思つた。

補 ○はかなしや人のかざせるあふひ云々の歌—今日は葵の祭でありますから、世人は逢ふ日といふ葵を頭にかざしてゐます。私も今日こそは神の御靈験によつて、源氏の君にお逢ひ申さ

ことかなと。  
 ○はしたなう—無遠慮に。  
 ○かざしけるころぞ云々の歌—補欄参照。

○くやしきもかざし云々の歌—補欄参照。  
 ○人とおひ乗りて—源氏と紫君とは同乗され

て。  
 ○心やましう—草子地である。人々の心をさす。  
 ○一日の御ありさまの—御談のあつた當日の、源氏の君の端麗な姿。  
 ○誰ならむ—源氏と同乗する女は誰であらうか。源氏の君と同乗する位の人だから立派な女に違がないと。  
 ○けしうはあらじはや—

れると思つて待つてゐましたが、その甲斐もなく、源氏の君には既に紫上と御同車なされてゐられるために、お逢ひ申すこともかなはぬと妬んでよんだのである。○かざしける心ぞあだに云々の歌—八十氏人(多くの人々)が誰もく葵をかざしてゐる。さうして誰もく人を選ばずに、何れの人にも逢ふ日だと思ふと、その人たちの心はあだくしく思はれる。御身が葵をかざしてゐるのも、源氏一人に逢はうといふのではなく、多くの人々に逢はうとの心であらうから頼もしくも思はれない。

くやしきもかざしけるかな名のみして人だのめなる草葉ばかりを

と聞ゆ。人とおひ乗りて、簾をだに上げ給はぬを、心やましう思ふ人多かり。一日の御ありさまの麗しかりしに、今日はうちみだれて、ありき給ふかし。誰ならむ。乗りならぶ人けしうはあらじはやと、推しはかり聞ゆ。いどましからぬかざし争ひかなと、さうくしく思せど、かやうにいとおもからぬほどの人はた、人あひ乗り給へるにつつまれて、はかなき御答も、心安く聞えむもまばゆしかし。

源典侍は恥しかつたので、

くやしきもかざしけるかな名のみして人だのめなる草葉ばかりを

「悪くはないだらう。勿論女の身分のことではなくて、容姿のことをさす。〇いどましからぬ云々！」「かざしを題にした歌の争ひごとも、あまり好ましからぬ争ひごとである。」

〇かやうにいとおもからぬほどの人はた——源氏は、源典侍ほど厚がましくない人達の車には何かいひよりたいが、それ等の人も又、源氏には同乗の人があるのに遠慮せられて。

〇人あひ乗り給へる——同車の女のあるのに遠慮せられて、何でもない一寸した御返事さへ。〇まばゆし——恥づかしい。

奏

と御答へ申した。源氏は紫上と御同乗なされて、車の御簾をさへも上げなさらないので、人々には不愉快に思ふてゐるものが多かつた。先日の御喪當日の源氏の君の御姿は、端麗でゐられたのに、今日は又打ち亂れた姿で歩きなされることであるかな。君と同乗してゐる女は誰であらうか。同乗してゐる女はきつと容姿の悪くない美人に違ひないと、誰も推量申したのである。源氏は源典侍とかざしを題にした歌の争ひも好ましからぬ争ひであつたと無興に思召された。さうして源典侍ほどあつがましくない女どもの車には、何か言ひよりたいことどもがあつたが、他の車に乗つてゐる女どもは又、源氏の君は紫上と同車してゐられるのを見て、紫上とは分らないが、君と同乗する位の女だからして、きつと立派な女であるに違ひないと遠慮せられて、一寸した御返事さへ打ち解けて申し上げるのが恥しくて、何とも申すものがなかつた。

補

〇くやしきもかざしけるかな云々の歌——葵は逢ふ日であると思つて、頭にかざしてゐたが、それは單にあふひと言ふ名ばかりで、人をして空しいたよりと思はせた草葉にすぎなかつた。それとも知らずかざしてゐたとはくやしきことであつた。〇おもからぬほどの人はた——宗祇云ふ「源内侍がごとく面つよき人ならぬ別の女車に、源氏より歌などおくり玉へど紫の上と同車なるにつつまれて打ちとけたる御いらへもせぬと也」と、(不審抄出)

悲惨な車争ひのことから轉じて、前段には無邪氣な美しい童姿の描寫をなし、この段に至りては直ちに又轉じて滑稽なかさし争ひを出してゐる。讀み來り讀み去つて盡きざる興趣をおぼゆ。

一七八

〇御息所——六條御息所。

〇つらき方に云々——源氏をいよ／＼薄情な方だと思ひあきらめられたが。

〇今はとてふりはなれ——今は限りとして振切つて伊勢へ下るのも。

〇世の人ぎきも——源氏に捨てられたと、世間の人に聞えても物笑ひにならうかと思召す。

〇さりとして立ちとまるべく——それだからとて、京にとどまらうと思へば。

〇かくこよなきさまに——このやうにひどく世人からかろんじられる。

〇釣する海士のうけなれや——古今集戀一に、「伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる」の歌をさす。うけは釣につかふ浮きのこと。〇けにや——故にや。

御息所は、物を思し亂るる事、年頃よりも多く添ひにけり。つらき方に思ひはて給へど、今はとてふりはなれ下り給ひなむは、いと心ほそかりぬべく、世の人ぎきも人わらへにならむ事とおぼす。さりとして立ちとまるべくおもほしなるには、かくこよなきさまに、みな思ひくたすべかめるもやすからず。釣する海士のうけなれやと、おきふし思しわづらふけにや、御心地もうきたるやうに思されて、なやましうし給ふ。

六條御息所は、あれやこれやと心配なされることは、近年よりもことになつて來た。源氏の君は薄情な方であるといよ／＼決心はなされたものの、さりとして源氏の君との縁をすつかり振り切つて伊勢の方へ下つてしまふといふのも、何となく大へん心細くあるだらう。といつてこのまま都に立ちとどまつてゐようと思はれると、又只今のやうに世人からこのやうにひどくかろんじられるのも心苦しいことである。まことに吾が身は「伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる」といふ古歌のやうに釣するよきの浮きの如く、心もあちこちと浮いたやうであると、寢てもさめても思ひ惱んでゐられた。そのためであつたか、六條御息所は御心地が何だか、ふら／＼と浮き立つて落着きがないやうで、惱ましいさまをしてゐられる。

奏

一七九

○浮きたるやうに思され  
て——心地も落着かず、  
ふら／＼と浮いたやう  
で。

○大將殿には——源氏に  
は。  
○下り給はむことを——  
御息所が伊勢に下向なさ  
ることを。  
○もてはなれて——先方  
のいふことと全然かけは  
なれて。  
○数ならぬ身を見まうく  
云々——つまらない我を  
嫌ふのも最もなことであ  
るけれども。  
○今はなほいふかひなき  
云々——やはりつまらぬ  
我でも、つまらぬ男とし  
て末永く見届けて下さる  
のが、あさからぬ御親切  
であります。  
○聞えかかづらひ——言  
ひからんで仰せられるの  
で。

○定めかね給へる——御  
息所も決心しかねて、惱  
みの心も慰むかと。  
○立ち出で給へりし——  
見物に出でられた所が。  
○御禊河の荒らかりし——  
御禊の日に車争で受け  
た辱めの爲めにの意。瀬  
はその折にの意で川の縁  
語。  
○大殿——奏上。  
○御歩行など便なき頃——  
源氏は方々の女房のも  
とへ、忍びあるきなさる  
のも、不都合なときであ  
つたから。  
○二條院にも時々云々——  
紫上のもとへもたまさ  
かにしか行かれなかつ  
た。  
○さはいへど——奏上と  
は平素隔意があつたとい  
ふもの。  
○やむごとなき方——大  
切にしてゐられたことは  
格別であつた奏上が。  
○めづらしき事——御姫  
姫。

奏

一八〇

○釣するあまのうけなれや——古今和歌集戀歌一にある「伊勢の海に釣するあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる」の歌をさしたのであるが、この奏の意は「戀する自分の心は、伊勢の海に釣する獵師の使ふ罟子であらうか。自分はどうか／＼と浮かれて、どうしようかかうせようかと、我が心一つを決しかねて迷うてゐることだわい」の意。

大將殿には、下り給はむことを、もてはなれて、あるまじきことなども、  
さまたげ聞え給はず。數ならぬ身を、見まうく思し捨てむもことわりなれ  
ど、今はなほいふかひなきにても、御覽じはてむや、浅からぬにはあらむ  
と、聞えかかづらひ給へば、定めかね給へる御心もや慰むと、立ち出で給  
へりし、御禊河の荒らかりし瀬に、いとどよろづいとうく思しいられたり。

源氏の大將は、六條御息所が伊勢に下向なさうとされるのを、それはとんでもないことで  
あると御止めにはならない。唯源氏は「我は數にもならぬつまらぬ身であるから、汝が見捨て  
るのも無理からぬことであるが、それでもやはり、つまらぬ我をもつまらぬ男としないで末永  
く見届けてくれるのが、浅からぬ御親切であります」と、言ひからんだやうに仰せられるも  
のであるから、斯く言はれては源氏のなさにほだされて、御息所では何としてよいか、定め  
かねてゐられた。かうした心配が、もしや慰められるかと、御息所はおでかけなされた御見

物の日には、思ひもよらぬ荒々しい車争ひが起つて、一層萬事のことどもを心憂く思ひ苦し  
まれた。

「數ならぬ身を、見まうく思し捨てむもことわりなれど云々」と仰せられた源氏の君の心に  
は、御息所に對する未練が十分にあらはれてゐる。又高貴な源氏の君からかうしたありがたい  
言葉をいただいた御息所がさだめかねてゐるあたりも、情にほだされる可憐な女性の心理を描  
寫してゐる。

大殿には、おんもののけめきて、いたくわづらひ給へば、誰も／＼思しな  
げくに、御歩行など便なき頃なれば、二條院にも時々ぞわたりたまふ。さ  
はいへど、やむごとなき方は、殊に思ひ聞え給へる人の、めづらしき事さ  
へ添ひ給へる御惱なれば、心苦しう思しなげきて、御修法や何やなど、わ  
が御方にて、多く行はせたまふ。もののけ、生靈、などいふもの多く出で  
來て、さまざまの名のりする中に、人にも更にうつらず、ただみづからの  
御身につと添ひたるさまにて、殊におどろ／＼しうわづらはし聞ゆる事も  
なけれど、また片時離るる折もなきものひとつあり。いみじき驗者どもに  
も隨はず、しうねき氣色、おほろけの物にあらずと見えたり。

奏

一八一

○心苦しう思しなげきて  
源氏が。  
○わが御方にて云々——  
源氏の方にて御祈禱な  
どせられる。  
○もののけ生霊などいふ  
云々——よりましといふ  
身代の人を、病人の側に  
置きて祈れば、死霊、生  
霊は大體病人から離れて  
よりましに移るのであ  
る。  
○人にも更にうつらず—  
病人にじつとついでる  
ばかりで。  
○ただみづからの御身に  
云々——御本人葵上にし  
つかとついでて、特別  
に恐ろしく病人をなやま  
すといふこともなく。  
○驗者——修驗者、祈禱  
などでものけなど調伏  
する祈禱僧。  
○おぼろけの物——並大  
抵な物怪。

葵上はもののけにつかれたやうで、ひどく御病氣で苦しくなやんでゐられたので、誰もく  
御心配申し上げてゐたときであるため、源氏の君も御忍びあるきに女房のもとをあちこちとさ  
まよひあるきなさるのも不都合な折であつた。そのために君は二條院の紫上のもとへも時たま  
に通ひなされた。源氏は平素葵上とは隔意があつたといふものの、大切になさることは殊別  
でゐられた葵上が、御病氣の上に更に妊娠といふ御憐れも加はつてゐられるので、葵上の身の  
上に萬一のことどもがあつては大變だと思召しになり、御祈禱やら何やらと、源氏は御自分の  
御住居でいろ／＼ととり行はせられた。もののけとか生霊とかいふものが澤山出て来て、さま  
／＼な名のりをする中で、決して身代の人に移らないもので、ただ葵上の身にびつたりとりつ  
いてゐるものがあつた。それは特別に恐ろしいさまに葵上を苦しめるといふわけではないが、又  
寸時も葵上から離れることなくまはつてゐる一つのものであつた。非常に尊い祈禱僧などの  
調伏に應じない執念ぶかいさまは、並大抵のものではなからうと思はれた。

○人にも更にうつらず、ただみづからの云々——花鳥餘情に「これは御息所の生霊なり。よ  
りましにもうつらぬなり。ひとはいかにかかるなからひにはなさけあるべき事也。まめやか  
にみそぎのあかりしより、かかる怨靈になりたまへるなり」と見えてゐる。

源氏物語中の物おそろしきもの一つである六條御息所の生霊の事件がこれから始るのであ  
る。

○御かよひ所——源氏の  
通ひなさる先の女。  
○思しあつるに——左大  
臣はじめ、その方の人々  
が推察せられるのであ  
る。  
○この御息所、二條の君  
は。——六條御息所や、紫上  
は。  
○おしなべてのさまには  
云々——源氏が深く思つ  
てゐられるから。  
○恨みの心も——葵上に  
對する怨恨も深からう  
と。  
○さざめきて——その生  
霊ではないかとささやき  
あつて。  
○物など問はせたまへど  
——葵上の方では占にか  
けて尋ねられたが、これ  
とよく言ひあてるものが  
ない。  
○わざと深き御かたきと  
聞ゆるもなし——葵上に  
對して、是ぞと特に深い  
怨を抱いてゐるものもな  
い。

大將の君の御かよひ所、ここかしこと思しあつるに、「この御息所、二條の  
君などばかりこそは、おしなべてのさまには思したらさざめれば、恨みの心  
も深からめ」とさざめきて、物など問はせたまへど、さして聞えあつるこ  
ともなし。もののけとても、わざと深き御かたきと聞ゆるもなし。すぎに  
ける御乳母だつ人、もしは親の御方につけつつ、傳りたるもの、よわめ  
に出で來たるなど、むね／＼しからず亂れあらはるる。ただつく／＼とね  
をのみ泣きたまひて、折々は胸をせきあげつつ、いみじう堪へがたげにま  
どふわざをしたまへば、いかにおはすべきにかと、ゆゆしう悲しう思しあ  
わてけり。

左大臣家の人々は、源氏の大將の御通ひなさる女のところは、此處か彼處かと推察して見ら  
れるに、「この六條御息所と、二條院の紫上などばかりこそは、なみ／＼ならず思しめしてゐら  
つしやつたやうであるから、是等の方々は葵上を恨まれる御心も深いことであらう」と、ささ  
やきあつて、今度のものけ、生霊は一體誰の怨靈がするものであらうかと、葵上の方では占  
トのものに問ひなさつたが、さしてそれと言ひあてるものもない。葵上に對するものけと言  
つても、これぞと言つて深き仇敵のものもない。亡くなつた御乳母のやうな人や、或は左大臣

家先祖代々に怨みを持つ死靈などが、今回の葵上の病氣といふ弱目に乗じ、打ち亂れてたたりをなすので、何れもたいしたものではない。

ただ葵上は思ひなやんださまで、さめくと泣きなされて、時々胸をせきあげながら、非常に堪へられないやうに身を悶えられるので、さては死なれるのではなからうかと、左大臣家の人だちは不吉に悲しみ思うて騒がれた。

補

○よわめに出で來たるなど——玉の小櫛に「此下にぞもじあるべし」とある。

評

「すぎにける御乳母だつ人、もしは親の御方につけつつ、傳はりたるもの云々の句は、今日にては一寸考へられぬことであるが、當時は斯うした考へがあつたのである。

院よりも御とぶらひひまなく、御祈禱のことまで、思しよらせたまふさまの、かたじけなきにつけても、いとどをしげなる人の御身なり。世の中あまねく惜み聞ゆるを聞きたまふにも、御息所はただならずおぼさる。年頃は、いとかくしもあらざりし御いどみごころを、はかなかりし所の車あらそひに、人の御心のうごきにけるを、かの殿には、さまでも思しよらざりけり。かかる御物思のみだれに、御心地なほ例ならずのみ思さるれば、ほかにわたり給ひて、御修法などせさせたまふ。

○すぎにける御乳母だつ人云々——死んだ乳母のやうな人とか、又は左大臣家代々に恨みのある死靈などが、このやうな弱目に乗じて、うち亂れてあらはれるので。  
○むねくしからず——たいしたものではない。  
○ただつくくと——葵上の容態。  
○いかにおはすべきにかと——葵上の命もあやぶきにやと。  
○思しあわてけり——左大臣殿大宮など。  
○院——桐壺院。  
○人の御身なり——葵上の御身である。  
○世の中あまねく惜み聞ゆるを——世間一般の人々が葵上をお惜み申すといふことを。  
○御息所はただならず——六條御息所は妬ましく思ひなさる。  
○御いどみごころ——葵上と御息所との嫉妬心。

補

桐壺院からも葵上の御病狀についてひまなくお尋ねになり、御祈禱のことまでも親切にお世話をなされた。そのかたじけない思召についても葵上は一層惜むべき御身の上である。

世上の人々がすべて葵上を惜み申すことを聞くについても、御息所は一方ならず妬ましく思召された。近年來は葵上と御息所とは、かくまでひどく嫉妬しあふことはなかつたのが、一寸としたことから車争ひの事件が起り、そのために御息所は非常にねたましく思つてゐられた。けれどもかうしたことは葵上の方では、それほど思ひつかかなかつた。

御息所はかうした心痛に心が亂れてしまひ、御氣分もやはり普通とは變つてゐられたので、他所に移つて御修法などを修せられた。

補

○ほかにわたり給ひて御修法など云々——河海抄卷五に「大神事には佛事をいむゆへにほかにて修法をおこなはるるなり」と見える。

大將殿聞き給ひて、いかなる御心地にかと、いとほしう思し起してわたりたまへり。例ならぬたび所なれば、いたう忍びたまふ。心よりほかなるおこたりなど、罪ゆるされぬべく聞えつづけ給ひて、惱みたまふ人の御有様も、うれへ聞え給ふ。「みづからはさしも思ひ入れ侍らねど、親達のいとことくしう、おもひ惑はるるが心苦しさに、かかる程を見過さむとてなむ。

○はかなかりし所の車あらそひに——一寸した車争のことからして、御息所の方では非常にくやしと思つてゐられたが、葵上の方ではそれは氣づかなかつた。  
○かかる御物思——御息所の。  
○ほかにわたり給ひて——齋宮と同居では、佛法に關することは忌むことであるから他所に移つて御修法があつた。

○わたりたまへり——源氏が御息所の見舞に行かれた。  
○例ならぬたび所——御息所は御修法のために、常の御殿ではなくして假の住居にゐられたから。  
○いたう忍びたまふ——源氏はひどくこつそりと訪ねられた。

○心よりほかなる云々——意外な御無沙汰をしたが、それをゆるされるやうに。

○備みたまふ人——病氣である葵上。

○うれへ聞え給ふ——自分の憂を訴へる。

○みづからは云々——我源氏は病人葵上をさほどまでも心配もしません

が、親達あまりひどく心配してゐるのが氣毒でありますから、當分だけは病人の側で看護してやらうと思つてゐます。それで萬事の御無沙汰を感しからず御ゆるし下さるならばまことに嬉しうございます。

○御氣色を——源氏の。○見奉りたまふ——御息所が。

○うちとけぬ朝ぼらけ——互に遠慮がちで物語もなかつた曉に。

○御さまのをかしきにも——源氏の姿の美しきについで。

よろづを思しのどめたる御心ならば、いと嬉しうなむ」など語らひ聞えたまふ。常よりも心苦しげなる御氣色を、ことわりにあはれと見奉りたまふ。うちとけぬ朝ぼらけに出でたまふ御さまのをかしきにも、なほふり離れなむ事はおぼしかへさる。

源氏の大将は、六條御息所の御様子をお聞きになつて、どのやうな御氣分であられるのかと、大へん御氣毒に思しめされて訪問なされた。御息所は御修法のために常の御殿ではなくして、假の御住居にゐられた折であつたからして、源氏もひどくこつそりとわたられた。さうして我源氏は意外な御無沙汰をながくしたが、どうかその罪もゆるされるやうに體裁よくお詫びなされた。又葵上の病氣のために困つてゐることをもなげかれた。さうして仰せられるには、源氏「自分としては葵上の病氣をそれほどまでも心配してゐるわけではありませんが、彼女の親達かひどく仰々しく心配してゐるのを見ると氣毒に思はれますので、彼女の病氣の間だけは側で看護してやらうと思ひます。それで萬事の御無沙汰を感しからず御ゆるし下さるならば、まことにうれしいことでございます」など申された。ふだんよりも心苦しうにしてゐられる源氏のみ姿を、この際ごもつともなことでであると、御息所は眺められた。互に遠慮がちにし、うち解けた物語りもなくして一夜を明しなされた。源氏が朝出かけられる美しい姿についても、御息所はやはりこの源氏とふり離れて伊勢下向する

のを名殘惜しいことだと思ひとどまりなされた。

一世の美男の貴公子源氏が、一女性とうちとけぬ一夜の困苦しさに、あけはなれる空をながめて別れ行かれるところ、まことに一幅の詩的畫である。然もその背後にはあきらめんとしてあきらめ得ぬ御息所のあるを思ふとき、眞に詩的場面を現出してゐる。

○やむごとなき方に云々——大切な葵上の方に、御姫殿といふことが出来て、源氏の君の御心も一層引きつられることが出来たから云々と。これ御息所の御心である。○ひとつ方に思し静まり——源氏も結局は、葵上一人をおまもりなさるやうになるだらうに。○かやうにまち聞えつつあらむ——かくの如く源氏の途絶えがちであるのを吾(御息所)が御待ち申してゐるのも。○なか／＼物思ひの驚かざる心地——却つて忘れようとしてゐた心配事が新に氣になるのである。○日頃少しおこたるさま

やむごとなき方に、いと志そひたまふべき事も出て來にたれば、ひとつかたに思し静まり給ひなむを、かやうにまち聞えつつあらむも、心のみ盡きぬべきこと、なか／＼物思ひの驚かざる心地したまふに、御文ばかりぞ暮つ方ある。「日頃、少しおこたるさまなりつる心地の、俄にいと苦しげに侍るを、えひきよがでなむ」とあるを、例のことつけと見給ふものから、袖ぬるる戀路とかつは知りながらおりたつ田子のみづからぞうき山の井の水もことわりに」とぞある。御手はなほ、ここの人のの中にすぐれたりかしとうち見給ひつつ、如何にぞやもある世かな。心も容貌もとどりに捨つべきもなく、また思ひ定むべきもなきを、苦しうおぼさる。

御息所が思ひ出されるには、源氏の君には最早、大切にされてゐられる葵上の方に、一層御志



なりつる云々——快き方であつた病人が。  
○えひきよがでなむ——出ぬけにくく。  
○例のことつけと云々——御息所は、源氏のいつもの如き口實と思ひなさるが。  
○袖ぬるる懸路とかつは云々の歌——補欄参照。  
○山の井の水もことわり六帖にある「くやしきぞ波みそめてける浅ければ袖のみぬるる山の井の水」による。その意は「悔しくも懸し初めたことである。御志が浅いので私の袖はぬれてばかり居ります」  
○御手は——御筆蹟は。○如何にぞやもある世かな——一體世の中といふものはどうしたものであるのか。

奏

をひきつけられる御妊娠の慶事も出来なかつたのであるからして、もう葵上のごとばかりを愛しなさるのであらうに、かやうに私(御息所)が源氏の御出でなさるのをお待ち申してゐるのもただ心の苦しめられることである。たまさかにお訪ね下さるのは却つて忘れようとしてゐた心配事が、新に思ひだされるのであつた。かくとお思ひに耽けつてゐられるときに、日も暮れようとする頃、源氏の君のもとから御手紙だけがあつた。その御手紙には「この數日來は、病人も少し快方に赴いたやうでありましたが、又急に苦しいやうに病むさまでありますので、手ばなしがたい状態であります」と書いてあつた。これを見られた御息所は、これは源氏のいつもなさる口實であるとは思召しながら、御息所からは、

袖ぬるる懸路とかつは知りながらおりたつ田子のみづからぞうき  
「くやしきぞ波みそめてける浅ければ袖のみぬるる山の井の水」と古人の詠んだのも、今の吾が身に引きくらべられて、尤なことだと思はれる」と、御返事があつた。この御手紙の御筆蹟は、やはり多くの女房方に比べて、なか／＼すぐれたものであると源氏は感心して見られた。さうして世の中といふものは、一體どうしたものであらうか。心だてといひ、容姿といひ、それ／＼取りどころはあるが、さればと言つてその女を、おのが終生の妻に定めようとする、どうも妻としてもよいと思はれる女はないのを、源氏はただ一人心苦しう思しめされるのである。

○袖ぬるる懸路とかつは云々の歌——どうせ涙で袖をぬらすやうになる悲しい懸の道とは知りながら、その悲しい懸の道にだん／＼と深く落ちこんでゆく吾が身はまことに悲しいことであるの意。懸路を泥土(こゝろ)にかけ、みづからのみづを水にかけてゐる。田子は農夫をいふ。

○袖のみぬるるやいかに云々——袖ばかりがぬれると仰せられるが、それは御志の薄情でゐらせられる御小言でありませう。  
○あさみにや人のおりたつ云々の歌——補欄参照。  
○おぼろげにてや——葵上の御病氣が大體よろしいやうであるならば。  
○大殿——葵上をさす。  
○この生霊——六條御息所の生霊。  
○父大臣の御霊——御息所の亡父の御霊。  
○思しつづくれれば——御息所が思ひだしてごらんになるには。  
○人をあしかれなど——葵上には凶事があればよいなどと思ふこと。  
○物思ふにあくがるなる云々——物思に耽ける人

一八八

おんかへり、いとくらうなりにたれど、袖のみぬるるやいかに、深からぬ御かごとになむ。

あさみにや人のおりたつ我かたは身もそぼつまでふかきこひちを

おぼろげにてや、この御かへりを、みづからきこえさせぬ」などあり。大殿には、おんもののけいたく起りて、いみじう煩ひ給ふ。この御生霊、故父大臣の御霊などいふものありと聞き給ふにつけて、思しつづくれれば、身一つのうきなげきよりほかに、人をあしかれなど思ふ心もなければ、身ふにあくがるなる魂魄は、さもやあらむと思し知らるる事もあり。

御息所のもとへお送りになる源氏の君からの御返事は、その日も暮れて大へん暗くなつたがお送りになつた。源氏「あなたは袖ばかりがぬれると仰せられるのでありますね。それではあなたは薄情な御小言でありませう。

あさみにや人のおりたつ我かたは身もそぼつまでふかきこひちを  
葵上の病氣が大體よい方であるならば、葵上して御返事を申上げないやうなことがありませう

奏

一八九

の魂はあくがれ出るといふが。

葵

一九〇

か、そんなことはしません。けれども只今は重病でありますから、参上して御返事を申し上げます。それがないのであります。などと書かれてあつた。

葵上の方では御もののけが大へんに起つて、非常にわづらつてゐられた。斯くわづらつてゐられるのは、この御息所の生霊や、御息所の亡父の死霊などが、たたりをなすのであるといふ噂を御息所がお聞きになつた。そこで御息所は考へられるには、我が身一つの心憂きなげきをしたことはあるが、それよりほかに他人に凶事あれと思つたことはないが、物思ひに沈むときは人の魂はあくがれ出るものであるといふからして、或はわたくしの魂があくがれ出て御息所をなやましてゐるのではなからうかと、胸に思ひあたることもあつたのであつた。

**補** ○あさみにや人のおりたつ云々の歌——あなたは袖ばかり位ぬれるやうな浅い所に、おり立つてゐられるのであります。私は袖ぐらゐのわけではなく、全身が沈んでびしょぬれになるほどの深い戀に沈んで居ります。

**評** ここにある源氏の君の「あさみにや人のおりたつ我かたは云々」の歌は、前段にあつた御息所の「袖ぬるる戀路とかつは知りながら云々」に比べて眞情のこもつたところが少い。勿論、御息所の「袖ぬるる戀路とかつは知りながら云々」の歌は、細流抄には「御息所の歌、此物語第一の歌と云々」と言つてゐる通りに、稍年も老いてゐられる御息所、然もたのむ夫に死に別れ、愛女を擁してゐられる境遇にある御息所としては、理性に富んでゐられたことがあらはれてゐる。「袖ぬるる戀路とかつは知りながら」といふ「かつ」の語には、萬斛の悲しさがおさめられてゐる。

なほこの歌は、伊勢物語にある「つれづれのながめにまさる涙川袖のみひちてあふよしもなし」かへし「浅みこそ袖はひづらめ涙川身さへながるときかばたのまむ」とある歌の意によつたものである。

○よろづに思ひ残す事なく——爲さぬ心配もなく。○かうしもくだけぬを——かくまでに煩悶はしなかつたのに。○はかなき事の折に——一寸した事件ではあつたが、即ち御成の時の車争ひのことがあつてから。○ひとふしに——一筋に。一途に。○けにや——故にや。○かの姫君——葵上。○ひきまささぐり——ひきかき廻し。○ひたぶる心——ひたすらそれに熱中して、何ごとも顧慮せぬ心。○うちかなぐる——あらかにひきよせること。

年頃、よろづに思ひ残す事なく過しつれど、かうしもくだけぬを、はかなき事の折に、人のおもひけち、なきものにもてなすさまなりしみそぎの後、ひとふしに憂しと思しうかれにし心、しづまり難う思さるるけにや、少しもうちまどろみ給ふ夢には、かの姫君とおぼしき人の、いと清らにてある所にいきで、とかくひきまささぐり、現にも似ず、たけく厳きひたぶる心いできて、うちかなぐるなど見え給ふ事、度重りにけり。あな心うや。實に身を捨ててやいにけむと、現心ならず覺え給ふ折々もあれば、さならぬことだに、人の御ためには、よきさまのことをしも、いひ出てぬ世なれば、ましてこれは、いと能く言ひなしつべき便なりと思すに、いと名たたしう、

**釋** 數年來といふものは、御息所はあれやこれやについて爲さぬ心配もなく、苦勞して來られた

葵

一九一

○あな心うや——御息所の心。  
 ○實に身を捨ててやいにけむと——魂が御息所の體から脱け出でて、天上のもとに行つたのであらう。  
 ○さならぬことだに——さもないことでも。  
 ○人の御ためには——惣じて人の身のためにはよき事はいはないで、悪いことをいふものである。  
 ○ましてこれはいと能く云々——御息所の生靈になり給へるなどいふことは、世人もよく語るによいたよりであると思しめされる。  
 ○名たたし——評判せられるであらう。

のであるが、只今のやうにも煩悶したことはなかつた。それが一寸した事件ではあるが、御稔のときの車争ひについて、世人はあまりに輕蔑し、吾を物の數にもないさまにもてなしたことからして、吾も一途に恨めしいといふ心が動きだして、何ともしやめられ難く思しめされた爲めであつたか、一寸でもうつとりと假睡なされる際の夢には、かの葵上であらうと思はれる方の、まことに美しくしてゐられる所に行つて、あたりにあるものを、とやかくとひきかき廻し、平常にも似ない、たけくしく嚴めしい、ひたすら恨みを晴さないでは止まないといふ心持になつて、あららかにひきつかみかかるなどの夢を見られることが度かさなつた。かうした際に、御息所は嗚呼心配である。まことに、古歌に「身をすてて行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり」と詠まれてゐる通りに、心といふものはとかく、この吾が身を打ち捨てて他へ浮かれ出るので、思ふにまかせぬはこの我が心であると、現心もせず夢のやうに思しなざる折もしばくであつた。

補

○實に身を捨ててやいにけむ——古今集雜歌下の「人をとはで久しうありけるをりに、あひて怨みければよめる」と詞書して、「身をすてて行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり」といふ古歌によつて書いたものである。○名たたし——一本には「名だたしう」とある。些の道義的觀念もなく、ただ情の奔放するにまかせてゐた平安朝の時代としては、御息所の「あな心うや、實に身をすててやいにけむと、現心ならず覺えたまふ折々もあれば云々」と言つてゐられる恨みの情こそ、當時の女性の通有性であつただらう。

ひたすら世になくなりて後に、うらみ残すは尋常の事なり。それだに人の上にては、罪深うゆゆしきを、現の我身ながら、さるうとましき事をいひつけらるる、宿世のうき事、すべてつれなき人に、いかで心もかけ聞えじと思しかへせど、思ふも物をなり。

補

全然この世から死に去つてしまひ、死靈となつてこの世に恨みを残すといふことは普通世間にあることである。それでも恨まれる他人の身の上となつて考へて見れば、罪業深い、いまはしい心だと思はれる。然るを現在この世に生きてゐる自分の身でありながら、怨靈を人の身にかけるなどと疎ましいことを噂されるとは、前世からの因縁も悪いのであつたと心憂くなる。これについても私は、かの薄情でゐられる源氏の君のことは、すつかり忘れてしまひ、心中からあきらめようと、幾度も幾度も思ひなほすのであるけれども、古歌にある「思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はじやなぞ」といふやうに、何としてもあきらめられない。○思ふも物をなり——奥入には「思はじと思ふも物を思ふ也思はじとだに思はじやなぞ」と

○ひたすら世になくなりて後に——死後に怨恨を残して、たたりをなすなどいふことは、世にありふれたことであるが。  
 ○それだに人の上にては——さやうなことが他人の身の上にあるのさへ厭なことと思ふに。  
 ○現の我身ながら云々——現在の自分に、さやうな縁なことがあると言はれるのは。  
 ○つれなき人に——薄情な男といふことで、ここでは源氏。  
 ○思ふも物をなり——「思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はじやなぞ」といふ奥入にある古歌。

記し、河海抄もこれを引用してゐるが、眠江入楚には、河「おもはじと思ふも物を思ふなりおもはじとだにおもはじやきみ」と書き、河海抄より引きたりといひながら末の句が少し異つてゐる。

評 「いかで心もかけ聞えじと思しかへせど、思ふも物をなり」の一節には、御息所の悶々の惱みがよくあらはされてゐる。

齋宮は、去年うちに入り給ふべかりしを、さま／＼さはる事ありて、この秋入り給ふ。九月には、やがて野宮にうつろひ給ふべければ、ふたたびの御禰のいそぎ、取り重ねてあるべきに、ただあやしくほけ／＼しうて、つく／＼と臥し惱み給ふを、宮人いみじき大事にて、御祈禱などさま／＼仕うまつれる。おどろ／＼しきさまにはあらず、そこはかたなくわづらひて、月日を過したまふ。大將殿も、常にとぶらひ聞え給へど、まさる方のいたう煩ひたまへば、御心のいとまなげなり。

御息所の御娘の齋宮の君は、去年の間に参内なされて宮中の左衛門府にお入りなされるべきであつたのを、いろ／＼と差支へることがあつて、今年の秋になつて御参内になつた。九月には更に宮中から野宮の方へ御移りなされるべきであつたので、野宮にゐらせられる前に、二回の御

○齋宮は云々——齋宮に立たれると、まづ二回の御禰があつて宮中の左衛門府に御入内され、野宮に入り給ふにも、その前に二回の御禰がある。  
○野宮——齋宮の野宮は嵯峨野の有栖川にある。  
○たいあやし／＼——御息所が。  
○ほけ／＼しうて——ぼんやりと気がぬけたやうで。  
○宮人——齋宮に仕へてゐる官人。  
○おどろ／＼しきさま——たいへんな東病であること。  
○まさる方の——もつと大切な人、即ち奏上をさす。

す。

○まださるべき程にもあらずと云々——まだ出産なさる時機でもない、あたりの人々が油断してゐると、急に産気づきて苦しまれた。  
○やむごとなき験者ども——効驗著しい祈禱僧どもも、珍しく執念深い物怪であると、その退散せしめることに苦しんでゐた。

櫻がとり急ぎ行はるべきであつたが、ただ不思議なことには、母上の御息所がぼんやりと気が抜けたやうにして、物思ひにつく／＼と沈んで臥し惱みなまつた。それで齋宮にお仕へ申してゐる人々は、大へんなことだと心配して、御快癒なさるやう種々と祈禱などした。勿論、御病状は危篤な重病といふわけでもなかつたが、何といふこともなく惱みなまつて月日を送つてゐられた。源氏の大将も、常々安否を訪問なさるのであつたが、御息所よりも更に大切に思つてゐられる葵上の方が、非常に重い病氣でゐられたから、たとひ御尋ねに來られても、み心はいそはしげにしてゐられた。

評 「まさる方のいたう煩ひたまへば云々」と、輕妙な筆致で一轉し、葵上の身上を描くところ、作者式部獨特の妙所である。

まださるべき程にもあらずと、皆人もたゆみ給へるに、俄に御氣色ありて、惱みたまへば、いとどしき御祈禱のかずをつくしてせさせ給へれど、例のしうねき御もののけひとつ更に動かさず。やむごとなき験者ども、珍らかなりともてなやむ。さすがにいみじう調ぜられて、心苦しげに泣きわびて、「少しゆるべたまへや。大將に聞ゆべき事あり」とのたまふ。さればよ。あるやうあらむとて、近き御几帳のもとに入れ奉りたり。無下に限りのさ

○いみじう調ぜられて—  
—やはりえらい験者のた  
めに、物怪は調伏せられ  
て。

○心苦しげに泣きわびて  
—ここは葵上の舉動で  
あるが、御息所の生霊が  
させてゐることである。  
○少しゆるべたまへや—  
—少し験者のされる調伏  
の手をゆるめて下さい  
よ。

○さればよ—果して  
だ。  
○あるやうあらむとて—  
—何か仔細があるのでは  
あらうと言つて、源氏の君  
を葵上の枕邊近い几帳の  
もとに隠し入れ奉つた。  
○無下に限りのさまに—  
—全く呼吸をひき取りさ  
うなので。  
○聞えおかまほしきこと  
もおはするにやと—葵  
上が、源氏の君に遺言な  
さるやうなこともあるか  
と。  
○大臣も宮も—父の左

大臣も母の宮も遠慮し  
て、その場から下つてゐ  
られた。  
○見たてまつりたまへば  
—源氏が葵上をこらん  
になると。  
○をかしげに—美しい  
さまに。  
○色あひいと花やかにて  
—影せてある寝具の色  
あひをさす。  
○こちたきを—あまり  
に多過ぎてうるさいほど  
なのを。  
○引きゆひてうちそへた  
るも—髪をひき結ん  
で、衣にそへてあるのも。  
○かくてこそらうたげに  
なまめきたる云々—葵  
上は平常はあまりに端嚴  
過ぎてゐたが、今のやう  
なさまでゐると、かはゆ  
く艶麗なところも添うて  
美しいと、源氏は見なさ  
つた。  
○心憂きめを見せ—我  
に心配をさせなざること  
であるかな。

葵

まに物し給ふを、聞えおかまほしきこともおはするにやとて、大臣も宮も  
少ししぞきたまへり。加持の僧ども聲しづめて、法華經を読みたる、いみ  
じうたふとし。

葵上はまだ出産なさるやうな、それほどな時期でもない、御傍にお仕へしてゐる近侍の人  
々は、何れもみな油断してゐられるときに、俄に産氣づかれて、苦しいさまに悩みなされた。  
さては大へんと仰々しい御祈禱をなされて、安産になるやうにと祈願せられた。けれどもいつ  
もの如き執念深い物怪が一つ、強く葵上によりついてゐて一寸も離れない。効驗あらたかな修  
験者どもも、こんなに熱心に祈禱しても退散しない物怪は、今までに於て出會つたことがない  
と不思議がりながら困つてゐた。けれどもやはりえらい修験者ほどあつて、遂に物怪は調伏せ  
られてしまひ、物怪は苦しいさまに泣き詫びて、物怪の靈が葵上によりついて語るには「少し  
修験者の御祈禱をゆるやかにして下さい。大將源氏の君に申し上げたいことがある」と言つた。  
近侍の人々は、「果せるかな、何か仔細があるのであらう」と言つて、葵上の枕邊近きの几帳の  
下に源氏の君を隠し入れ申した。  
さて葵上は大へん御重態のやうになられ、今にも呼吸を引き取りなさるらしくしてゐられるの  
で、さては源氏の君に何か遺言でもして行きたいと思つてゐられるのかと思つて、父の左大臣  
や母の宮は遠慮して少しその場から退かれた。このとき加持祈禱してゐる僧どもは聲を靜かに

して、法華經を誦誦してゐたが、頗る尊いさまであつた。

御几帳の帷子ひき上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹  
はいみじう高うて臥し給へるさま、他人だに見奉らむに、心みだれぬべし。  
まして惜しう悲しう思す、ことわりなり。白き御衣に、色あひいと花やか  
にて、御髪いと長うちちたきを引きゆひてうちそへたるも、かうてこそら  
うたげになまめきたる方そひて、をかしかりけれと見ゆ。御手を執らへて、  
「あなはいみじ。心憂きめを見せたまふかな」とて、物もえ聞えたまはず泣  
きたまへば、例はいと煩はしくはづかしげなる御まみを、いとたゆげに見  
上げて、うちまもり聞えたまふに、涙のこぼるるさまを見給ふは、いかが  
あはれの浅からむ。

源氏の君は、御几帳の單絹をかき上げて、葵上の御様子を御覽になると、まことに美しい御  
姿で、御腹は大へんな大きいさまで横臥してゐられる。かうしたさまを見奉つては他人であつ  
ても、心がとりみだされるであらう。ましてや、夫でゐられる源氏の君としては、名殘惜しく  
も、悲しく思はれるのはごもつともなことである。

葵

○物もえ聞え——源氏が。  
○例はいと煩はし云々——  
葵上はふだんは、大へん気がおけて、この方が恥しくなるやうな御目つきであるが、その目を今日は非常にだるさうに源氏の君を見上げて、よく／＼とらんなさるとき。  
○涙のこぼるるさまを云々——葵上の目も、こちら、はら／＼と涙のこぼれるのを源氏の君がごらんなさるについで。

○心苦しき親たちの——  
心苦しうしてゐられる葵上の両親のことを、源氏が思ひ込められ。  
○またかく見給ふにつけ云々——又斯く葵上が源

氏の君をごらんになるについで、このまま死に別れるのでないかと名残惜しく悲しまれるのかと源氏が考へられて。  
○何事もいとかうな云々——何事もそんなに深く思ひ込まないのがよい。  
○けしうはおはせじ——悪うはあるまい。病は快癒なさるであらう。  
○いかなりとも必ず逢ふせ云々——假令死するとも、夫婦は二世の契であるから、死後も亦相逢ふことはあるだらう。  
○大臣宮なども——父君母宮などにしても、深き因縁のあるものは、生死流轉しても、その縁は絶えないうで再び相逢ふであらうと思召され。  
○いであらずや——いやさやうではありません。  
○身の上のいと苦しきを——調伏せられて、まことに苦しうで調伏を休めたまへと、源氏を呼び

葵

一九八

葵上は白い御衣をお召しになり、色あひの頗る花やかな寝具を被け、御頭髪のまことに長く、房々と仰山あるのをひき結んで御衣に添へてゐられる。かうした寛いでさまは嘗てしなすたことはないのである。けれども今のやうにくつろいでゐられてこそ、却つて可愛らしくも思はれるし、艶麗なところも加つて美しいと源氏の君は思はれた。源氏はやがて、葵上の御手をしつかと握つて、「ああ、たいへんなことになつた。我に心配なさまを見せなされることかな」と言つて、物語りなさる元氣もなく、お泣きなされると、葵上はふだんは、大へん気がおけて、この方が恥しくなるのであつた御目つきを、今日は非常にだるさうに源氏の君を眺めあげて、君をぢつと凝視なさるとき、葵上の目もとから涙がはら／＼とこぼれた。このさまをごらんになつた源氏の君は、どうして深い哀れを感じずにはゐられよう。

今にも呼氣絶えようとしてゐる葵上が、目にも力なく、だるさうに背の君源氏をながめてゐられる。然も一言の言葉もなく、ただ目もとからはら／＼と涙をこぼしなされるのである。かうした沈痛な人生の場面がまことによく描かれてゐる。筆をとりつつも悲痛な哀愁に沈まさせられるのであつた。

あまりいたく泣きたまへば、心苦しき親たちの御事をおぼし、またかく見給ふにつけて、口惜しう覺えたまふにやと思して、「何事もいとかうなおぼし入れそ。さりともけしうはおはせじ。いかなりとも必ず逢ふせあなれば、

對面はありなむ。大臣宮なども、深きちぎりある中は、めぐりても絶えざなれば、あひ見るほどありなむと思せ」となぐさめたまふに、「いであらずや。身の上のいと苦しきを、しばし休めたまへと聞えむとてなむ。かく参り來むとも更に思はぬを、物思ふ人のたましひは、實にあくがるるものになむありける」と、なつかしげにいひて、

なげきわび空にみだるる我がたまを結びとどめよしたがひのつまとのたまふ聲けはひ、その人にもあらずかはり給へり。いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。

葵上はあまりに烈しく泣きなされたので、かうしたさまを見てゐられる御両親の御心痛のほどをも推察なされ、又斯く傍近くで御目にかかるについても、葵上は一層名残惜しく思召されるので、猶更涙がこぼれるであらうと源氏が思召されて、源氏「何事についてもそんなに深く思ひ込みなされるなよ。かう惱みなされても、病は悪くなることもないだらう。又假令死なれるといふやうなことがあるとしまして、夫婦の間柄は必ず又再會の機があるであらうから、何處なりとも又お互に對面せられるであらう。父左大臣や母の宮なども、親子といふ深い契りのある間柄は、生死流轉してもその縁は切れるものでないから、必ず相逢ふ折があるものと思召

葵

一九九

よせたのである。  
 ○かく参り来むとも更に思はぬを——こんな生霊となつて、ここへ来ようなどとはちよつとも思ひませんでした。  
 ○物思ふ人のたましひは云々——いろ／＼と物を案じ悩む人の魂は、まあ迷うてうかれ出るものでありました。  
 ○なげきわび空に云々の歌——補欄参照。  
 ○その人にもあらず——奏上とも思はれないほど變つてゐた。  
 ○いとあやしと云々——甚だ變だと思ひめぐらすと、それは全く六條御息所そつくりの屏であつた。

○人のとかくいふを——世人がこれまでも、とか

せ」と御慰めになると、物怪の靈は「いや、さやうではありません。この私(物怪)があまり強く調伏せられて、まことに苦しいので、暫し調伏なさるのを休めて下さいと申したいばかりに、源氏の君をお呼びしたのである。こんなに生霊となつて、ここへ来ようなどは、ちよつとも思ひませんでした。いろ／＼と物思ひに苦しむ人の魂は、世人の言ふ通りに迷うてうかれでるものであります」と、なつかしさうに言つて、

なげきわび空にみだるる我がたまを結びとどめよしたがひのつま  
 と言はれるその音聲の様子が、奏上のもとは、すつかり變つてゐた。源氏は心の中に頗る變であると思へぬが、それはただかの六條御息所の聲そつくりであつた。

○なげきわび空にみだるる云々の歌——私は物思ひになげき佗びて、あてどもなく私の魂は浮かれて出ますが、このやうなときには着物の下前の襟を結ぶと魂が本に返るといひますから、どうぞさうして私の魂をつなぎとどめて本心に返して下さい。私はあなたの妻でございます。魂の飛ぶと見たら衣の下前の襟を結べば、魂が本に返るといふ俗説が當時あつたのである。○ふかきちぎりある云々——細流抄に「親子の契は一世なりと云ひならはしたれども、今はなぐさめての給ふなり」と。○物思ふ人のたましひは——後拾遺集神祇に「物思へば澤の螢もわが身よりあくがれいづる玉かとぞ見る」とある。

あさましう人のとかくいふを、よからぬものどもの言ひ出づる事と、聞き

にくく思ひしてのたまひけつを、目にみす／＼、世にはかかる事こそはありけれど、うとましうなりぬ。あな心うとおほされて、「かくのたまへど、誰とこそ知らね。たしかにの給へ」とのたまへば、ただそれなる御有様に、あさましと尋常なり。人々近う参るも、かたはらいたう思さる。

淺ましくも世人が、これまで御息所の生霊であるとか何とか物語るのを、源氏は口の悪いものどもの言ひだすことだと、聞き苦しく思つて否定してゐられたのを、世間には斯やうに眼前にあり／＼と不思議なこともあるものかと、世の中もつく／＼と厭になつてしまひなされた。ああ、さても心苦しいと思召されて、源氏は「かやうに仰せられるが、一體誰のことか解らないよ。確にそれと仰せられよ」と言はれると、物怪はまぎれもなく名乗をして、さまざまに口走る様子であるので、かうなつては、淺ましくも何とも言ひやうがない。人々の近く参るのについて、源氏の君は體裁悪く思召される。

少し御聲もしづまり給へれば、ひまおはするにやとて、宮の御湯もて寄せ給へるに、かきおこされたまひて、ほどなく生れたまひぬ。嬉しと思す事かぎりなきに、人にかりうつし給へる御もののけどもの、妬がり惑ふけはひ、いと物さわがしうて、後のことまたいと心もとなし。言ふかぎりなき

く御息所の生霊であると略してゐたのを。  
 ○のたまひけつを——言ひけなして否認してゐられたのを。  
 ○目に見す／＼——ありけれ／＼にかかる副詞。  
 ○うとましう——氣味わるく。  
 ○ただそれなる御有様に——口走れる様子が全く御息所に相違ないので。  
 ○あさましとは尋常なり——あさましとは何とも言ひやうがない。  
 ○かたはらいたう——源氏が。

○少し御聲も——奏上の。  
 ○ひまおはするにや——病苦の絶間があまりになるのかしら。  
 ○宮の——母宮の。  
 ○かきおこされ——侍女どもに助け起されて。

○生れたまひぬ——名は夕霧と申し、源氏の始末の御子である。  
 ○縮しと思す——源氏をはじめ、それ以下の人々。  
 ○人にかりうつし給へる御もののけ——修験者をして、物怪をよりにしに驅り移したのが、口惜しがって騒ぎ立てる様子。  
 ○後のこと——後産。  
 ○たひらかに事成りはてぬれば——平穩無事に後産もすんでしまつたので。

○山の座主——比叡山の天台座主。  
 ○今はさりともとおぼす——このやうならば、葵上の日頃の病氣も、大丈夫であらうと源氏が思はれた。

願どもたてさせたまふけにや、たひらかに事成りはてぬれば、山の座主何くれとやむごとなき僧ども、したり顔に汗おし拭ひつつ急ぎまかてぬ。多くの人の心を盡しつる、日頃の名残少しうちやすみて、今はさりともとおぼす。

【釋】葵上の苦しげに病んでゐられた御聲も、少し静かになつて來たので、御病氣の苦痛も少しの絶間がおりなされるのかと、母宮は御湯を持つて傍に近づかれた。このとき姫君は侍女どもに抱き起されなると、やがて御子が御誕生になつた。源氏の君をはじめとして、それ以下の人々が嬉しいことだと喜ぶのは限りないものであつた。かうした中にも、修験者の祈禱の力で驅りだされ、他の人により移つた物怪どもが、今の安産を口惜しがり騒ぎ立てる様子は、まことに騒然としたもので、まだ後産のことが不安である。けれども限りない仰々しい大願どもを立てて御祈禱になつた爲めか、後産も平穩無事に済んだので、比叡山の天台座主を初め、誰彼といふ高僧貴僧どもは、自分等の祈禱の甲斐があつたものと思ひ、得意顔に汗を押し拭ひながら急いで退出した。大勢の人々が非常に心配してゐた近頃の名残も、少しは休つた。このやうな様子であるならば、葵上の日頃の病氣も大丈夫であらうと、源氏の君は思召された。

【補】○御湯もて寄せ給へるに——花鳥餘情に「榮花物語に一條院の母、東三條院にわかれ給へる事をいへるにいとどおもほしいらせ給て、つゆ御ゆをだにきこしめさずとあり、御ゆとはおも

ゆの事なるべし」とある。

【釋】「山の座主何くれとやむごとなき僧ども、したり顔に汗おし拭ひつつ急ぎまかてぬ」とあるのは、御子御誕生といふ慶事の場合となつたので、縁喜のよいものでもない僧どもは急遽退出したと言ふのである。

御修法などは、またく始めそへさせたまへど、まづは興あり、珍らしき御かしづきに皆人心ゆるべり。院をはじめ奉りて、親王達上達部、残なき産養どもの、めづらかにいかめしきを、夜ごとに見ののしる。男にてさへおはすれば、そのほどの作法、賑ははしくめでたし。

【釋】葵上御病氣御快癒のためには、従前の御祈禱は勿論のこと、又々その上にいろ／＼の御祈禱を加へてお始めになるのであつたが、先づは面白くもあり、珍らしいことでもある赤ちやんの御養育に、あたりの人々は心をとられて、葵上の看病などの方は、やや氣がゆるんでゐた。仙洞御所の上皇を始めとして、親王方、上達部達が悉く集まれる御誕生祝ひの、珍らしく且つ立派なのを、毎夜拜見するので、人々はがや／＼と騒いでゐる。ことに今度は正妻の腹に始めて御生れになつた赤ちやんである上に、男子でゐられるので、御祝儀の作法なども、頗る盛大に行はれた。

【釋】「珍らしき御かしづきに皆人心ゆるべり」といふので、將に來らんとしてゐる葵上の死がほの

○まづは興あり——「かしづき」にかかる語で、祈禱よりもまあ物珍しく興味のある赤ちやんの方に氣を取られて、皆人は葵上の御病の方は油断した。  
 ○残る人なき——もれる人なく、悉くの人。  
 ○産養——産後三日五日目などの養育。  
 ○夜ごとに——産養の儀は夜行はれる。  
 ○男にてさへ——正妻に始めての子である上に、男子であるといふので。



○ただならず——心のお  
だやかでないこと。  
○たひらかにもはた——  
案外にも安産をされたと  
は妬ましいことだと。  
○あやしう、我にもあら  
ぬ御心地を——夢のやう  
に不思議にわが魂が浮か  
れ出て、生霊となつたと  
きのことどもを思ひつづ  
けられると。  
○芥子の香——葵上の枕  
頭で祈禱の護摩に焚いた  
芥子の香。  
○御ゆるするまゐり——頭  
髪を洗ひなされ。  
○わが身ながらだにうと  
ましよう——やはり芥子の  
香がぬけないので、さて  
は自分が生霊となつて葵  
上の許に行つたのかと、

いやな氣に思はれる。  
○まして人の言ひ思はむ  
事——世人の考へること  
や噂は、どんなにいやな  
ものであらうと。  
○いとど御心がはり——  
御息所は猶更一層と本心  
を失はれて、亂れ心地に  
なられる。  
○あさましかりし程の——  
生霊が葵上に取りつた  
ときの事柄。  
○とはずがたり——問ひ  
もせないのに、先方から  
語り出したこと。  
○いとほど經にけるも——  
あまりに御息所に御無  
沙汰してゐるのも。  
○また氣近くて見奉らむ  
には云々——御息所をた  
づねて對面すれば、自分  
は不愉快に思ふだらう。  
従つてその不快な感を先  
方の女に悟られると、彼  
女はいかにつらい思ひを  
するだらうかと氣毒に思  
はれて。  
○人の御ため——御息所

めかされてゐる。また前には生まれなされた御子が男であつたか、女であつたかといふやうな  
ことを書くだけの餘裕はなく、ただ安産をされたといふ嬉しさを急いで書いたが、竝處に至り  
「男にてさへおはすれば云々」と、しばし時を経て述べてゐるところは、餘裕に富んだ描寫であ  
る。

かの御息所は、かかる御有様を聞きたまひても、ただならず。かねてはい  
と危く聞えしを、たひらかにもはたとうちおほしけり。あやしう、我にも  
あらぬ御心地を思しつゞくるに、御衣なども、ただ芥子の香にしみかへり  
たり。あやしさに、御ゆるするまゐり、御衣着かへなどしたまひて、試みた  
まへど、なほ同じやうにのみあれば、わが身ながらだにうとましよう思さる  
るに、まして人の言ひ思はむ事など、人にのたまふべき事ならねば、心ひ  
とつに思しなげくに、いとど御心がはりもまさり行く。

大將殿は、心地少しのどめて、あさましかりし程のとはずがたりも、心憂  
く思し出でられつつ、いとほど經にけるも心苦しく、また氣近くて見奉ら  
むには、いかにぞやうたて覺ゆべきを、人の御ためいとほしう、よろづに  
おほして、御文ばかりぞありける。

彼の六條御息所が、斯うした葵上の男子御誕生などの御様子を傳聞なさるについても、心  
中はおだやかではない。「以前には頗る御危篤のやうにも承つてゐたに、案外にも安産なされた  
とは、妬ましいことである」と、がっかりされた。さて我ながら我にもあらぬさまに、不思議  
におのが魂が浮かれ出て、生霊となつたときの心持を思ひ出して思案あそばすに、御着物など  
にも、あの葵上の枕頭で祈禱の護摩に焚いた芥子の香がしみこんでゐる。  
あまり不思議なので、御頭髪を洗ひなされ、御召しの着物も脱ぎかへなどされて、芥子の香が  
失するかと試みてごらんになつたが、やはり前と同じやうに香氣が失せないで、自分の身で  
ありながら、さては自分が生霊となつて葵上のもとに行つたのかと、いやな氣に思はれた。ま  
して世人が何と思ふだらうか、又何と噂するだらうかと、思ひめぐらすに、かうしたことども  
は、近侍の者どもにも語るべき事でないで、ただ我が心一つに思ひ包んで嘆きなさるので、  
御息所は猶更一層と本心を失はれ、執念深い亂れ心地になつてゆかれる。  
大將源氏の君は、御心地を少し平靜になされて、彼の生霊が葵上にとりついた、あさましいと  
きの、生霊の獨言を心憂く思ひ出されながら、御息所に對しては随分御無沙汰したので、それ  
は氣毒なことだとは思召されるが、さればとて御息所を訪問して對面するならば、これも亦、  
どうだらうか、さぞ自分は不愉快に思ふだらう。従つてその不快な感を先方の女に悟られると、  
彼女も不愉快に思ふだらうと、彼女の爲めにも可愛想に思はれたので、さまんかと考へめぐら

のために。

○いたう煩ひたまひし人の――奏上の。  
○心ゆるびなげに――病後はまだ氣味が悪く、油断がならぬと誰も思つてゐたから、源氏も尤もなわけで外出はなさない。  
○なほいと――奏上がなほやはり願ふ。  
○例のさまにても云々――奏上が病臥のまま源氏に對面をなさらない。  
○いとさまことに――源氏が格別に夕霧を養育なされるので。  
○ことあひたる心地――何事も思ふ通りになつた氣持。  
○この御心地――奏上の御病氣。  
○さばかりいみじかりし――あれ程奏上は重病の後だから、さう早く全快なされないだらうと。

奏

二〇六

された果に、ただ御手紙だけを出して置かれた。

いたう煩ひたまひし人の、御名残ゆゆしう、心ゆるびなげに、誰も思したれば、道理にて御歩行もなし。なほいと惱ましげにのみし給へば、例のさまにてもまだ對面し給はず。若君のいとゆゆしきまで見えたまふ御有様を、いまからいとさまことに、もてかしづき聞えたまふさま疎ならず。ことあひたる心地して、大臣も嬉しういみじと思ひ聞えたまへるに、ただこの御心地おこたりはて給はぬを、心もとなくおぼせど、さばかりいみじかりし名残にこそはと思して、いかでかは、さのみは心をもまどはし給はむ。

非常な重病でゐられた奏上の、その後の経過は大へん大事で油断がならぬと、誰も思つてゐられたから、御尤なことにも、源氏の君は忍びの歩きなどはなさらぬ。その上奏上は、相變らず惱ましさうにしてゐられたから、平常のやうに病臥のまま源氏に御對面もあそばされない。若君の夕霧は忌々しく見えるほど、整つた容姿でゐられるので、源氏は只今から格別丁寧に養育なさる様子は、決して疎略な點がない。

斯く總てのことが思ふ通りになつた心地がして、父左大臣も嬉しく結構なことだと思つてゐた。然しただ姫君即ち奏上の病氣の氣分がすつかり直り終らないでゐられるのを、不安に思つてゐ

られたが、それでも一時はあのやうに危篤といふ重病であつた後としては、これ位のことばあるものと思つてゐられたから、どうしてそんなに心痛に悩んでばかりゐられる筈があらうか。そんなことはなかつた。

○ことあひたる心地――厩江入楚に「左大臣威勢ある上、源をむこにとり、若君さへ出きぬる事也。何も相應したるをことあひたるといふ也」と。

若君の御まみの美しさなどの、春宮にいみじう似奉り給へるを、見奉り給ひても、まづ戀しう思ひ出でられさせたまふに、忍び難くて参りたまはむとて、内裏などにも、ひさしくまゐり侍らねば、いぶせさに、今日なむうひだちし侍るを、少し氣近きほどにて聞えさせばや。あまり覺束なき御心のへだてかな」と、怨み聞えたまへれば、實にただ偏に艶にのみあるべきなかにもあらぬを、いたうおとろへ給へりといひながら、ものごしにてなどあるべきかはとて、臥したまへる所に、御座近う参りたれば、入りて物など聞えたまふ。御答時々聞えたまふも、なほいとよわけなり。

夕霧の君の御目つき的美丽なところが、春宮に非常に似通うてゐられるのを、源氏の君が御覽になるについても、まづ兄弟の關係にある春宮の御様子になつかしく思ひ出されて耐へ

奏

二〇七

○春宮にいみじう似奉り――争ひ難き兄弟であるため。  
○見奉り給ひても――源氏の君が。  
○まづ戀しう思ひ出でられ――春宮のことを戀しう思ふのである。  
○内裏などにも――これから源氏が奏上に語る詞。  
○いぶせきに――氣がくすんでくるので。  
○うひだち――久しく引籠つてゐた後に、初めて外出すること。  
○少し氣近きほどにて――少し近寄つてお話ししたいものです。  
○實にただ偏に艶にのみ

云々——父大臣などの語るものである。今は子までもある中だから、艶な色めかしい間柄でもない。〇ものごしにてなどあるべきかは——几帳などを隔てて語るべきでない。〇御座近う——源氏の御座席を葵上の病床近くにとしらへる。〇入りて物など——源氏がお入りになつて。〇なほいとよわけなり——葵上の気色は大かたよるしいが、それでもやはり弱々しいといふのである。

〇されどむげになき人——けれども全く助からないものと思つてゐた重盛の葵上のこともを思ひ出して、源氏はかうして無事に彼女と語ることの出来るのは夢のやうに思召された。〇ゆゆしかりし程の事——危篤で非常に心配して

葵

二〇八

がたくなり、遂に宮中に参内なされようといふので、源氏は葵上に「禁裡などへもあまり久しく参内いたしませんので、氣も鬱陶しさに今日はまあ、久々に始めて参内しようと思ひます。それについても、少し近づいてお物語いたしたいものでございます。あなたは何時もあまりの心隔てをされますので、私も打解けぬところがあります」と、御怨みを申し上げた。そこで御兩親達などが「本當に、お前だちは子供も生れた間柄のことであるから、さうただひたすら艶な色めかしい體裁を作つてゐるべき時でもないに、どうしてまだ遠慮してゐるのか。それはそれとして、ひどくお前は衰弱したと言ひながら、几帳などの隔てをして話しあふことがあるものかと言つて、葵上の御病臥のところ近くに、源氏の君の御座所を作られたので、源氏は内に入つて御物語があつた。葵上は折々御返答などはされたが、それでも如何にも弱々しいさまである。

されどむげになき人と思ひ聞えし御有様を、思し出でつれば、夢の心地して、ゆゆしかりし程の事どもなど聞えたまふ序にも、かのむげに息も絶えたるやうにおはせしが、引きかへし、つぶ／＼とのたまひし事ども、思し出づるに心憂ければ、「いさや聞えまほしき事いと多かれど、まだいとたゆげに思したためればこそ」とて、御湯参れなどさへあつかひ聞えたまふを、

いつ習ひたまひけむと、人々哀がり聞ゆ。

〇引きかへし——急に變つて物怪の聲で、はきはきと仰せられたことども。つぶ／＼ははき／＼といふこと。〇いさや——いやもう。〇いとたゆげに思しためれば——まだ重病後のこととて、あなたは苦しさをうにしてゐられるから。〇御湯参れ——御薬湯を召し上れなど、細い事まで御世話なさるので。〇いつ習ひ——御看病のことを何時源氏はお習ひなされたかと。

〇あるかなきかの氣色——形の小さく瘦せたさま。〇ありがたき——珍らしいほど美しく。〇年頃何事をあかねこと

〇あるかなきかの氣色——形の小さく瘦せたさま。〇ありがたき——珍らしいほど美しく。〇年頃何事をあかねこと

葵

二〇九

ありて——これまで數年來といふものは、何が不満足で、葵上を疎んじたのであらうかと、源氏の君は我ながら不思議に思はれ、葵上をじつと眺められるのである。

○いと疾くまかてなむ——ちき歸つて来るだらう。

○かやうにて覺東なからず——斯様に繁々と相逢ふならば。

○宮のつとおはするに——母宮が始終つきそうてゐらつしやるので、我の來るのもあまり無遠慮かと遠慮せられて。

○なほやう／＼心強く——姫君もだん／＼と氣丈夫になりなまつて、平常の居間にお移りなされ。

○あまり若くもてなし給へば——あまり弱々しくしてゐられるからして、一つにはこんなになほりにくいのである。かたへは「あまり」の上に移し

て譯すべきである。

○常よりは目とどめて——葵上もいつもよりは、しみ／＼と目をとどめて。

○秋の司召——秋季行はれる京官任免の儀式。

○大殿も——左大臣も参内なさるので。

をあかぬことありて思ひつらむと、あやしきまでうちまもられたまふ。「院などにまゐりて、いと疾くまかてなむ。かやうにて覺東なからず、見奉らば嬉しかるべきを、宮のつとおはするに、心なくやとつみみて、過しつるも苦しきを、なほやう／＼心強く思しなして、例の御座所にこそ。あまり若くもてなし給へば、かたへはかくも物し給ふぞ」など聞えおき給ひて、いと清げにうちさうぞきて出てたまふを、常よりは目とどめて、見出して臥したまへり。

まことに美しい葵上も、御病氣のために頗る衰弱なされ、身體も瘦せてしまひ、細やかに瘦せかけて臥してゐられる有様は、甚だ可愛らしくも痛々しいさまである。御髪は一筋として取り亂れてゐるところもなく、はら／＼と枕邊にかかつてゐるあたりは、まことにこの世にも珍らしいほど美しい姿である。かうした美しい葵上の姿を見てゐられた源氏の君が思しめされるには、數年來といふものは、葵上について何が不満足で、彼女と疎遠にしてゐたのであらうと、源氏は我ながら不思議になり、ちつと彼女をながめられた。さて源氏「私はこれから上皇様などに参上して、それから又すぐに歸つて來よう。かやうにあなたの傍に居て、心配もなく御看護してゐれば、それは私にとつてはまことに嬉しいことでもあります。けれども母宮様がすつと

つき添うてゐられるのに、私が來るのも無遠慮かと遠慮せられて、強ひて御目に懸らうともせなかつたのも、思へば心苦しいことでありました。やはりだん／＼と氣丈夫になりなまつて、一日も早く全快なされ、いつもの御居間でこそ御目に懸りたいものであります。あなたはあまりに弱々しくしてゐられるからして、一つにはそのため、こんなになほりにくいのである」など言ひ置いて、源氏は頗る立派な装束でおでかけなされた。その姿を葵上はいつもよりは格別に目をとどめて、君の御後姿を見送りながら臥してゐられた。

○あまり若くもてなし給へば——細流抄に「母宮のあまりにおさなき人のやうにあつかひ玉を云なり」と注してゐるが、この句の前どころに「なほやう／＼心強く思しなして云々」の語からの續きからいふと、どうしても本書に解したやうに、葵上自らがあまり弱々しいさまであるからと解した方がよろしい。

死んで行かうとする人は、どのやうな人でも、なつかしくも美しく見えるものである。源氏の君は日頃葵上とうとましい間柄であつたが、今や葵上の死が近づいて來たので、君もそれとなくなつたかしくなつたのである。故に「年頃何事をあかぬことありて思ひつらむと、あやしきまでうちまもられたまふ」と書かれてゐる。

秋の司召あるべき定にて、大殿も参り給へば、君達もいたはり望みたまふことどもありて、殿の御あたり離れたまはねば、皆ひきつゞき出でたまひ

○君達もいたはり望みたまふ——左大臣の御息達も功勞を言ひ立てて官位の昇進を望みたまふことがあつて。  
 ○殿の御あたり離れたまはねば——御息達が父左大臣の御傍を離れられないので。  
 ○殿のうち——葵上の御殿の中では。  
 ○俄に例の御胸を——油断してゐた間に、急に物怪のとりついたのである。

○内裏に——参内中の源氏や左大臣に通知申上げるひまもなく。  
 ○足をそらにて——宙を飛ばすやうにして。  
 ○除目の夜なりけれど——當時除目は必ず夜中行はれた。  
 ○わりなき御さはり——こんな已むを得ぬ差支へが起つたので、萬事中止の姿となつた。  
 ○え請じあへたまはず——

ぬ。殿のうち人づくなくにしめやかなるほどに、俄に例の御胸をせきあげて、いといたう惑ひたまふ。内裏に御消息聞えたまふ程もなく、絶え入りたまひぬ。足をそらにて誰もく罷出たまひぬれば、除目の夜なりけれど、かくわりなき御さはりなりければ、皆事やぶれたるやうなり。ののしり騒ぐほどに、夜半ばかりなれば、山の座主、何くれの僧たちも、え請じあへたまはず。今はさりとともと思ひたゆみたりつるに、あさましければ、殿の内の人、ものにぞあたり惑ふ。所々の御とぶらひの使など、立ち込みたれど、え聞えつかずゆすりみちて、いみじき御心まどひども、いと怖ろしきまで見えたまふ。

秋の司召といふ定期の官吏任免の公事があるため、左大臣も御参内あそばすので、御息達もそれ／＼功勞を言ひ立てて、官位の昇進を望んでゐられたから、父左大臣の御傍を離れず嘆願をなされる。どなたも皆父にひきつづいて参内なされた。そのため葵上の御殿の内は人も少なくなり、ひつそりとしてゐたときに、葵上は急に物怪にとりつかれ、胸をせきあげて大へんな苦悶をなされた。さて一大事といつて、宮中へ参内された父大臣源氏などのもとへも御通知申上げないうちに、葵上は遂に絶命してしまひなまつた。この報知に接して誰も／＼足を宙

呼ぶのが間にあはぬ。今はさりとともと思ひたゆみたりつる——葵上はもう大丈夫だと油断してゐたのに。  
 ○あさましければ——意外のことになつたので。  
 ○ものにぞあたり惑ふ——あわててそこらのものに突きあたるさま。  
 ○所々の御とぶらひの使——方々からの弔問の使。  
 ○え聞えつかず——よく取次ぎもせないで。  
 ○ゆすりみちて——どや／＼と騒いで。  
 ○いみじき御心まどひども——左大臣大宮源氏などの困惑。

○とりいれ奉りし——御物怪がこれまで、度々葵上を假死のさまにさせた。○御枕などもさながら——御枕などもその儘にし

にして宮中から退出なまつた。そのため當夜は除目の行はれる晩であつたが、大臣家に起つたこのやうな詮方ない差支へのために、除目のことどもは、うち捨てとなり、萬事中止となつた。誰も／＼言ひ騒いでゐるうちに、もう眞夜中のことであるから、比叡山の座主や、此處彼處の高僧貴僧達もお迎へ申す間がなかつた。元來葵上は前に少し小康を得られたので、これではさした危篤のこともないだらうと、あたりの人々が油断してゐられたのに、今急に死なれるなどと、案外なことになつたので、左大臣家の内の人々は、どうしてよいのかわからず、ただ物につきあたるといふあわてかたである。

所々方々からの弔問の使など、ひきつき／＼やつてくるが、さうした使者をよくも取次がないで、どや／＼と騒ぎ迷うてゐる。左大臣大宮源氏などの大へんな困惑の態どもは、まことに見てゐても恐ろしいほどであつた。

暫し平穩無事な叙述が続いてゐた。年頃葵上と源氏の疎遠な間柄もどうやう親しみのあるものとなつたと前段に述べ、讀者をして先づめでたきことと思はしめながら、除目の夜といふ突然なときに、思ひがけない葵上の絶命といふ悲惨を起して、紙面に一波瀾を出してゐる。

御物怪のたび／＼とりいれ奉りしをおほして、御枕などもさながら、一二三日見奉りたまへど、やう／＼かはりたまふことどものあれば、限りと思しはつるほど、誰もく／＼いといみじ。大將殿は悲しきことに事を添へて、世

て。死者の枕を改め、その後入棺するのが定例であつた。

○やう／＼かはりたまふ——ぜん／＼と姿が變つて死相をあらはす。

○限りと思しはつる——もう蘇生はしない、いよ／＼なくなつたのだと。

○悲しきことに事を添へて——悲しい葵上の死に更に御息所の生霊のことで加つて。

○思ししみぬれ——思ひ込まれたので。

○ただならぬ御あたり——藤壺など。

○院に——桐壺院に。

○かへりておもだたしげなる——不幸によつて却つて面目を施す位なのを

○嬉しきせ——嬉しい點も。

○厳しきこと——仰々しい祈禱。

○さま／＼残ることなく——祈禱や何や彼やとさ

の中をいとうきものに思ししみぬれば、ただならぬ御あたりの御とぶらひどもも、心うしとのみぞなべて思さるる。

院に思しなげき、とぶらひ聞えさせたまふさま、かへりておもだたしげなるを、嬉しきせも交りて、大臣は御涙のいとまなし。人の申すに隨ひて、厳しきことどもを、生きかへり給ふと、さま／＼残ることなく、かつそこなはれたまふ事どものあるを、見る／＼も盡せず思し惑へど、かひなくて日頃になれば、いかがはせむとて、鳥邊野にゐて奉るほど、いみじげなることおほかり。

御物怪がこれまで度々、葵上を假死のさまになしたことがあつたから、今もそのやうなのであらうとおぼして、御枕もそのままにして、二三日間は様子を見てゐられたが、蘇生なさることなく、だん／＼と御姿が變つて死相をあらはしなされるので、これではとても生きかへられることはない、いよ／＼亡くなられたのであるとあきらめられる時は、誰も／＼大へんな悲しみに沈まれた。大將源氏の君はこの葵上の死といふ悲しみに、更に御息所の生霊のことどもが御心を悲しませるので、世の中のことどもを一層悲しいものと感ぜられた。そのため一方ならぬ深い關係のある藤壺などからの御弔ひがあつても、すべてうるさいことだとばかり思しめし

ま／＼に手落ちなく。○かつそこなはれたまふ——一方では遺骸の腐爛するを見ながら。○かひなくて日頃になれば——何の効果もなく日数がたつので。○鳥邊野——清水の南にあり、葬場のあるところ。○ゐて奉る——送葬し奉る。

○そこら廣き野に——多勢の人々が、廣い鳥邊野に満ち／＼た。

○院——桐壺院。

○後の宮——藤壺中宮。

○春宮——冷泉院。

○参りちがふ——御火葬場に参るのである。

○飽かずいみじき云々——御短命を飽かず思ひ、死をいたく悲しんだ事

ひ。○もこよふ事——悲歎の

た。

桐壺院の方でも御悲嘆あそばされて、御弔詞を下さつたので、悲しきよりも却つて、この上もない名譽なことだといふ嬉しさも交つて、父左大臣は御涙の止むまもない。世人のいろ／＼といふのに随つて、もしや葵上が萬一にも蘇生なさることもあるかと、堂々とした御祈禱をさま／＼と出来得るかぎり盡し、一方からは遺骸の漸次腐爛して行くのを眺めながら、なほはてもなく思ひ惑ひなされた。けれどもさうした効果もなくして、日数もだん／＼と経過して行くので、これではどうもしようがないとあきらめなされ、遂に鳥邊野の葬場にお送り申した。このときもたいへん悲しいことどもが多くあつた。

○鳥邊野に——厩江入楚に「葵の逝去八月十四日の夜なり、葬送は廿日餘なり」とある。

此方彼方の御送の人ども、寺々の念佛の僧など、そこら廣き野に所もなし。院をば更にも申さず。後の宮、春宮などの御使、さらぬ所々のも参りちがひて、飽かずいみじき御とぶらひを聞えたまふ。大臣はえ立ちもあがりたまはず。「かかる齡の末に、若く盛の子におくれ奉りて、もこよふ事」と恥ぢ泣きたまふを、ここらの人悲しう見たてまつる。終夜いみじうののしりつる儀式なれど、いともはかなき御屍ばかりを御名残にて、曉深くかへり

たまふ。常のことなれど、人ひとりか、數多しも見たまはぬことなればにや、類なく思しこがれたり。

【釋】 葵上の葬送について、此處彼處からの御送りの人々や、寺々からの念佛の僧侶どもなど、夥しい送りの人々があつたので、さすが廣々とした鳥邊野も隙なきほどであつた。その野送りの人々の中には、桐壺院は今改めて申すまでもなく、藤壺中宮、冷泉春宮などの御使が加つてゐた。その他そのやうなところでも高貴な方々からの御使も、野べの送りの中に、入りかはり立ちかはり入りこんで、何れも皆、葵上の短命でゐらせられた飽かぬ悔みや、死をいたく悲しんだ弔詞を申し上げた。このとき、左大臣「このやうに老齡になつてから、まだ若い盛り娘に先立たれて、悲嘆のあまりに取り亂してゐることです」と、恥づかしく泣きなされるので、そこに居あはせた多くの人々も、氣毒さに悲しくなつたのであつた。終夜、大へんな騒ぎ立てをした御葬儀であつたが、それも遂に終つてしまつと、まことに果敢ない御遺骨ばかりを御名残として、曉方のまだ暗いうちに御歸殿になつた。葬送などの事は普通ありふれた事であるけれども、源氏の君は、是までに人の死にあひなかつたのは夕顔ただ一人であつたか、よしさうでないにしても、火葬などはあまり御存じなかつたのであらうか。君には類もなく思ひ亂れなかつた。

【補】 〇人ひとりか——この語については本居宣長も玉の小櫛に於て「此詞聞えがたし、寫誤など

ままりにはひまはるること。〇常のことなれど、人ひとりか數多しも云々——葬送などは普通の事であるけれども、源氏は是まで人の死にあひなかつたは、夕顔ただ一人であつたか、よしさうでないにしても、火葬などはあまり御存じなかつたのであらうか。

にぞ。猶よく考ふべし」と言つてゐるやうに意味頗る不分明である。只今は余の推測によつて譯して置いた。

【評】 今回の葬儀については、父左大臣の悲しみが力をこめて描寫されてゐる。これを桐壺更衣の葬儀や、夕顔の君の葬儀などと比して見ると、何れもそれと異つた趣があらはされてゐる。

八月二十日餘の有明なれば、空の氣色もあはれ少からぬに、左大臣のやみに暮れ惑ひたまへるさまを見給ふも、ことわりにいみじければ、空のみながめられ給ひて、

のぼりぬる煙はそれとわかねどもなべて雲井のあはれなるかな

殿におはしつきても、露まどろまれたまはず。年頃の御有様を思し出でつ、などで、終にはおのづから見直し給ひてむと、のどかに思ひて、等閑のすさびにつけても、つらしとおぼえられ奉りけむ。世を経て疎く恥かしきものに思ひて、過ぎはて給ひぬるなど、悔しきこと多く思しつゞけらるれどかひなし。

【釋】 折から八月二十日過ぎの有明の月夜で、空の氣色も頗るものあはれな趣があるとき、亡くな

〇やみに暮れ惑ひたまへる——子を思ふやみに迷ふこと。子は即ち葵上である。〇見給ふ——源氏が。〇空のみながめられ給ひて——これ物思ひのあるときのさま。〇のぼりぬる煙は云々の歌——補欄参照。〇殿におはしつきても——源氏が葵上の送葬から左大臣の邸に又歸られても。〇などで終にはおのづから云々——自分は、葵上のひだて心も、自然になほるときもあるだらうと油断して、なぜに一寸とした日常の些細なことに ついても、つらひ思ひを

彼女にさせたことであらう。  
○世を経て云々——葵上は生涯隔を置いて、死んで行かれた。

○にばめる御衣——薄鼠色の喪服。  
○我さきだたましかば——もし我が先に死んだなら

らば、葵上はこれよりも濃い喪服を着られるであらう。  
○かぎりあれば云々の歌——補欄参照。  
○法界三昧普賢大士——大士は菩薩の稱で、普賢菩薩を呼ぶ一種の念佛である。當時は勿論、まだ南無阿彌陀佛や、南無妙法蓮華經などの唱名は、未だ行はれてゐなかつた。法界三昧は普賢菩薩を讚美する語。  
○おこなひ馴れたる——佛法の修行に馴れた僧。  
○けなり——優つてゐる。  
○何にしのぶの——「結びおきしかたみの子だになかりせば何にしのぶの草を摘ままし」の歌をさす。  
○歸けれど——涙が出て悲しいが。  
○なからましかば——「いかに心をなぐさまし」の語を補つて解くがよ

葵

れた葵上の父左大臣は我が子の死の悲しい物思ひに暮れ迷うてゐられるさまを、源氏が御覽なさるについても、まことに親としてもさもあるのが道理だと思召され、御自分も悲しさが湧き出るので、徒らに空ばかりをながめられて、

のほりぬる煙はそれとわかねどもなべて雲井のあはれなるかな

とお詠みになつた。さて左大臣邸にお歸りになつても、源氏の君は少しもお眠りにならない。年頃の葵上の御様子と思ひ出しながら、葵上は随分隔てがましい態度をとりなされたが、それも遂には自然となほしなすることがあるだらうと、自分の方ではゆつたりとした氣になつて、なぜ一寸した些細なことにも、つらひ思ひを彼女にさせたことであらう。彼女は一生涯を通じて、疎々しい隔を置き、恥づかしいものに思召して、何等打解ける機會もなくこの世を去つて行かれたなどと、悔しいことどもがそれからそれへと、源氏の胸中に思ひ出だされるのであるが、今となつても詮方ないことである。

○のほりぬる煙はそれと云々の歌——葵上を火葬に附した茶毘一片の煙は、中空高く消え失せてしまひ、今は空をながめても、それぞ葵上の煙であると思はれるものは、見えなけれど、葵上の煙が消え失せた空だと思ふと、すべての空が何となくなつかしく思はれる。

にばめる御衣奉れるも、夢の心地して、我さきだたましかば、深くそめ給はましとおぼすさへ、

二一八

かぎりあればうすすみ衣あさけれど涙ぞそてをふちとなしける

とて、念誦し給へるさま、いとゞなまめかしさまさりて、經しのびやかに讀みたまひつつ、法界三昧普賢大士とうちのたまへる、おこなひ馴れたる法師よりはけなり。若君を見奉りたまふにも、何にしのぶのと、いとど露けれど、かかるかたみさへ、なからましかばと思しなぐさむ。

源氏の君は薄鼠色の喪服を著服なさるについても、夢のやうな心地がして、自分の方が彼女より先立つて死んだならば、彼女はもう一層濃い喪服をお召しなさるのであつたのにと、思ひめされるについても悲しい氣持がして、一首の歌、

かぎりあればうすすみ衣あさけれど涙ぞそてをふちとなしける

とお詠みになり、靜かに御念誦あそばす様子は、一層に優雅な趣がました。又御經をしのびかに讀みながら、法界三昧普賢大士と佛の名號を唱ひなさるさまは、勤苦修行の僧侶よりは優つてゐられた。さて源氏は葵上の忘形見の遺兒夕霧を御覽なさるにも、古歌の「結びおきしかたみの子だになかりせば何にしのぶの草を摘ままし」もしこの子さへなかつたならば、何をたよりに亡妻を偲ぶことであらう。といふ歌を思ひ出し、一層涙が流れて悲しいけれども、かやうな忘形見の子がなかつたならば、どうして我が悲しい心を慰められよう、せめてこの兒があるので餘程心がなくさめられると思召される。

葵

二一九



○宮は——葵上の母宮。  
 ○あやふげに見え給ふを——母宮の命も危くなるまで、なげき給ふを人々が心配し騒いで。  
 ○はかなく過ぎ行けば——忌中の日数が淋しく過ぎ去る。  
 ○御わざ——七日七日の法事。  
 ○盡きせず——悲しさが盡くことなく。  
 ○なのめにかたほなるをだに——並々の不束な娘でも。ろくでもない子でも。  
 ○又たぐひおはせぬをだに——この母宮には葵上が一人娘であるのさへ淋

しく思つてゐられたのに。

○二條の院——紫上方。  
 ○あからさまにも——一寸なりとも。  
 ○行ひをまめに——葵上の追善冥福のために、讀經動行を眞面目にする。  
 ○左衛門の司——齋宮が野宮に入らせられる以前に、まづここに入られる

○かぎりあればうすすみ衣云々の歌——妻の喪に著する喪服には、一定の規定があるから、只今著てゐる私の喪服の色は薄い色であるけれども、妻を思ふ悲しみの涙は袖に淵をなすほどである。それほど強く妻を追慕してゐる。○何にしのぶの——後選集、雜歌二に、兼忠朝臣の母の乳母の歌として「むすびをきしかたみのこだになかりせばなにしのぶの草をつままし」とあるによる。

宮はしづみ入りて、そのままに起きあがりたまはず、あやふげに見え給ふを、また思し騒ぎて、御祈禱などせさせたまふ。はかなく過ぎ行けば、御わざの急ぎなどせさせたまふも、思しかげざりしことなれば、盡せずいみじうなむ。なのめにかたほなるをだに、人の親はいかが思ふめる、ましてことわりなり。又たぐひおはせぬをだに、さうざうしく思しつるに、袖の上の玉の碎けたりけむよりも、あさましげなり。

葵上が死なれてからは、母宮は憂に沈みなさつて、床に臥されたままお起きにもならない。さうして母宮の命も亦、危篤なさまに見えたから、又々いろく騒ぎ立てて御平癒のための御祈禱などを始めさせなされた。喪服中の日も淋しく過ぎ去つて行くので、冥福の御法事のこともどもが、急いで準備なさるについても、かうしたことは思ひもよらぬことであつたから、物

事につき、悲しさがはてもなくたいへんなさまであつた。元來普通なみく娘でさへも、その親はどう思ふだらうか、それこそ非常に愛して、このやうな死んだときはまこと悲しいものである。ましてや葵上の如きよい娘を持つた親としては、この際泣き悲しむのも無理はない。又葵上はこの母宮の腹の一人娘であつたので、この一人であるといふことさへも、物淋しく思召してゐられたのに、それが死んでしまつては、袖の上の玉が碎けたよりも驚きなげかれたことである。

○袖の上の玉——鈴木朗は、漢語に人の子を掌上珠といふのをただ一もじかへたものと言つてゐる。又白氏文集、哭崔兒詩云、掌珠一顆兒三歲、鬢雪千莖父六旬、豈料汝先爲異物、常憂吾不見成人、悲傷自斷非因劍、啼眼加昏不是塵、懷抱又空天默々、依前重作鄧攸身——ともある。

大將の君は、二條の院にだにも、あからさまにも渡りたまはず。あはれに心深く思ひ歎きて、行ひをまめにし給ひつつ、明し暮したまふ。所々には、御文ばかりぞ奉りたまふ。かの御息所は、齋宮の左衛門の司に入りたまひにければ、いとゞいつくしき御清まはりに託けて、聞えも通ひ給はず。憂しと思ひしみにし世も、なべていとはしくなりたまひて、かかる羈絆だに

添はざらましかば、願はしきさまにもなりなましとおぼすには、まづ對の姫君の、さうさうしくて物し給ふらむ有様ぞ、ふとおぼしやらるる。

のである。  
○いつくしき御清まはり  
— 殿重な潔齋。  
○愛しと思ひ— 源氏が。  
○かかる羈絆— かやうな夕霧でも生れなかつたならば。  
○願はしきさまにもなり— 嘗てからの思ひ通りに、出家入道でもしたいと御考へになると。  
○對の姫君— 紫上。

大將源氏の君は、二條院の紫上の方へさへも、一寸も行かれない。まして他の方々の所は言はずとも行かれなかつた。さうして物悲しく心に泌みくと思ひなげいて、ただ葵上の追善供養のための、讀誦勤行ばかりを眞面目に行ひながら、その日くを明し暮してゐらつしやる。此處彼處の女のもとへは、御たよりの御手紙だけが送られた。彼の六條御息所は、御娘の齋宮が左衛門府にお移りなされたといふので、いと殿重な御潔齋であるといふことにかこつけて、お互に音信もなならない。源氏は心愛い世の中だと思ひ込まれたこの世も、今はすべて何につき彼につき、まことに厭はしく感ぜなかつて、斯やうな夕霧といふ身のほだしさへ生れなかつたならば、今は兼ねてからの宿望であつた出家入道もしてゐるだらうと思召される。それにいつても先づ、二條院の對屋に住んでゐる紫上の、淋しいさまに暮らしてゐらつしやるだらうといふことを、ふと思ひ出された。

源氏が世の中をなべていと仰せられてゐるのは、嘗ては父帝の御位を去りたまへることあり、今又葵上の死去があつた爲めであらう。

夜は、御帳の内に一人臥したまふに、宿直の人々は、近う廻りて侍へど、傍さびしくて、時しもあれとねさめがちなるに、聲すぐれたるかぎり選び

○御帳の内— 帳臺の内。  
○時しもあれや— 古今集哀傷歌に「時しもあれ

秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しき物をしとある歌をさす。  
○聲すぐれたる— 聲のよい僧侶だけ。  
○菊の氣色ばめる— 菊の咲かうとしたもの。  
○青鈍色— 青黒い色。

侍はせたまふ念佛の曉がたなどしのびがたし。深き秋のあはれまさりゆく風の音、身にしみけるかなと、ならばぬ御獨寢に、あかしかね給へる朝ほらけの霧わたれるに、菊の氣色ばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、さしおきていにけり。

源氏の君は、夜は御帳臺の内にただ一人で御寢になる。このとき御宿直の人々は、君の御傍近くに廻つて伺候してゐるが、君は何となくあたり淋しく思召され「時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しきものを」といふ古今集の歌を思ひ出して、目覺め勝ちでゐられる。かうしたときに、音聲のすぐれて美しい僧侶だけを選択して御側に侍らせながら、念佛をなさる夜明け方などは忍びがたいものがある。秋もいよく更けて、物あはれの増り行く頃の風の音は、身にしみくとしてくるものであると、君は今まで慣はぬ御獨り寢をなされ、一夜を明かし困つてゐられる明け方、霧が一面に立ち渡つてゐた。この時菊の今にも咲かうとしてゐる枝に、青鈍色の濃い紙に認めた手紙を結びつけて、源氏のもとに置いて行つた使があつた。

「今めかしうもとて見たまへば、御息所の御手なり。」聞えぬほどはおぼし知るらむや。

人の世をあはれときくも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ

○今めかしうもと— 氣取つた當世風な手紙かと。  
○聞えぬほどはおぼし知るらめや— 齋宮の潔齋のために、御文通申すこ

との出来なかつたことは御推察下さるでせうか。○人の世のあはれ云々の歌——補欄参照。

○ただ今の空に思ひ給へあまりてなむ——只今のあはれな空の氣色に、殊更耐へられぬほど悲しくなりまして。

○常よりも——源氏の心。

○つれなの御とぶらひ——自分が生靈となつて、葵上を崇り殺しながら、知らぬ顔をして悔みをいふとは。

○かき絶え——これきり御息所をおとづれないのも。

○人の御名の朽ちぬべき——御返事をせないと御息所は捨てられたといふことになり、彼女の名譽が失墜するだらうかと。

ただ今の空に思ひ給へあまりてなむ」とあり。常よりも優にも書いたまへるかなと、さすがに置きがたう見給ふものから、つれなの御とぶらひやと心うし。さりとして、かき絶えおとなひ聞えざらむもいとほしく、人の御名の朽ちぬべきことを思しみだる。

此の手紙は、當世風な派手なものであるかと源氏の君が御覽あそばされると、それは六條御息所の筆跡である。御息所からの消息文には「ながらく御消息を申しあげませんでした、これは齋宮の潔齋のためであつたといふことを、御推察下さるでありませうか。

人の世をあはれとくも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ

ただ今の、物哀れな空の氣色を見まして、耐へられぬほど悲しくなりまして、かくおたよりを申し上げます」と書いてあつた。さて源氏は、この手紙はいつもよりも優美に書かれたものであるかなと。さすがこのままに捨て置きがたく御覽なされたけれども、然し彼女は生靈となつて葵上を殺しながら、知らぬ顔をして弔ひをいふとはひどいやりかただといやに思召された。とはいふものの、このままで、彼女に音信をせないと、氣毒でもあり、又生靈のことなどから源氏に捨てられたなどと、世人の噂に上つて、御息所の名譽も失墜するだらうと、源氏はさまざまに思ひみだれなかつた。

人の世のあはれと云々の歌——御逝去あそばされた葵上の身上を氣毒だと傳へ聞くについ

ても、私は悲しさに袖はうちしめりますのに、ましてや後にお残りあそばされたあなたこそぞぞ悲しい涙で袖もびつしよりであらうと御推察いたしますの意。

過ぎにし人は、とてもかくてもさるべきにこそは物したまひけめ。何にさることを、さだくとけざやかに、見聞きむと悔しきは、わが御心ながら、なほえ思し直すまじきなめりかし。齋宮の御きよまはりも煩はしくやなど、久しう思ひ煩ひたまへど、わざとある御返なくは情なくやとて、紫のにばめる紙に、「こよなうほど經はべりにけるを、思ひたまへ怠らずながら、つつましきほどは、更に思し知るらむやとてなむ。

とまる身も消えしもおなじ露の世に心おくらむほどぞはかなき

かつは思しけちてよかし。御覽ぜずもやとて、これにも」と聞え給へり。

死んで逝つた葵上は、いづれにしても、かやうな生靈のために亡くなられるべき運命でならせられたのであらう。それにしてもどうして、あのやうな生靈などのことをたしかに判然と見もし聞きもしたことであらう。と源氏は厭や物思ひを悔しくしてゐられるのは、御自分の御心からも、やはり御息所を厭ふ心がまだなほらないものと思はれる。齋宮の御潔齋中に、喪中である我れ源氏から、御消息申しあげるのも、却つて面倒なこともあらうかと、久しく考へてゐ

○過ぎにし人——死んで行つた葵上は、ああした運命であつた。

○何にさることを——どうしてあんな忌々しい生靈のことなどを。

○さだくと——たしかに。

○わが御心ながら——我ながらやはり、御息所を疎む心を取直し得ないと見える。

○齋宮の御きよまはりも云々——源氏の心で、齋宮の潔齋の處へ、死者の喪にゐる我より、おとづれをするのも憚るべきかと思ふが。

○わざとある御返なくは——わざと下さつた御手紙に返事をせないのも。

○紫のにばめる紙——紫の黒みがかつた紙。○こよなうほど經はべり

云々——久しく御無沙汰  
いたしましたことは、始終心  
にかけながら、忌中故あ  
なたはお察し下さるだら  
うと思つて、今迄うち過  
ぎました。

○とまる身も云々の歌——  
補欄参照。

○更に思し知るらむや——  
更に私からも御推量下  
さること存じまして。

○思しけちてよかし——  
従つて御心配下さるな。  
なほ執念を去れといふこ  
とも兼ねてゐる。

○里におはする——六條  
御息所が里邸にゐられ  
る。

○ほのめかしたまへる——  
生霊になつたことを、  
源氏がそれとなく知らせ

なかつたのを。  
○心の鬼に著く——良心  
の阿責で、すぐそれと氣  
づき。

○さればよ——されば思  
つた通りに、そのやうな  
噂が立つたのかと思召さ  
れる。

○なほいと——これ御息  
所の心である。  
○故前坊の——前の皇太  
子のことで、桐壺院の御  
兄弟にあたる。

○いみじう思ひかはし——  
前坊と桐壺院とは、同  
じ兄弟といふ中でも、殊  
のほか陸しくて。

○ねんごろに聞え——故  
前坊が齋宮のことを、桐  
壺院に懇に頼み置かれ  
て。

○その御かはりに——故  
前坊の代りにも、御息所  
を世話しようと、院も仰  
せられたが、これ後宮に  
入れて世話することをさ  
す。  
○やがて内裏住したまへ

らせられたが、御息所からわざ／＼音づれ下さつたのに、その御返事を申さないのも薄情なこ  
とであるかと思ひかへして、紫色の黒ずんだ紙に、源氏は消息の文を認めなされ「随分永らく  
の間御無沙汰いたしました。然しこれは始終あなたのことを心にかけて思ひながらも、私が  
忌中であつたから、この點は更にあなたも御推察下さるであらうと存じまして、失禮いたしま  
した。

とまる身も消えしもおなじ露の世に心おくらむほどぞはかなき

御とぶらひの文を下され、まことにありがたうございましたが、まあ、あのやうな葵上のこと  
は、あまり御心につけないで下さい。御潔齋中であられる御息所のことでもありますから、  
こちらから御消息を申し上げても、御覽なされないだらうと存じまして、私の方でもおたづね  
するのを遠慮してゐました」と申し送られた。

○とまる身も消えしも云々の歌——この世に生き残るのも、死んで逝くのも、同じく果敢な  
い無常な世の中であるのを、この世に執著するのはつまらぬことでもありますの意。暗に御息所  
の執念深くゐらせられのを諷してゐる。

里におはする程なりければ、忍びて見給ひて、ほのめかしたまへる氣色を、  
心の鬼に著く見たまひて、さればよと思すもいとみじ。なほいと限りな  
き身のうさなりけり。かやうなる聞えありて、院にもいかにおぼさむ。故

前坊の同じき御兄弟といふなかにも、いみじう思ひかはし聞えさせ給ひて、  
この齋宮の御事をも、ねんごろに聞えつけさせたまひしかば、その御かは  
りにも、やがて見奉りあつかはむなど、常にのたまはせて、やがて内裏住  
したまへと、たび／＼聞えさせ給ひしをだに、いとあるまじき事と思ひ離  
れにしを、かく心よりほかに若々しき物思ひをして、遂にうき名をさへ流  
しはつべき事と、思しみだるるに、なほ例のさまにもおはせず。

御息所は御自分の里邸にゐらせられる時であつたので、御潔齋中であるといふものの、内々  
で源氏から來た消息を御覽になつた。さうしてその中に源氏が御息所の生霊となつたことをほ  
のめかしてあるさまを、すぐそれとお悟りになり、良心の苛責にひどく責められて、さては思  
つてゐた通りに、さうした噂が世間に立つたのかと思しめされるについても、心中の思ひは何  
ともいひやうがない。やはり我は限りなく心憂い身の上だと、御息所は思ひなされた。かうし  
たことが桐壺院の御耳にも聞えたなら、院にはどのやうに思ひなさるだらう。それこそ非常に  
びつくりなさに違ひない。前の春宮は御兄弟といふ中でも、この院とは格別に睦まじくしてゐ  
られたので、今の齋宮の事ども、院によりしくたのむと懇ろに御遺命があつたから、桐壺院  
は前坊の代りに、御息所を世話してやらうなど、常々仰せられて、そのまま汝は宮中に御住居

——故前坊崩御後、そのまま御息所は宮中に住むようにと。即ち女御にでもなるようにと。  
 ○いとあるまじき事と——御息所は前坊の妃でゐられたので、今又御兄弟の桐壺院にまみえるのはあるまじきことと思つて。

○かく心よりほかに若々しき物思ひ——思ひもよらぬ年下の源氏と關係して。  
 ○なほ例のさま云々——やはり御病氣である。

○さるは云々——さはさりながら、御息所は。  
 ○大方の世——すべての世の藝能。  
 ○野宮の御うつろひ——齋宮が内裏から野宮に移るときにも。  
 ○今めきたる——現代的な。  
 ○好しきなど——好色め

なさいと、幾度となく仰せられた。けれども御息所は嘗ては前坊の妃でゐらせられたのが、前坊が亡くなされたからとて、その兄弟である桐壺院に再びまみえるといふのも、決してあるべからざることだと思つて、院の仰せに従はないでゐられた。それがかく思ひがけなくも年下でゐられる源氏の君と關係して、遂に浮き名を世の中に流すのであるかと、御息所は御心痛あそばされて、やはりいつもの如く鬱々としてゐられる。

○里におはする程——父おとどの六條京極の家におはしたのである。

六條御息所につきては、夕顔巻に源氏の君のはじめて通ひ給ふことが見え、桐卷に十六にて故宮前坊をに参りたまひて、二十にておくれ奉り給ひ、源氏君廿三八月十六日御娘の齋宮秋好の中宮と申すにそひて、伊勢に下りたまふ。又濡標巻に廿九に齋宮下りたまふにより、都の六條の宮に歸し、同年秋病によりて出家して尼となり、やがて失せたまふと。

さるは大方の世につけて、心にくくよしある聞えありて、昔より名高くものしたまへば、野宮の御うつろひの程にも、をかしう今めきたる事多くしなして、殿上人どもの好しきなどは、朝夕の露分けありくを、その頃の役になむするなど聞きたまひて、大將の君は、道理ぞかし、ゆゑは飽くまでつき給へるものを、もし世の中にあきはてて下り給ひなば、さうくしく

もあるべきかなと、さすがに思されけり。

かしきものども。  
 ○朝夕の露分けありくを——露を踏みわけて朝晩野宮通ひするのを。これ御息所に心をよせるのである。  
 ○道理ぞかし——人々のさまを聞きて、御尤なことだと源氏の思ひたまふのである。  
 ○ゆゑは——ゆゑあるさま、趣味のありなさることとは。  
 ○下り——伊勢へ。

○正日——七十四十九日の恩明をいふ。  
 ○三位の中將——奏上の兄頭中將である。既に三位になられたので、ここに初めて三位中將と見えらる。  
 ○みだりがはしき——好色の物語。  
 ○かの内侍——かの源内侍が、お笑ひの材料となる。  
 ○祖母殿のうへ——老女

さうはいふものの、この御息所は、すべて世の藝能趣味といふことにかけては、奥ゆかしく品のある方だといふ評判の高い方で、昔から名高い人でゐらせられたので、齋宮の野宮に御移りのときにも、風雅に現代的なことを多くされたのであつた。ために殿上人どもの中で、好色者などは朝晩野宮あたりの道を、露を踏み分けて歩くのが、その頃の仕事としてゐられたといふことを、源氏の君がお聞きになり、それは尤も至極なことである。御息所は御趣味の方について、飽くまで深い方であるから、若しや彼の方がこの世の中に飽き果てて、齋宮と共に伊勢の國へ下向にでもなつたなら、それこそ物淋しいであらうと、なにと言つても御息所を思ひ捨てがたく思しめされた。

御法事など過ぎぬれど、正日までなほ籠りおはす。ならばぬ御徒然を心苦しがりたまひて、三位の中將は常に参りたまひつつ、世の中の御物語などまめやかなるも、又例のみだりがはしき事をも聞えたまひつつ、慰め聞えたまふに、かの内侍ぞうち笑ひ給ふくさはひにはなるめる。大將の君は、「あないとほしや。祖母殿のうへな、いたうかろめ給ひそ」と諫めたまふものから、常にをかしと思したり。かの十六夜のさやかなりし秋の事など、

さらぬもさまぐのすきごとどもを、かたみに隈なく言ひ顯したまふ。はては、哀なる世をいひくつて、うち泣きなどもし給ひけり。

○いたうかるめ給ひよーひどく軽んじなさるな。  
○かの十六夜のさやかなりし——末摘花に源氏のあひなさつた事、十六夜の月に常陸宮にて頭中將の源氏を見あらはしたことをいふ。  
○秋の事——常陸宮からの後朝に、頭中將猶いとねぶたげなるなどはぶれなさつたこと。  
○すきごと——女についての話。  
○くまなく——残りなく。

○中將の君——頭中將、  
○うすらかに衣がへして——今迄よりも薄黒い喪服に着かへられたので、

葵上の御法事は終つてしまつたが、それでも七七四十九日の正日までは、源氏の君はやはり引籠つてゐられる。君にはこのやうな今まで経験したこともない徒然で、退屈な日を送つてゐられるのを氣毒に思つて、三位の中將が常に君の御許に参候された。さうして世の中の御物語で眞面目な方面の話も、又いつもの通りの好色の物語なども申しあげながら、源氏をお慰め申した。このときは彼の源内侍がお笑ひになる好材料になるやうであつた。大將源氏の君は「ああ、可愛さうである。好いお姿様である源内侍を、そんなに軽んじなさるな」とお制しになりながら、いつも滑稽だと思しめされた。彼の春の十六夜の晩、源氏が末摘花に逢ひあさつて、頭中將に發見せられたこと、及び秋の頃常陸宮からの後朝の朝寢に頭中將にからかはれたことども、その他いろ／＼な女話どもを、源氏と三位中將とはお互に隠し残すところなく語りあひなさつた。さてしまひには無常な世の果敢なさを語りつづけて、涙を落して泣きなさつた。

○みだりがはしき事をも聞えたまひつづ——この句について、鈴木朗は「一本にきこえ出でつづとあるぞよき」と言つてゐる。

時雨うちして、物哀れなる暮つかた、中將の君、鈍色の直衣指貫、うすらかに衣がへして、ををしくあざやかに、心恥かしきさまして参りたまへり。

日も経過したので喪服も軽くなつたのである。十月の更衣。

○君は——源氏。  
○涙も争ふこちして——涙も時雨と争つて落ちるやうな心地がして。  
○雨となり雲とやなりにけむ——劉夢得の詩の句に「相逢相失兩如夢、爲雨爲雲、今不知」とあるをさす。  
○女にては見捨ててなくならむ——こんな美しい源氏の君を見捨てて死に去つた女の魂は、必ず執著して迷ふであらう。  
○色めかしき心地——頭中將の好色な心には。  
○しどげなう——源氏のしまりなくみだしてゐられる。  
○紐ばかりを——紐だけをお締め直しになる。今まで直衣の紐をはづしてゐられたのである。  
○これは今少し云々——源氏の服装は、頭中將よ

君は、西の妻戸の勾欄に押しかかりて、霜枯の前栽見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き、時雨さとしたるほど、涙も争ふこちして、「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」とうちひとりごちて、頬杖つき給へる御さま、女にては見捨ててなくならむ魂魄、必ずとまりなむかしと、色めかしき心地に、うちまもられつつ、近うつい居給へれば、しどけなう打ち亂れたまへるさまながら、紐ばかりをさしなほし給ふ。これは、今少しこまやかなる夏の御直衣に、紅の艶やかなる引き重ねて、やつれたまへるしも、見てもあかぬ心地ぞする。

時雨が降つて、物哀れに思はれた日の暮れ方に、頭中將が來られた。中將は折から十月の衣更へであつたので、葵上死去以來日も随分経過したことであるから、やや薄黒い直衣指貫に召し更へられた喪服で、堂々と男らしくきつぱりした態度でゐられた。この立派な風采を見ては見た方が恥づかしくなるほどであつた。源氏の君は、西の妻戸のものと勾欄によりかかつて、霜で草木も枯れ果ててしまつた庭の植込みを見てゐらつしやつたときであつた。折から風が荒らかに吹き、時雨がさつと降つて來て、何となく物悲しくなり、落ちる涙は時雨の降るのと争つて流れる心地がした。源氏はこのとき「相逢相失兩如夢、爲雲爲雨今不知」

り少し濃い鈍色の夏の直衣に。  
○紅の艶やかなる——下襲ねの色。

○中將も云々——頭中將も、亡くなつた葵上は自分の妹であるから哀に思はれ。  
○ながめ給へり——時雨の空をながめ給ふのである。  
○雨となりしぐるる云々

奏

といふ詩の句を獨り口ずさんで、頼杖ついてゐらつしやる。その御姿の美しいのを眺めてゐた頭中將は思ふやう、こんなに美しい君を打ち捨てて、死んで去らねばならぬ女の魂は、さぞ心残りが行くべきところへも行かれず、この世にさまようてゐることであらうと、頭中將は例の好色の心からして、じつと源氏を注視しながら、君の傍近くに接近した。このとき源氏はだらしないさまに打寛いでゐられながらも、直衣の紐だけをひき結びなされた。源氏の君の服装はまだ衣更なさらないので、中將よりも今少し濃い夏の直衣に、紅の艶やかな下襲を重ねて召され、やつれたさまをしてゐられたが、眺めてゐても見飽きのせないつかしい姿でゐられる。

補

○雨となり雲とやなりにけむ——河海抄に「文選宋玉神女賦曰、我帝之季女名瑤姬未行而已封于巫山之臺、所謂巫山之女高唐之姬、且爲行雲暮爲行雨、朝々暮々陽臺之下、有所嗟二首、劉夢得、度令樓中初見時、武昌青柳似腰支、相逢相失兩如夢、爲雨爲雲今不知、鄂渚濠々烟雨微、女郎魂逐暮雲歸、只應長在漢陽渡、化作鶯鶯一雙飛、劉禹錫婦に後れて作詩也」と見える。

中將も、いとあはれなるまみにながめ給へり。

雨となりしぐるるそらのうき雲をいづれのかたとわきてながめむ

ゆくへなしやと、ひとりごとのやうなるを、

見しひとの雨となりし雲井さへいとどしぐれにかきくらすころ

の歌——補欄参照。  
○ゆくへなしや——行方も分らない命であるかな。  
○見しひとの云々の歌——補欄参照。  
○淺からぬ程しるく——源氏の葵上を思しめされることの深い。  
○あやしう——中將の不思議に思ふのである。  
○年頃はいとしもあらぬ御志を——數年來といふものは、源氏の葵上に對する愛はさ程でもなかつたのに。  
○居立ちて——桐壺院の立居につきつね。  
○大臣——左大臣の待遇も氣毒なほどであるし。  
○大宮の御かたさまにもてはなるまじき——葵上の御母大宮は、桐壺院の御妹で、源氏とは叔母にあたる切り難い關係がある。  
○方々にさしあひたれば——どちらから見ても、

との給ふ御氣色も、淺からぬ程しるく見ゆれば、あやしう、年頃はいとしもあらぬ御志を、院など居立ちてのたまはせ、大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御かたさまに、もてはなるまじきなど、方々にさしあひたれば、えしもふり捨て給はで、物うげなる御氣色ながら、ありへ給ふなめりかしと、いとほしう見ゆる折々ありつるを、まことにやむごとなく重きかたは、殊に思ひ聞え給ひけるなめりと見しるに、いよく口惜しうおぼさる。よろづにつけて、光り失せぬる心地して、屈しいたかりけり。

頭中將も自分の妹の葵上が亡くなつたので、頗る悲しい目つきで空を眺めてゐられた。さうして一首の歌

雨となりしぐるるそらのうき雲をいづれのかたとわきてながめむ

葵上の亡き魂は、何處に行つたやらわからないことだわいと、獨言のやうにつぶやかれると、

源氏の君が返歌として、

見しひとの雨となりし雲井さへいとどしぐれにかきくらすころ

と仰せられる御様子を見ても、源氏が葵上を愛し思うてゐられたことの淺からぬことが著るく見えたので、頭中將が不思議に思ふには、數年來といふものは、源氏が葵上に對する愛情はさ

奏

いろ／＼な關係がさし  
 きたるので。  
 ○えしもふり捨て給はで  
 源氏が葵上を振り棄  
 てないで。  
 ○物うげなる御氣色なが  
 らありへ給ふ——源氏は  
 いや／＼ながら、葵上と  
 の關係をつゞけて來られ  
 たのであらうと。  
 ○いとほしう——頭中將  
 と源氏とは親友の關係に  
 あつたのだから、頭中將  
 が源氏に同情したのであ  
 る。又中將は右大臣の娘  
 を妻として困つてゐたた  
 めの同情も一因をなして  
 ゐる。

○まことはやむごとなく  
 眞實には、源氏は葵  
 上を大へんふかく思つて  
 ゐられたことを見る。  
 ○珠に思ひ云々——格別  
 に葵上を寵愛してゐられ  
 たことがわかるので。  
 ○いよ／＼口惜しう——  
 中將がいよ／＼葵上の死  
 を惜しむ。

ほどまででもなかつたのを、桐壺院が立居につきつね／＼、彼女を大切にせよと仰せられるし、  
 彼女の父左大臣の源氏を待遇なさることも大へんなもので、氣毒に思はれたほどであるし、母  
 大宮の方も、桐壺院の御妹で、源氏にとつては御叔母にあたるので、切つても切られない關係  
 があるなど、どちらの方から見ても、かく切られない事情がさし重つてゐたから、源氏は  
 彼女を振り捨てることも出來得ず、厭はしい御様子ながら、葵上と關係をつゞけて來られたの  
 であらうと、中將から見ても、源氏を氣毒なことだと同情申した時またび／＼あつた。然るに只  
 今の君の御様子からして察すると、源氏の彼女を眞實に大切にしてみられたことは、格別に御  
 寵愛なされたものであらうと思はれる。それについても、短命で亡くなつた葵上を、いよ／＼  
 口惜しく思つた。かく頭中將は、葵上の死後はよろづのことどもについて、火の消えたやうな  
 淋しい心地がして、氣もふさいでゐた。

○雨となりしぐるる云々の歌——昔楚王の夢に見えた巫山の神女は、陽臺の下に雲雨となつ  
 て現れたといふことだが、死んで行つた葵上の魂は雲となり雨となつて時雨れるのであらう。  
 さてその葵上の形見とも見るべき雲は、空の何れのあたりであると思つて眺めようか。さても  
 それらしい雲も見えないことだ。○見しひとの雨となりし雲井云々の歌——妻として相見え  
 てゐた葵上も、とう／＼死んで雲となり雨となつたが、その雲のある空さへ、ひどく時雨のた  
 めに眞黒に曇つて、何れが彼女の雲であるか、定かに見えないのがまことに悲しい。  
 頭中將は元來、源氏の君と無二の親友であつたが、この親しい交りを結ぶに至つた一つの原

○よろづにつけ——これ  
 頭中將が思ふのである。  
 ○屈しいかりけり——  
 ひどくふさいでゐた。

○折らせたまひて——源  
 氏が。  
 ○若君の御乳母——夕霧  
 の乳母。  
 ○草がれのまがき云々の  
 歌——補欄参照。  
 ○にほひ劣りてや——夕  
 霧を葵上ほどに、かはゆ  
 くは思召されぬか。  
 ○聞えたまへり——大宮  
 に申上げられた。  
 ○木の葉よりけにもろき  
 御涙——心なき風の吹く  
 に、木の葉のもろく散る  
 を見てさへ、大宮はそれ  
 よりも勝つて、もろい御  
 涙を流してゐられたか  
 ら、まして源氏からの音  
 信については一層もろく  
 も涙を流しなかつた。  
 ○今も見てなか／＼袖を  
 くだすかな云々の歌——  
 補欄参照。

因としては、中將の妹葵上が源氏の正妻であるといふことが、中將をして一層打解けて源氏と  
 交はらせたものに違ひない。然るにその妹を失つた中將は、何となく源氏との親交に於て淋  
 しさが生じたやうに感じたのも無理からぬことである。

枯れたる下草の中に、龍膽瞿麥などの、咲き出でたるを折らせたまひて、  
 中將の立ちたまひぬる後に、若君の御乳母の宰相の君して、

「草がれのまがきにのこるなでしこをわかれし秋のかたみとぞ見る」

にほひ劣りてや御覽せらるらむ」と聞えたまへり。げに何心なき御笑顔ぞ  
 いみじううつくしき。宮は、吹く風につけてだに、木の葉よりけにもろき  
 御涙は、ましてとりあへ給はず。

今も見てなか／＼袖をくだすかなかきほ荒れにしやまとなでしこ

枯れ果てた下草の中に、龍膽や、なでしこの花などが、咲き出でてゐるのを、源氏の君が人  
 をして折り取らせられ、頭中將の歸つて行つた後に、この花に一首の歌をそへて、夕霧の御乳  
 母の宰相の君を使とし、これを持たせて大宮の許に遣はされた。そのときの源氏の歌に、  
 草がれのまがきにのこるなでしこをわかれし秋のかたみとぞ見る

この夕霧は亡くなつた葵上よりもかはゆく御覽なさいませんでせうかと、御消息をも申しあ



げられた。まこと何心もない無邪氣な若宮夕霧の御笑顔こそ、頗る愛らしいものである。大宮はこの頃は吹く風の物哀れなものにつけてさへも、木の葉のもろく散るのよりも一層勝つて、もろく落ちる涙であつたのが、今源氏からの御消息に接しては、とりあへず涙が流れるのであつた。そこで大宮は御返歌として、

今も見てなか／＼袖をくたすかなかきほ荒れにしやまとなでしこ  
とあつた。

補 ○草がれのまがき云々の歌——秋は去り秋草も枯れ果てた垣根に、わづかに残つてゐるなでしこの花を、別れ去つた秋の形見として眺めてゐますといふのが、この歌の表の意で、裏の意は、秋を死んでしまつた墓上になどへ、なでしこを夕霧になどへて、死に去つた墓上の形見としては、なでしこのやうな可愛い夕霧をせめてもの慰めとして眺めてゐます。○今も見てなか／＼袖を云々の歌——歌の表の意は、あらしを防ぐよすがとなつてゐた垣根が荒れ果ててからは、そこに咲いてゐるなでしこの花を見ても、却つて可愛さうになり涙で袖をぬらす。乃ちこの歌の裏の意は、この縁兒をかばひ育てる母がなくなつてからは、縁兒夕霧を見るにつけ、かへつて袖をくたすほど涙でぬらすのであるといふ意。この歌については、本居宣長は、玉の小櫛に「おのがをしへ子稻掛大平がいはく、このはじめの句は、古今集に、あなこひし今も見てしが云々の歌によりてよめる也。然らざれば今もといふ詞、いたづら也、さてかの歌の一首のころをもちて見るべき歌也といへり」と言つてゐる。この古今集の歌といふのは、同集戀歌

四「あな恋し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ」とあるのをさす。

○なほいみじう——源氏の君が。  
○今日のあはれは——悲しみを催す今日の天候。  
○さりとも見知り云々——それにしても、知つて下さるだらうと推察するだけの御心を持つてゐられたから。  
○聞えたまふ——源氏から朝顔の姫君に消息を送られる。

○絶間遠けれど——たまさかな文通ではあるが、従来時々文通があつたので。  
○さのものとなりたる——さうした習慣となつてゐたもの。  
○特なくて——源氏からの御消息を、朝顔の姫君がとがめられないでごらんになる。當時はまことの情をかよはし給はぬ中は、文をかよはさないならひであつた。

なほいみじうつれ／＼なれば、朝顔の宮に、今日のあはれはさりとも見知りたまふらむと、推し量らるる御心ばへなれば、暗きほどなれど聞えたまふ。絶間遠けれど、さのものとなりにたる御文なれば、咎なくて御覽ぜさす。空の色したる唐紙に、

「わきてこのくれこそ袖は露けけれ物おもふ秋はあまたへぬれど

いつも時雨は」とあり。御手などの心とめてかき給へる、常よりも見所ありて、過し難きほどなりと人々も聞え、自らもおほされければ、大内山を思ひやり聞えながら、えやはとて、

秋ぎりに立ちおくれぬと聞きしよりしぐるる空もいかゞとぞ思ふ

とのみ。ほのかなる墨つきにて、思ひなし心憎し。

源氏の君は頗る退屈であつたから、朝顔の姫君のことどもを思ひ出だされた。彼の姫君は心解せない間柄のやうでもあるが、然しあの御性格でゐられるから、今日の悲しみを催す哀れな空の気色は、それにしても御理解なさるであらうと想像せられる御心の持主でゐられるから、

○わきてこのくれこそ云々の歌——補欄参照。  
 ○いつも時雨は——河海抄に伊行尺として「神無月いつも時雨はふりしかどかく袖ひづるおりはなかりき」とある。どは異本に「け」とある。  
 ○返し難きほどなりと——御返事せねばならぬ場合ちやと侍女達も申すので。  
 ○自らもおぼされ——朝顔の姫自身も、そのやうに思はれたので。  
 ○大内山——源氏の君の閉居してゐられるところをさす。  
 ○えやはとて——「色ならばうつるばかりも染めてまし思ふ心をえやは見せける」といふ古歌によるもので、あなたの心はよくも私に知らせて下さらない。  
 ○秋ぎりに立ちおくれぬ云々の歌——補欄参照。  
 ○ほのかなる雲つき——

軽々と書いたさま。  
 ○思ひなし心憎し——彼女は、さぞ奥ゆかしいだらうと源氏の思ふのである。

奏

もう日も既に暗くなつた頃であつたが、源氏は姫君のもとへ消息をなされた。もとより二人の間には、久しい間文通も絶え止んでゐたのであるが、かうした音信が時々あることになつてゐたのであるから、姫君の方でも、源氏からの消息を咎めないで御覽になつた。その文は空色の唐紙に、

わきてこのくれこそ袖は露かけれ物おもふ秋はあまたへぬれど

何時も時雨は降りますけれども、かく袖がぬれる折はございませんといふ古歌の「神無月いつも時雨はふりしかどかく袖ひづるおりはなかりき」の趣が思ひ出だされます」と書いてある。

御筆蹟なども心を用ひて書いてあつたので、いつもの時よりも立派に見える所があつた。それで侍女どももこれは何とか御返事を申さねばならぬと、朝顔の君に申されるし、姫君自身も同様に思召されたから、源氏の君の住ませたまふ大内山のさまを御推察申しながら、古歌に「色ならばうつるばかりも染めてまし思ふ心をえやは見せける」といふ如くに、源氏の御心はよくもお知らせ下さらないと仰せられて、朝顔の君の歌、

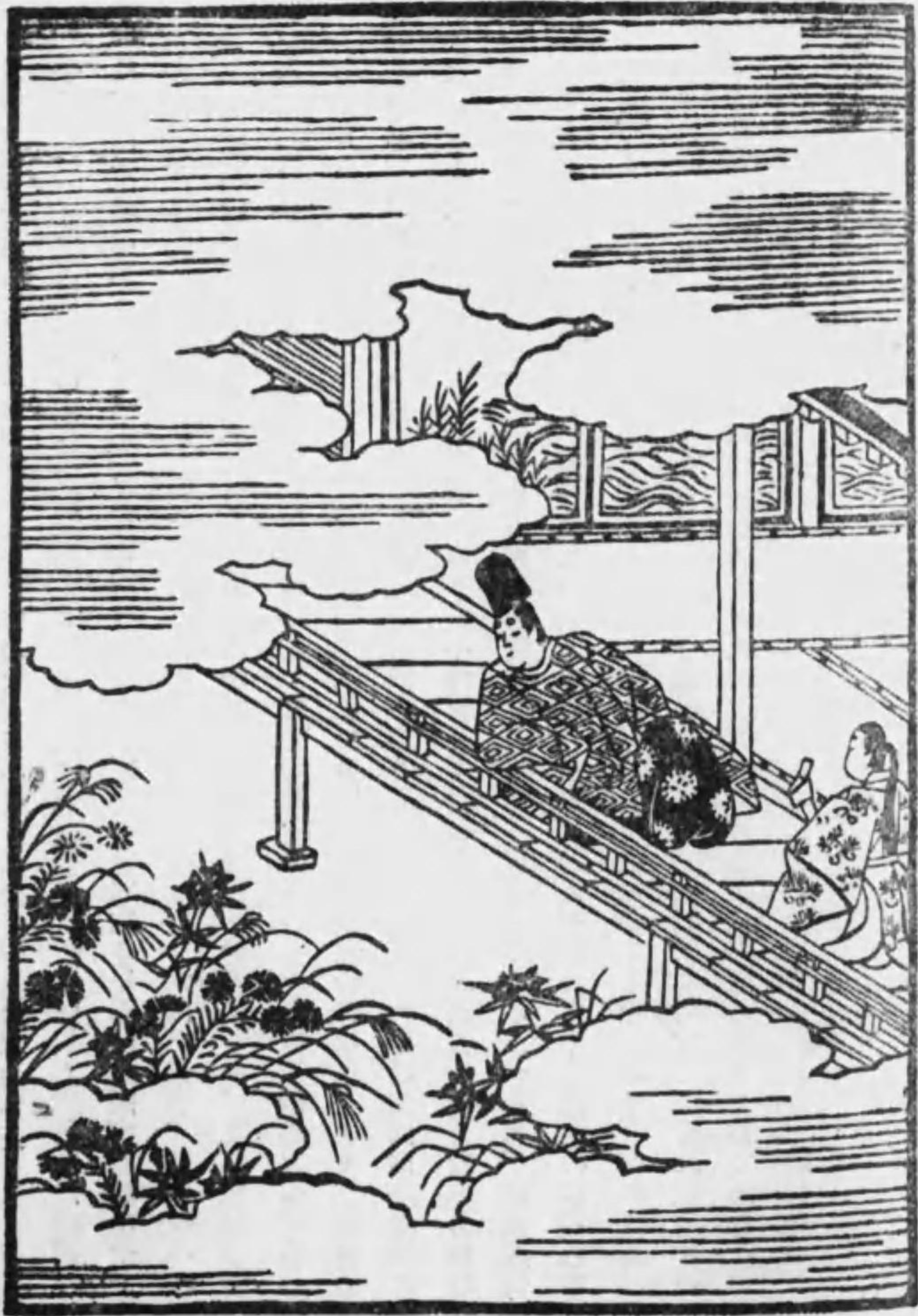
秋ぎりに立ちおくれぬと聞きしよりしぐるる空もいかがとぞ思ふ

とばかり、墨つきも軽々とほのかに書いてあつた。そこで源氏は、彼女の心は思つて見ても奥ゆかしいものであると考へられた。

補

○わきてこのくれこそ云々の歌——物思ひに悩んだ秋は、これまで随分幾年となく淋しく暮してきましたが、とりわきてこの夕暮こそ悲しさがこみあげて、袖は流るる涙でしめつぼくこ

二三八



奏

二三九

さいます。裏の意はあなたの無情な心を恨んで、これまで幾年かの秋を経過いたしました、今日この頃は更に榮上の死といふ不幸を取りかさねて、涙に暮れてゐます。あなた朝顔の君は、この哀れな我を慰めてやらうとは思召されませんかといふ意である。○大内山を思ひやり——この句は適確に解したるものなし。花鳥餘情には「大内山はこれも大内の事也。そのゆへは左大將の直廬は宜陽門の内の廊にあり、右大將の直廬は陰明門の内の廊にあり、共に中重の門の内也。西宮抄にみえたり。権の姫君の返事はそなたの事をおもひやりたてまつれども、心のうちはよもしらせたまはじと也。心は歌の詞に見えたり」と、又細流抄には「是より文の詞也。花鳥説大内山は大内の事なり、大將の直廬を云とあり。又は亭子院仁和寺の大内山と云所にをします時、堤中納言兼輔使にて参りて「白雲の九重にたつ峯なれば大内山とむべもいひけりと讀しことを思て、今源氏の物さびしくこもりをはするによそへての玉へる也。此二説何れにてもとなり」とあるが、未だ詳かならぬところである。○えやはとて——細流抄に「色ならばうつるばかりも染てまし思心をえやは見せける。心はそなたのことを思ひやり奉れども心の中をばよも知せ給はじ、思程をもえ見せぬと云心なり」と。○秋ぎりに立ちおくれぬ云々の歌——秋霧と共に果敢なく死んで逝かれた葵上に、御後れあそばされたと承りましてからは、この時雨の降りしきる空を御覽なさるについても、どんなにお歎きであらうかと、御推察申しあげて居ります。

○何事につけても——どのやうなことも、事實上に物を見ることはむづかしい世であるのを。○つらき人しもぞ——薄情な女には、却つて心をひかれなさる源氏の御性質である。○つれながら——愛情をそそぐといふことはなさらないが、然るべき場合々々には同情してやることを忘れられない。○これこそ云々——このやうであつてこそ、お互に眞情をあらはすことも出来るのである。○なほゆゑよし過ぎて——やはりあまりに、情趣風流を解し過ぎて。○人目に見ゆ——きはだつて人目にとまるやうなのは、御息所などをさしてゐる。○對の姫君を——二條院の對屋に住んでゐられる紫上をば、そのやうには育てまいと源氏が思しめ

何事につけても、みまさりは難き世なめるを、つらき人しもぞ、哀に覚えたまふ人の御心さまなり。つれながら、さるべき折々のあはれを過し給はぬ、これこそかたみに情も見えつべきわざなれ。なほゆゑよし過ぎて、人目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出てきけり。對の姫君を、さはおふし立てじとおぼす。

どのやうなことに付けても、事實より以上に見てゆくといふことはむづかしい世の中であるのに、源氏は薄情な女でも、却つて可愛いと思はれる御心であられた。ふだんは愛情をそそぐといふことはなさらないけれども、然るべき折々には、同情をそそぐことをお忘れにならない。このやうであられたので、お互に眞情をあらはすことも出来たのである。やはり彼の御息所などのやうに、情趣風流を解し過ぎて、きはだつて世人の目にとまるやうな女は、風雅過ぎたことをもやる女だといふ批難も出てきた。それであるからして、彼の二條院の對屋に住ませてある紫上は、そのやうなあまりにゆゑよしを解し過ぎた女にならないやうに養育しようと、源氏の君はお考へになつた。

○つらき人——玉の小櫛に「天のとおし明け方の月見ればうき人しもぞ戀しかりける。新古今集に入りたる古歌也。うき人をつらき人、戀しをあはれとかへて引ける也。しもこそはとある本はわろし。しもぞとある本どもによるべし」とある。

○つれづれにて戀しと云々——紫上は退屈で、我源氏を戀しいと思つてゐるだらうと、君は忘れる暇もなく思つてゐられるが。  
 ○見ぬ程うしろめたく云々——暫く紫上を見ないときでも、どう思つてゐるだらうと心配にならないのが。

○さるべきかぎりの人々——葵上の生前に、側近に侍してゐた女房達。  
 ○御前にて——源氏の君の御前にて。  
 ○中納言の君——葵に仕へた女房の名で、源氏の心をかけられた方。  
 ○しのび思ししかど——源氏が内々に關係してゐられたが。  
 ○この御思ひのほど——葵上の喪中の間だけは。  
 ○なか／＼さやうなるすぢにも——葵上の喪後は

つれづれにて戀しと思ふらむかしと、忘るるをりなければ、ただ女親なき子を置きたらむ心地して、見ぬ程うしろめたく、いかが思ふらむと覺えぬぞ、心やすきわざなりける。

【譯】紫上は淋しく退屈な生活をしてゐられるのだから、我源氏を戀しく思つてゐるだらうと、君にはかの姫君のことを忘れる暇もなくゐられるが、ただ母親のない子を養育してゐるやうな心地で、暫く紫上に逢はない時でも、どうしてゐるだらうかと不安に思つて、何と思つてゐるかしたら、恨んでゐやしないかと心配になることもないので、これこそ氣安いことであつた。

暮れはてぬれば、大殿油近くまゐらせ給ひて、さるべきかぎりの人々、御前にて物語などせさせ給ふ。中納言の君といふは、年頃しのび思ししかど、この御思ひのほどは、なか／＼さやうなるすぢにもかけたまはず。哀なる御心かなと見奉るに、大方には懐しくうち語らひたまひて、「かくこの日頃ありしよりけに、誰も／＼まぎるるかたなく、みなれ／＼て、えしも常にかからずは戀しからじや。いみじき事をばさるものにて、唯うち思ひめぐらすこそ、堪へがたき事多かりけれ」とのたまへば、いと皆泣きて、「い

極るべきことも無くなつたが、却つて好色の方面には心がけぬこと。  
 ○哀なる御心かなと——女房どもの心である。  
 ○大方には——秘め隠してゐることではなくしてよのつねのさまには。  
 ○かう日頃ありしよりけに——かうした是までより一層まさつて。  
 ○まぎるるかたなく——他事に忙殺されることなくちつとして。  
 ○みなれ／＼——見馴れ／＼して。  
 ○えしも常にかからずば——常にかうして暮されないと。  
 ○いみじき事をばさるものにて——葵上の死んで行つたことは、別問題として。  
 ○唯うち思ひめぐらすこそ——ただこれから、汝等と別れてしまつた後の事を考へると。  
 ○いふかひなき御事は——

ふかひなき御事は、ただかきくらす心地し侍るをばさるものにて、名残なきさまに、あくがれはてさせたまはむ程、思ひ給ふるこそ」と聞えもやらず。

【譯】日もとつぷりと暮れてしまつたので、源氏の君は御燈火を御側近とよりよせあそばされて、葵上の側近にお仕へしてゐた然るべき女房どもを、君の御前に呼びあつめられ、いろ／＼と御物語などがあつた。その女房の中に、中納言の君といふのがゐるが、源氏の君とは數年來隠れて關係のあつた女房である。けれども源氏は只今葵上の喪服中にある間は、遠慮してゐた葵上の歿後とはいへ、却つてさやうな好色の方面のことどもは、言葉にかけても仰せられない。君の心はさても哀れな御心でゐられると女房どもは、源氏の君を見奉つてゐると、君はそのやうなことでなくして、世のつねの話については懐しいさまにいろ／＼と物語をなされて、源氏「かうしてこの日頃は、此處にばかり居て、誰も／＼取りまぎれるほどの忙しいこともなく、以前よりもましてお互に見馴れ／＼して睦じくなつたが、今後はいつまでもこのやうにしてゐられない。遂には各々別れ去つてしまはねばならぬと思ふと、戀しくならないか。今度の葵上の死といふ悲しいことは、それはどうとも致しかたのないこととしても、今暫くでここから立ち去らねばならぬかと思ふと、堪へられない悲しいことどもが多くなつてくるのだ」と仰せられたから、御前に居た女房どもはひどく悲しくなり、誰も／＼泣いて、「葵上の亡くなられて、どうと

—葵上のはかなく死なれたことは。  
 ○さるものにて——それはそれとして、止むを得ないあきらめとして。  
 ○あくがれはてさせたまはむ——源氏がここから出られたなら、そのまま再び歸られないだらうと。

○見渡し——源氏が。  
 ○名残なくはいかに——全然再びおとづれないなどはせない。  
 ○心浅くもとりなし——随分薄情者と思つてゐられる。  
 ○心長き人だに——葵上はなくとも、氣長にここに居てくれる人さへあるならば。  
 ○見はて給ひ——ここまで言つて、又葵上のことを思ひ出しなされるのである。

もしようのないことは、ただ闇にくれまどうてゐるやうな心地がします。然しこれは止む得ないこととあきらめても、君までが名残なく、遂に故處から去つて行かれるであらう。さうして又とおもどりにならないのだと思ひだして見ますと、まことに悲しい思が胸にせまつて來ます」と、女房達は君に申しあげる元氣もなく、涙に咽ぶのであつた。  
 葵上の歿後に於ける邸内の淋しきことは、さることながら、いよ／＼日數のたつにつれて各々がちり／＼と別れ去つてしまつた後の淋しさは、今一段と痛切なものがあるのだ。源氏や女房どもはこの悲しみを今から推察して、涙に沈むのであつた。  
 あはれと見渡したまひて、「名残なくはいかに、いと心浅くもとりなしたまふかな。心長き人だにあらば、見はて給ひなむものを、命こそはかなけれ」とて、火をうちながめ給へるまみの、うちぬれ給へる程ぞめてたき。

源氏の君は哀れなさまである哉と、あたりを見渡して仰せられるには、源氏「これから全然ここを、言づれないなどといふことは、どうしてあらうか、決してそんなことはない。汝等はいを非常な薄情者と思つてゐられるわい。氣長くして葵上の亡き後も、故處を去らずゐるものがあるならば、私の又おとづれることを、あきらかに見知るであらうを、それにしても今更の如く葵上のこともが思ひ出されて、さても果敢ないものは命である。(さても浅からぬ我的心をも見知らずに、葵上は亡くなつた)と言つて、じつと燈火をながめてめられる君の御目は、

涙でびつしよりとぬれてゐるので、何ともいへない趣がある。

とりわきてらうたくし給ひし小き童の親どももなく、いと心ほそげに思へる、道理に見給ひて、「あてきは、今は我をこそ思ふべき人なめれ」とのたまへば、いみじく泣く。ほどなき拍、人よりは黒く染めて、黒き汗疹、萱草色の袴など着たるもをかしき姿なり。「昔を忘れざらむ人は、徒然をしのびても、幼き人を見捨てず物し給へ。見し世の名残なく、人々さへかれなば、たづきなさも増りぬべくなむ」など、皆心長かるべき事どもをの給へど、「いでやいとど待遠にぞなりたまはむ」と思ふに、いとど心ほそし。

葵上が御生存中に、格別愛してゐられた小童女あてきは、生みの兩親もなく、それに又主人の葵上に死に別れたので、まことに心細いさまに思つてゐた。これを御覽になつた源氏の君はそれはもつともなことだと思はれ、源氏「葵上に死に別れた汝あてきは、今からは我をこそたよりの人として信賴すべきであらう、さう思ふだらう」と仰せられると、あてきは悲しい思ひに堪へずして泣いた。

この童女は短い袖を他人よりは黒く染めて、黒き汗疹、柑子色の袴などを著て、主の喪に服してゐるさまも愛しい姿である。さて源氏の君は更に女房どもに向つて、「以前葵上に仕へてゐた

○とりわきて云々——葵上が格別に愛してゐた。  
 ○小き童——葵上の召使つてゐる童女。  
 ○いと心ほそげに——葵上に別れて淋しくしてゐる。  
 ○道理に見給ひて——尤もちやと源氏が思ひめされて。  
 ○あてき——葵上の召使ふ童女である。「あてきみ」の略、當時は童女に「き」といふ尊稱をつけて呼んだ。  
 ○今は我をこそ思ふべき——今は我源氏を、葵上と思つて頼むべきである。  
 ○ほどなき拍——小きき拍、拍は童女の上着。  
 ○人よりは黒く染めて——深く喪に服するためである。  
 ○黒き汗疹——汗疹は童女の初夏に上着の上には

をるもの。  
 ○萱草色の袴——同じく  
 喪服である。柑子色にほ  
 い同じ。  
 ○幼き人——夕霧をさ  
 す。  
 ○たづきなさまも——我の  
 たよりなさまも一層増すこ  
 とであらう。  
 ○皆心長かるべき事——  
 皆氣長く奉公するやうに  
 仰せられるが。  
 ○いでやいとど待遠にぞ  
 なり——いや、源氏の君  
 の音づれなき足が、一  
 層疎遠になるだらうと女  
 房どもが思ふのである。  
 ○大殿——奏上の父左大  
 臣邸では。  
 ○きはくほどく——  
 身分等差をつけて。  
 ○かの御形見なる——彼  
 の奏上の記念となるべき  
 もの。  
 ○わざとならぬさまに——  
 特にきわだつた立派な  
 形見わけとも見えないさ  
 まになして。

當時のことを忘れないものは、今後退屈なことがあつても、それを我慢して、忘形見の幼児夕霧を見棄てず可愛つてくれ。奏上の居たときのやうな様子もなくなり、仕へてゐた女房どももちり／＼ばら／＼に離散してしまつては、我のたよりなさまも更に強く増すことであらう」などと、女房どもに氣長く仕へるやうに仰せられるのであつたが、女房どもは又、「源氏の君は奏上生存中でさへも、疎遠にしか音づれなさなかつたのであるからして、斯く仰せられるとも、主の歿しなかつた後は、一層疎遠にされ、待遠なることであらう」と、思ひめぐらすについでも、彼女どもは一層心細くなつた。

大殿は、人々に、きはくほどくを置きつつ、はかなき翫弄物ども、又まことにかの御形見なるべき物など、わざとならぬさまに取りなしつつ、皆くばらせ給ひけり。

亡くなつた奏上の父左大臣では、今まで奏上に仕へてゐた女房どもに、それ／＼の身分等級によつて、一寸としたもてあそびの品物どもとか、或は又、眞に亡き人の忘形見ともなるべき記念の品物などを、特にきわだつた立派な形見分けのさまにもしないので、すつかりおくばりになつた。

左大臣が遺物などくばられるのは四十九日の頃であると思はれる。

○君は——源氏は。  
 ○いかでかは云々——源氏はかうして、とちこもつてばかりは、どうしてゐられようと思召され、桐壺院に参院なされた。  
 ○御前など——御前驅の人々等。  
 ○少し隙ありつる袖——時日の立つにつれて、悲しみの涙も少しは乾く暇もあつた袖が、又しも濡れた。  
 ○やがて二條院——そのまま二條院の紫上のもとに。  
 ○侍の人々もかしこにて——奏上にゐた源氏の人々で、源氏の御供をしない人々は、二條院にて源氏をまたうとて。  
 ○今日にしもとぢむまじき事——源氏とは今日かぎり終生の別れとなるといふわけでもないが。  
 ○今日の氣色に——源氏の出でられるさまに。

君はかくてのみも、いかでかはつくづくと過し給はむとて、院へ参りたまふ。御車さし出でて、御前などまゐりあつまるほど、折りしり顔なる時雨うちそそぎて、木の葉さそふ風、あわただしう吹きはらひたるに、御前に侍ふ人々、物いと心ほそくて、少し隙ありつる袖ども濕ひわたりぬ。夜さりは、やがて二條院に泊りたまふべしとて、侍の人々も、かしこにて待ち聞えむとなるべし、おの／＼立ち出づるに、今日にしもとぢむまじき事なれど、またなくものがなし。左大臣も宮も、今日の氣色に、また悲しさあらためて思さる。

源氏の君は、かうして左大臣の邸で、かうとちこもりながら、つく／＼と物思ひにばかり沈んでゐるべきではないと考へられ、桐壺院様のもとに参院なさることとなつた。そのため源氏のお乗りなさる御車を引き出し、御前驅どもが参集する頃となり、この悲しい折からのことを知つてゐるやうなさまで、時雨が降りそそいで来た。そのため木の葉を吹き散らす風が、やかましく吹きだしたので、源氏の君の御前に侍うてゐた人々は、頗る物悲しうなつてきて、今まで時日のたつにつれ、悲しみの涙も少しは乾く暇もあつた袖などを、今の淋しい時雨で又しも哀を催され、すつかり濡らしてしまつた。今夜はこのまま源氏が二條院紫上のもとにお泊りな

さるといふことになり、葵上のもとにゐた源氏方の人々で、お供をしない人々は、二條院で君をお待ち申さうといふのか、各々は皆出かけてゆくので、源氏とは今日かぎり終生の別れとなるなどのことはない筈であるが、又なく物悲しい。左大臣も大宮も、源氏の出でたたる今日の様子を見ては、又改めて新愁を加へなかつた。

宮の御前に、御消息聞え給へり。院におぼつかながりのたまはするにより、今日なむ参り侍る。あからさまに立ち出ではべるにつけても、今日までながらへ侍りにけるよと、みだり心地のみ動きてなむ、聞えさせむもなかなかに侍るべければ、そなたに参り侍らぬ。」とあれば、いとどしく、宮も目も見え給はず沈み入りて、御返もえきこえ給はず。左大臣ぞやがて渡りたまへる。いと堪へ難げに思ひして、御袖もひき放ちたまはず。見奉る人々もいとかなし。

源氏から母大宮のもとへ御消息あつた。源氏「桐壺院では御心配に思つて、早く私に来るやうに仰せられますので、私は今日院に参上いたします。さて一寸出かけますのについても、よくも今日まで焦れ死もせず、生きながらへてゐたものだと、みだり心地に憫まされるので、あなたのもとにおたづねするのも却つてよくないと思つて、そなたの許へは参上いたしません」

○宮——母大宮。  
○院におぼつかながり——桐壺院の方で、私（源氏）のことを心配して、いろ／＼と仰せられますので。  
○あからさまに立ち出ではべるに云々——ほんの一寸だけ出かけるについても。  
○今日までながらへ侍りにける——今日まで焦れ死にもせず、よくもこの悲しみに命がついたものだ。  
○動きてなむ——下の「そなたに参り侍らぬ」の語にかかると。  
○そなたに——母大宮。  
○いとどしく——下の「沈み入りて」の語にかかると。

○左大臣ぞやがて渡りたまへる——葵上の父左大臣が源氏のもとへ参られる。  
○堪へ難げに——大臣は熱傷に堪へられないやうに。  
○御袖もひき放ちたまはず——常に袖で顔を蔽うて離さない。  
○久しうためらひ給ひて——急には物も言ひなさらぬ様子。  
○齢のつもりには云々——年老いてしまふと、さほどでもない事についてさへ、涙もろいものでありますのに。  
○ましてひる世なう——況して吾が子葵上を失うた不幸にあつては、悲しみの涙も乾く間もなく思ひ亂れるのであります。  
○心をえのどめ云々——心を沈静にすることが出来ない。  
○人めも——他人が見て

と、おたよりがあつたので、母大宮もいたく悲しまれ、目も見えないほどにひどく沈み入られ、源氏のもとへは、御返事さへなさらなかつた。そこへ父左大臣がすぐ参上せられた。やはり悲しさに堪へられず、流るる涙を袖で覆うたまま、少しも手離すことをなされなかつた。かうしたさまを見てゐた人々までが、大へん悲しい思ひをした。

○聞えさせむもなかく——侍る——母大宮のかたへ源氏がおいでなされたならば、かへりて大宮に悲しい思ひをさせるであらうと考へられますからの意。

大將の君は、世をおぼしつゝくる事いとさま／＼にて、泣きたまふさまあはれに心深きものから、いとさまよくなまめき給へり。左大臣久しうためらひ給ひて、<sup>（左大臣は）</sup>「齢のつもりには、さしもあるまじき事につけてだに、涙もろなるわざに侍るを、ましてひる世なう思ひ給へ惑はれ侍る心を、えのどめ侍らねば、人めもいとみだりがはしく、心弱きさまに侍るべければ、院などにもえ参り侍らぬなり。事のついでには、さやうにおもむけ奏させ給へ。いくばくもはべるまじき老の末に、うち捨てられたるがづらくも侍るかな」と、せめて思ひ沈めてのたまふ氣色、いとわりなし。

大將源氏の君は、世の中のことどもをあれやこれやと思ひつゞけられて、泣き悲しみなさる

も。  
○さやうにおもむけ奏せ  
させ給へ——そのやうな  
おもむきに聞えるやう  
に、桐壺院に奏上して下  
さい。  
○いくばくも云々——も  
う餘命幾ほどもない老の  
晩年に、可愛い子、奏上  
に打捨てられたのが心苦  
しくある。  
○せめて——強ひて心を  
沈静にして仰せられるさ  
まが大へんなものであ  
る。

○君も——源氏の君。  
○世のさがと——浮世の  
ならはしとは思ひます  
が。  
○さしあたりて覺え侍る  
——眼前に遭遇したこの  
悲しみの思ひは、比較す  
べきものもないことと思  
ひます。  
○院には有様云々——桐  
壺院様にこのさまを奏上  
したならば、御推察下さ

ることでありませう。  
○さらば時雨も隙なく侍  
る云々——それでは時雨  
は止みさうありません  
から、日の暮れない間  
におでかけなさい。  
○うち見まはし——源氏  
が。  
○おしこりて——かたま  
つて。

○思し捨つまじき人も——  
若君の夕霧も當方に殘  
つてゐられるから。これ  
以下は左大臣が女房ども  
に語るのである。  
○さりとも物の云々——  
それでも何かの序には、  
源氏はお寄り下さらな  
いことなどがあらうかな  
どと私は自らなぐさめて

奏

有様は哀れ深いものであるが、されどそのために取り亂しなさらぬ御様子さまことに優美な  
ものである。左大臣は急にも物語りなさらぬで、やや暫くたつてから、左大臣「年老いてし  
まひますと、さほどでもないことについても、涙もろくなるものでありますのに、ましてや愛  
してゐた葵上が死んでからは、涙の乾くひまもなく思ひ迷ふのであります。かうして心を落ち  
つかすことができないので、他人様が見られても不體裁でありますし、心弱いさまであります  
から、桐壺院様のもとへも参上いたさないのであります。どうか何かのついでには、このやう  
なさまでゐるとの様子を、院によくお傳ひ下さい。もはや餘命いくばくもない老の晩年に  
及んで、吾が子葵上に先きだされたのが心苦しいことでもありますよ」と、強ひて心を沈静にし  
て仰せられる様子は、まことに何とも申しやうもないさまである。

君もたび／＼鼻うちかみて、<sup>源氏</sup>後れさきだつほどのさだめなさは、世のさが  
と見給へ知りながら、さしあたりて覺え侍る心まどひは、たぐひあるまじ  
きわざになむ。院にも有様奏し侍らむに、推しはからせ給ひてむ」と聞え  
たまふ。<sup>左大臣</sup>「さらば時雨も隙なく侍るを、暮れぬほどに」と、そのかし  
聞えたまふ。うち見まはし給ふに、御几帳の後、障子のあなたなどの明け  
通りたるなどに、女房三十人ばかりおしこりて、濃き薄き鈍色どもを着つ

つ、皆いみじう心ほそげにて、うちしほたれつゝ居あつまりたるを、いと  
あはれと見給ふ。

源氏の君も、幾度も／＼鼻をかみながら、源氏「この世に置き残されたり、先きだつて死ん  
で行く定めなきならひは、浮世の常のならひとは思ひ知つてゐますが、只今眼前に遭遇したこ  
の悲しい思ひは、比較すべきものもないことでもあります。桐壺院にもこの有様を奏上したなら  
ば、御推察下さることでありませう」と申された。すると左大臣は「それでは、時雨は止みさ  
うありませんから、日もまだ暮れない間におでかけなさい」と促された。源氏はあたりを御  
覽になると、御几帳の後や、衝立などの彼方の明けはなしになつてゐるところに、女房が三十  
人ほどあつまつて、濃いのや淡いのやの鈍色の喪服どもを着て、いづれも大へん心細さうに打  
ち沈んであつまつてゐるので、まことに氣毒さうに見てゐられる。

<sup>左大臣</sup>「思し捨つまじき人もとまり給へれば、さりとも物の序には、立ち寄らせ  
給はじやなど慰め侍るを、ひとへに思ひやりなき女房などは、今日をかぎ  
りに思し捨つる故郷と思ひ屈して、長く別れぬるかなしみよりも、ただ時  
々馴れ仕うまつる年月の名残なかるべきを、歎き侍るめるなむ道理なる。  
うちとけおはします事は侍らざりつれど、さりとも遂にはと、あいなのだ

奏



みすが。  
○思ひやりなき——今日の俗語とは異り、思ひあきらめることを知らない意。

○今日をかぎりと思し捨つる——源氏は今日かぎり、ここをお見捨てなさるものと屈托して。

○長く別れぬるかなしみより——葵上との永訣よりは。

○馴れ仕うまつる年月の名残なかるべき——源氏にこれまで馴れ親んで奉公してきたのが、これきりとなるのを。

○うちとけおはします事は——葵上と源氏とは、打解けておられなかつたが、それでもいつかは打解けて交りなさるだらうと。

○あいなのだのみ——あてにならぬことをたのみとしてゐること。

○いとあさはかなる人——あまりに思慮のない女

みし侍りつるを、げにこそ心ほそき夕に侍れ」とても、また泣き給ひぬ。

左大臣は「源氏の君がすつかり思ひ捨てなさることもないだらうと思はれる夕霧の若君も、ここに居残つてゐられるのであるから、それにしても何かの序には、お立寄りなさらないこともないだらうなどと、私自身(左大臣をさす)は心を慰めてゐますが、ひたすら思ひあきらめられない女房どもは、源氏の君は今日限りに、この住居を見捨てられるのであると思ひ屈托して、死んでゆかれた葵上との永別の悲しみよりは、時々馴れ親しくして来た源氏の君との年頃の名残が、もうこれきりとなるであらうかと、そればかりを歎き悲しんでゐるが、それは無理からぬことである。源氏は故葵上とは十分に打ち解けてゐられたことはなかつたけれども、それでも何時かは遂に、睦しく打ちとけなさるであらうと、あてにもならぬことをたのみといたしてゐましたが、とうとう葵上も死んでしまひ、まことに心ほそく思はれる夕方であります」と言つても、亦悲しさに胸がせまつて泣きなさるのである。

「げにこそ心ほそき夕に侍れ」の句は、左大臣が、源氏の君はいよいよ今日から後は、おたづね下さることもないだらうと思ひ、愛する娘葵上との死別に加へて、源氏との生別の悲しさに悲痛の思をなしたのである。

「いとあさはかなる人々のなげきにも侍るなるかな。まことにいかなりと」と、のどかに思ひ給へつる程は、おのづから御めかるる折も侍りつらむ

を、なか／＼今は何を頼みてか怠り侍らむ。今御覽じてむ」とて出て給ふを、左大臣見送り聞え給ひて入り給へるに、御しつらひよりはじめ、ありしに變る事もなければ、うつせみの空しき心地ぞし給ふ。

源氏「あまりに思慮のない女房達の歎き悲しみやうでありますかな。まことに葵上は今ほどのやうにあるとも、末々には打解けた間柄にならうと、心ゆるやかに思はれた間は、自然と御目にかからないでその日を送る時もありましたが、今となつては何もたよりとして待つこともないから、御無沙汰をいたしませうか、決してそんなことはいたしません。今すぐに私の實意のあるところをお知りになりませう」と言つて、いよいよおでけなさるので、左大臣は源氏の君を御見送り申して、再びもとの部屋に入らせられると、室内の装飾より始め、あたりのありさまは、過ぎし昔の日と、少しも變るところはないけれども、空蟬の脱殻を見るやうに空しい感じがしたのである。

○なか／＼今は何を頼みてか——以前はどのやうにあつても、遂には吾は(源氏)葵上と睦しい間柄となられるから、それから後は、毎日訪ねようと思つてゐたのであるが、葵上の死なれた今日からは、未來にめあてとする望みがないから、御無沙汰はいたしますまい。

御帳の前に御硯などうちちらして、手習ひすて給へるを取りて、目をおし

房達。  
○いかなりともと云々——葵上が今はどのやうにあつても、末には打解ける交りとなるだらうと源氏がのどかに思はれた間は。

○御めかるる——御目にかからないで日を経ること。

○なか／＼今は何を頼みて——却つてこれからは、何もあてにして待つてゐることもありませんから御無沙汰はいたしませうか、そんなことはありません。

○今御覽じてむ——今すぐに私の實意の點をお知りになるでせう。

○御しつらひ——室内の装飾。

○うつせみの空しき心地——空蟬の空しき脱殻のやうな心地。

○手習ひ——源氏の。  
○目おししほり——老眼

にたたへた涙を、目を塞いで絞り出すやうにして。

○ほゝゑむ——目をおししぼる顔がをかしいのである。

○あはれなるふりことども——源氏の書きちらしの反古には、哀を催すやうな故事どもを。

○草にも——假名でも。○眞名にも——漢字でも。

○かしこの御手や——恐れ入つた立派な筆蹟や。

○よそ人に見奉りなむが惜しきなるべし——奏上が死んだので、源氏と他人になるのを、左大臣が残念なのである。

○ふるき枕ふるきすま云々——補欄参照。

○なきたまぞいとど云々の歌——補欄参照。

○霜の花しろし——「しろし」は「しげし」の誤寫と思はれる。白氏文集卷十二、長恨歌の「鶯鶯瓦

しほりつゝ見給ふを、若き人々は、悲しき中にもほゝゑむもあるべし。あはれなるふることども、唐のもやまとも書きけがしつゝ、草にも眞名にも、さまざま珍らしきさまに書きまぜたまへり。「かしこの御手や」と、空を仰ぎてながめたまふ。よそ人に見奉りなむが惜しきなるべし。「ふるき枕ふるきすま、誰と共にか」とある所に、  
また「霜の花しろし」とある所に、  
君なくてちりつもりぬるとこなつの露うち拂ひいく夜ねぬらむ  
ひとひの花なるべし、枯れてまじれり。

御帳臺の前に御硯などが散らかつてゐて、そこには源氏の君のむだ書きをあそばされたものが打ち捨ててあつた。左大臣はこのむだ書きの紙片を拾ひ取つて、老眼にたたへられた涙を、推し拭ひながら御覧になる御顔つきを、あたりにゐた若い女房どもは、悲しい思ひには沈みながら、をかしいことだと微笑を漏らしてゐるやうである。この源氏の君が書きちらしなされたむだ書きのなかには、哀の催されるやうな故事どもを、唐土から日本のものまで、ひろく書きなぐつてある。文字は假名でも漢字でも、さまざまに珍らしきさまに書き混ぜてある。左大

冷霜華重の「霜華重」から来たものらしい。  
○君なくてちり云々の歌——補欄参照。  
○ひとひの花——前栽の撫子につけて、源氏が歌を母宮に贈られた時の花。

臣はこれを見て、「恐れ入るほど立派な御筆蹟であるかな」と、空を仰ぎながら感嘆して御覧なされる。左大臣としては、娘の習であつた源氏の君も、わが娘が死んでしまつた後は、さらの他人となつてしまふのであるのを残念に思はれるのであらう。白氏文集卷十二の「舊枕故衾誰與共」といふ詩の句を書いた所に、源氏の歌、  
なきたまぞいとどかなしき寝し床のあくがれがたき心ならひに  
とある。又「霜華重」といふ白氏文集卷十二にある詩の句を書かれた所に、源氏の君の歌が、  
君なくてちりつもりぬるとこなつの露うち拂ひいく夜ねぬらむ  
と書かれてゐる。嘗て前栽の撫子につけて、源氏が母宮に歌を贈られた時の撫子花であらう、枯れたのが反古の中に混つてゐた。

○ふるき枕ふるきすま誰と共にか——白氏文集卷十二に「鶯鶯風冷霜花重、舊枕故衾誰與共」の句によつたもの。この句は和本によるもので、唐本には、舊枕云々の句は「舊衾衾誰與共」とある。○なきたまぞいとど云々の歌——共寝した床を振捨てて去るのは、名残惜しくて去り難いものであるが、それについても死んだ葵上の魂もさぞかし心つらいことであらうと思つて、一層悲愴の念に堪へないものがある。○君なくてちりつもりぬる云々の歌——古今集夏歌にある「塵をだにすゑじとぞ思ふさきしより妹とわがぬるとて夏の花」の歌をふまへてよんだ歌である。吾源氏と葵上とは、「塵をだにすゑじ」といつてゐた共寝の床も、葵上が死んで行つてからは、塵がつもつた上に、涙の露までが置かぬ夜はない。私はその涙の露を打ち拂ひ

○宮に御覽せさせ——左大臣が、大宮に見せなきる。  
○いふかひなき事をば——娘葵上の死んだのは、詮方ないこととして。  
○かかる悲しきたぐひ——かやうな子を失ふ例は世にある習として。  
○契ながからで——短命で親を泣かせるやうに生れてきたのであらうと。  
○さまし侍る——悲しみを醒ます。  
○今はとよそになり給はむなむ——是から他人となつてしまはれるのが諦められない。  
○朝夕のひかり——朝晩来られた立派な源氏の御妻。  
○おとなしくしき人など——年も相當老いてゐる女房など。  
○さとうち泣きたる——一様に、どつと泣いたさ

○おのがどちあはれなる云々——お互同志が、感慨深いことどもを物語りながら。  
○殿の——左大臣の。  
○若君——夕霧（葵上の姫）。  
○いとほかなき程の御かたみ——どうもたよりないさまの御形見である。  
○あからさまにまで参らむ——女房どもが、一寸御眼を賜つて、又参上いたしませうといふので

ながら、今では随分久しい間寝たことであります。

宮に御覽せさせ給ひて、「いふかひなき事をばさるものにて、かかる悲しきたぐひ、世になくやはと思ひなしつつ、契ながからで、かく心を惑はすべくこそはありけめと、かへりてつらく、前の世を思ひやりつゝなむさまし侍るを、たゞ日頃に添へて、戀しさの堪へたきと、この大将の君の、今はとよそになり給はむなむ、飽かずいみじく思ひ給へらるる。一日二日も見えたまはず、かれくにおはせしをだに、飽かず胸痛く思ひ侍りしを、朝夕のひかり失ひては、いかでかながらふべからむ」と、御聲もえ忍びあへ給はず泣き給ふに、御前なるおとなしくしき人など、いと悲しくて、さとうち泣きたる、そぞろ寒き夕の氣色なり。

この源氏の書きちらしなされた反古どもを、左大臣が大宮にお見せなされ、左大臣「言ふ甲斐もなく死んで行つた葵上のことは詮方ないとして、かうした可愛い娘と死に別れる例は、世間に無いことであらうか、それはありふれたことであると思ひながらも、かの娘葵上は、こんな短命で生れ、吾々親どもにかくつらい思ひをさせるのであらうと、子を思つた嬉しさは却つて心苦しく思はれ、前世の宿業を思ひやりながら、悲しい思ひを醒ましてゐます。けれども一日とたつにつれて戀しさが堪へられないやうになります。それに加へてこの源氏の大將の君が、娘の亡くなつた今日からは、さらの他人關係となりなさるのが、大へん悲しく思ひやられます。従来葵上が生存中、源氏の君が一兩日もお見えにならず、御訪問下さるのが絶々であつたのさへ、ひどく胸を痛めて心配したのであります。それなのに今から朝晩眺めてゐた、君の立派な御姿を見られないやうになつては、吾々はどうして生きながらへることができようか」と、御聲も差しおさへられなく泣きなさるので、御前に居た年老いた女房どもなどは、まことに悲しくなり、一時にどつと泣きくづれた。物悲しくぞつとする夕暮のさまである。

若き人々は、所々に群れ居つつ、おのがどちあはれなる事どもうち語らひて、「殿のおぼしの給はするやうに、若君を見奉りてこそは、慰むべかめれと思ふも、いとほかなき程の御かたみにこそ」とて、おのく「あからさまにまで参らむ」といふもあれば、かたみに別をしむほど、おのがじしあはれなることども多かり。

若い女房達は、此處彼處に寄り集つてゐながら、各々同志の感慨深いことどもを物語りながら、「左大臣殿のお考へになり、仰せられるやうに、葵上の亡き後は、忘形見の遺児夕霧を見て

あるが、別をしむの語から見ると、御仕へする御暇をすつかりとするのである。

○院へ——源氏が桐壺院に参院されたのである。  
○精進——佛道を修行するために、肉食などを禁じてゐること。ここは葵上の喪のため。  
○けにや——故にや。  
○物などまゐらせ——食物などを源氏にすめられて。  
○とやかくと云々——院がいと源氏の世話をなさるさま。

○中宮——藤壺。  
○命婦の君して——藤壺が王命婦をして。  
○思ひ盡せぬこと——葵上の死の悲しみ。  
○程經るにつけても、いかに——月日のたつにつけても、いかに悲しみなされることであらう。  
○御消息——ここでは口上。  
○つねなき世は——無常な世の中は。  
○おほかたにも云々——大體は承知してゐました。  
○たび／＼の御消息——中宮からの御弔問で力づけられて。  
○さらぬ折だにある御氣色——葵上のことがなく、さへ、藤壺に對しては悲しみがある。それに今又この悲しみまで加へられて。

葵

こそ、悲しい思ひをも慰められるであらうと思ふが、これもまことにたよりにならない御形見であります」と言つて、各々の女房どもは、「私どもは一寸御暇をいただいて退出し、又すぐに参加いたしませう」といつて、御暇をいただくものもあるが、お互ひ同志は又、これで別れてしまふのであると言つて、別を惜んでゐるさまは、又それ／＼に物哀れなことが多かつた。

左大臣は愛嬢に別れた悲しみはさることとして、更に源氏と別れねばならぬことになり、いたく歎いてゐられる。若き女房も、老いたる女房も、やはりとも／＼に歎いてゐるさまが書かれてゐる。然るにただ母大宮の君のさまが、書かれてゐないので、一寸物足らない感じがする。

院へまゐり給へれば、いといたく面瘦せにけり。精進にて日を経るけにや」と、心苦しげに思しめして、御前にて物などまゐらせ給ひて、とやかくやと思しあつかひ聞えさせ給へるさま、あはれにかたじけなし。

源氏の君が、桐壺院へ参院あそばされると、院が仰せられるには、「汝(源氏をさす)は、顔も瘦せはてしてしまつた。久しく精進してゐた爲めであるか」と御心配なされて、院の御前にて、御馳走などを源氏に進ませられ、あれやこれやと氣をくばつて御世話をなされるありさまは、おそばに見てゐてさへも、泌み／＼とあはれに感ぜられて、畏れおほいことであつた。

桐壺院も、吾が子源氏の君のいたく面瘦せてゐるのをながめては、そぞろ子と思ふ親の情に堪へなかつたであらう。早速御馳走をなされたのである。これ上下の論なく、古今の隔てない

親子の眞情である。

中宮の御方に参り給へれば、人々めづらしがり見奉る。命婦の君して、「思ひ盡せぬことどもを、程經るにつけても、いかに」と御消息聞えたまへり。「つねなき世は、おほかたにも思ふ給へしりにしを、目に近く見侍りつるに、厭はしき事多く、思う給へ亂れしも、たび／＼の御消息になくさめ侍りてなむ、今日までも」とて、さらぬ折だにある御氣色、取りそへていと心苦しげなり。

源氏が藤壺中宮のもとへ参上なされると、久しくお見えなかつたのであるから、女房ども珍しがつてお迎へする。中宮は王命婦を使者として、「思ひあきらめられない葵上の死の悲しみは、それからだん／＼と月日を経過するにつれても、いかに悲しみなされるであります」と、仰せを申し傳へしめられた。すると源氏の君は、「なに事も無常なこの浮世のことどもは、大體承知してゐましたが、いざい／＼眼前にその不幸を見ましては、世の中のことどもが何れも厭はしく思はれて、思ひ亂れました。けれどもかうした悲しみは、たび／＼下された中宮からの御手紙で、心を慰めまして、今日まできました」と仰せられた。源氏の君は元來かうした葵上の悲しみがないうときでも、藤壺に對して悲しい思ひをしてゐられたのに、今又この悲しさま

葵

○櫻巻き給へる——冠の  
法。櫻を巻くのは喪中の作  
法。  
○春宮——冷泉院。

○二條院——紫上のもと  
では——  
○上臈ども——上位の女  
房ども。  
○皆参うのぼり——平常  
は交代してゐたのが、今  
日は揃つて参上したので  
ある。  
○かの居並みくし——彼  
の葵上邸の女房どもが、  
打並んで萎れてゐたさ  
ま。

○御装束たてまつりかへ  
——源氏が着換へられ  
て。  
○西の對——西の對屋、  
即ち紫上の居間。  
○更衣の御しつらひ——  
十月の夏冬の移りに、着  
更へなされる御支度。  
○若人——若い女房。  
○めやすく——體裁よ  
く。  
○少納言——紫上の乳  
母。  
○もてなし——取りはか  
らひ。  
○心もとなき所なく——  
行届いて。  
○心にくし——心ゆかし  
い。

○姫君——紫上。  
○久しかりつるほどに——  
随分永く逢はずに居た  
間に。  
○うちそばみて——恥ぢ  
て目をそらし横を向く。

奏

でがさし加へられて、ひどく悄然としたさまでゐられる。

無紋のうへの御衣に、鈍色の御下襲、櫻巻き給へるやつれすがた、花やか  
なる御よそひよりも、なまめかしさ増りたまへり。春宮にも、久しう参ら  
ぬおぼつかなさなど聞え給ひて、夜更けてぞまかてたまふ。

源氏の君は、無地の袍に、鈍色の御下襲を召され、冠の櫻を巻いた御やつれの御姿は、ふだ  
んの花やかな美しき御装飾よりも、優美なところが一層増つてゐられた。私は春宮冷泉院へも  
久しく参上いたしませんので、どうしてゐられるかと氣になりますなどと申されて、夜も更け  
てから御退出になつた。

二條院には、かた／＼拂ひ磨きて、男女待ち聞えたり。上臈ども皆参うの  
ぼりて、我も／＼とさうぞき、けさうしたるを見るにつけても、かの居並  
みくしたりつる氣色どもぞ、あはれに思ひ出でられたまふ。御装束たてま  
つりかへて、西の對にわたり給へり。更衣の御しつらひ、くもりなくあざ  
やかに見えて、よき若人童部の形姿めやすくととのへて、少納言がもてな  
し心もとなき所なく、心にくしと見給ふ。

二條院紫上の方では、ガ々を綺麗に掃除し、男も女房どもも、源氏の君の御來臨をお待ち申  
してゐた。上臈女房どもも、今日全部出仕して、我も／＼と装飾を着飾り、化粧をこらしてゐ  
るのを、源氏が御覽なされるについても、彼の葵上邸に、物淋しく涙ぐんださまで居並んでゐた  
女房の様子どもが、先づ哀れに思ひ出された。源氏は先づ御装束を召し換へられて、紫上のゐる  
西の對屋に御渡りになつた。衣更の時節なので、すつかり冬物と整へられ、きらびやかに飾ら  
れ、美しい若い女房や童どもの容姿も美しく整うてゐる。これは紫上の乳母少納言のとりはか  
らひである。この少納言の萬端にわたりてのとりはからひは、すべてゆきわたつてゐて、源氏  
もまことに心ゆかしいことだと思しめされた。

御装束たてまつりかへて——岷江入楚に「花源氏は三ヶ月の服なれば、八月より十月まで  
也。いまは除服し給ふべき也。花鳥の義おぼつかなし。除服は是より後なるべし。これは只院  
へ参給し装束を二條院にても、源のつねにすみ給東の對にてあらため給成べし。或抄云、御説  
に花鳥の説わろし。院へ参り給ひしさうぞくをあらためて、紫のおはする西對へ渡り給ふなる  
べし。返々花鳥不可然云々」とある。

姫君、いと美しうひきつくろひておはす。久しかりつるほどに、いとこよ  
なうこそおとなび給ひにけれ」とて、小き御几帳ひきあげて見奉り給へば、  
うちそばみて恥らひ給へる御さま、飽かぬ所なし。火影の御傍目、頭つき

奏

○他かぬ所なし——不足に思ふところはない。  
○火影の御傍目——燈火のものと横顔。  
○ただかの心つくし聞ゆる人——全くあの藤壺中宮そつくりのさまになられるのかと思つて御覽になると。  
○覺東なかりつる事——暫く逢はないので心配してゐた間の事。  
○いまくしう——死人のことや、佛事などのことは不吉のことと思はれますから。  
○他方に——別室にて、二條院の東の對屋などをさすか。  
○とだえなく見奉るべけれ云々——間斷なくお訪ねいたしますから。  
○厭はしうさへ人——源氏の始終訪ねるのを、うるさいとさへ思しめされる。  
○なほ危く——やはり不安に。

葵

など、ただかの心つくし聞ゆる人の御さまに、違ふ所なく成り行くかなと見給ふに、いとうれし。近くよりたまひて、覺東なかりつるほどの事なども聞え給ひて、「ひごろの物語、のどかに聞えまほしけれど、いまくしう覺え侍れば、暫しは他方にやすらひて参りこむ。今はとだえなく見奉るべければ、厭はしうさへや思されむ」と、語らひ聞え給ふを、少納言はうれしと聞くものから、なほ危く思ひ聞ゆ。やむごとなき忍所多うかかづらひ給へれば、またわづらはしきや立ちかはり給はむと、思ふぞにくき心なる。わが御方に渡り給ひて、中將の君といふに、御足など参りささびて、大殿ごもりぬ。

紫上姫君は頗る美しいさまに着飾つてゐられる。そのさまを御覽になつた源氏の君は、「随分永く汝を見なかつた間に、大へんに御成人あそばされました」と言つて、小さな御几帳をひき上げて御覽になると、紫上は恥ぢて、眼をそらし横を眺めてゐられる御容姿は、どこに一つ不足といふところもない。燈火のもとに見える横顔や、頭のありさまなどは、ひたすら彼の我が氣をもんだ藤壺中宮の御様子そのままの姿になつてゆかれるのかと、かう思うて御覽になると心中頗る嬉しく思召された。

二六二

○やむごとなき忍所——源氏は高貴な女房達と關係されてゐることが多いから、又うるさい女が葵上に代つてあらはれないかと。  
○わが御方——源氏が御自分の居間に。  
○御足など参りささびて——足などをなでさすらせること。今の按摩である。

○若君——夕霧。  
○あはれなる御返り——夕霧の乳母などの書いたあはれ深い返事。  
○見給ふ——源氏が。  
○盡させぬ事——とめどもない悲恋。  
○物うく——源氏が。  
○ととのひはてて——すつかり成育して。  
○似げなからぬほどに——

源氏は紫上の御傍近くに寄りそひて、暫く逢はないで心配してゐた事どもを物語られ、源氏、「留守にしてゐた暫くの間の話どもを、心靜かに申し上げたいとは思ひますが、忌み嫌ふべき事(死人のことや佛事どもをさす)と思ひますから、暫くは別室に休憩してから又参りませう。これから始終御訪ねいたしますから、仕舞には私の來るのをうるさいとさへ思しめされるであらう」と、物語なざるのを、乳母の少納言はそれでは姫君にとつて嬉しいことであると聞いてはゐるものの、それでもやはりあてにならぬと心配してゐる。元來、源氏の君には高貴な女房達と、内密に關係してゐられるところも多いのであるから、又うるさい女房が、葵上に立ち代つてあらはれるのでなからうかと、思ふについても憎くらしい心になつた。源氏の君は御自分の御住居の方にお歸りになつて、中將の君といふ女房に、御足などをなでさすらせなかつて、御寝になつた。

朝には、若君の御許に、御文たてまつりたまふ。あはれなる御返りを見給ふにも、盡せぬ事どものみなむ。いとつれづれにながめがちなれど、何となき御歩行も物うく思しなりて、おほしも立たれず。姫君の何事もあらまほしうととのひはてて、いとめでたうのみ見え給ふを、似げなからぬほどに、はた見なし給へれば、氣色ばみたることなど、をりく、聞え試みたま

葵

二六三

—夫婦となつても似つか  
はしいことだと。紫上今  
年十四歳であられる。  
○見なし給へ——見て取  
つた。  
○氣色ばみたること——  
男女の情事をほのみか  
す。

○偏つき——文字の偏を  
かくしてあてる遊戯。  
○心ばへの——紫上の。  
○思し放ちたる年月こそ  
——源氏が紫上をまだほ  
んの子供であると思つて  
ゐた内は、ただ子供とし  
ての可愛さであつた。  
○忍びがたくなりて——  
斯く女づいてきたのを見  
ては、源氏の心にも。

へど、見も知り給はぬけしきなり。徒然なるままに、ただ此方にて暮らち、  
偏つきなどし給ひつつ、日を暮したまふに、心ばへのらうくじく愛敬づ  
き、はかなき戯事の中にも、美しきすぢをしいて給へば、思し放ちたる年  
月こそ、たださる方のらうたさのみはありつれ。忍びがたくなりて、心ぐ  
るしけれど、いかがありけむ。

翌日は源氏から、若君夕霧のもとへ御消息の文をたてまつられる。すると先方の乳母どもか  
ら、物哀れなことを書かれた御返事があつた。それを源氏が御覽になるについても、盡きない  
御軟きどもばかりが多い。まことに退屈勝ちに悄然とながめ入つてみられるが、そこもなき  
浮氣歩きも、厭はしく思しめされて、出かける氣にもなりなさらぬ。紫上姫君はすべて缺け  
た點なく、十分に整つて成身なされ、頗る愛嬌あるさまに見えるから、源氏も今では夫婦とな  
つても似つかはしいことだと御覽になつたので、世の情事どもを、折々はそれとなくほのめか  
して、試して見られるが、當の姫君は一向氣付かない御様子である。源氏は退屈なので、常に  
この西の對屋で、碁を打つたり、偏突などしながら、その日その日を暮してみられた。紫上は  
御氣立が利巧でみらせられ、愛嬌があり、一寸した遊びごとにも、目ごとな手筋をなさるから  
今まで姫を單なる子供であると思つてゐた間は、さうした子供としての可愛さのみであつた。  
けれども今となつては、源氏も忍びられない心でみられる。それで紫上にとつては氣毒である

が、さてどのやうなことがあつたらうか。

○人の差別見奉り——源  
氏と紫上とは、今まで起  
臥を共にしてゐられたか  
ら、何時からどんなに  
係になられても、人が變な  
様子だと悟るものがない。  
○渡り給ふとて——わが  
部屋に渡りなるとて。  
○頭もたげ——紫上が。  
○あやなくも隔て云々の  
歌——補欄参照。  
○かかる御心おはすらむ  
——紫上は源氏の君に、  
かうした御心があらうと  
は、少しも思ひよられな  
かつた。

○などてかう心うかりけ  
る——なぜこんな嫌な御  
心であられる君を、親の  
やうに頼もしい方と思ひ  
申した事だらう。  
○うらなく——心の底か  
ら。

人の差別見奉り分くべき御中にもあらぬに、男君は疾く起きたまひて、「女  
君は起きたまはぬあしたあり。人々「いかなれば、かくおはしますならむ。  
御心地の例ならず思さるるにや」と、見奉りなげくに、君は渡り給ふとて、  
御硯の箱を、御帳の内にさし入れておはしにけり。人まに辛うじて頭もた  
げ給へるに、引き結びたる文、御枕のもとにあり。何心もなく引きあけて  
見給へば、

あやなくも隔てけるかな夜をかさねさすがになれし中の衣を

と書きすさび給へるやうなり。かかる御心おはすらむとは、かけても思し  
よらざりしかば、などてかう心うかりける御心を、うらなく頼もしきもの  
に思ひ聞えけむと、あさましろおほさる。

源氏の君と紫上とは、従來親子のやうに、起臥を共にしてゐられたことであるから、假令ど  
んな間柄になられたとて、世人から變な様子だと氣づかれるやうな間柄でもなかつたが、或  
朝、男君即ち源氏の君は、夙く起床なされ、女君紫上は少しも起きなさらぬことがあつた。

そこで人々は「どうして今朝に限つて、紫上はお目ざめにならないのであらうか。御氣分でもわるくゐらつしやるのか」と、御心配申してゐると、源氏は御自分の部屋にお歸りになるとて御祝の箱を、御帳臺の中に差し入れなまつて、お歸りになつた。人の居ない隙間に、姫君はやつと頭をもちあげられると、引き結んだ御手紙が、御枕許にあつた。姫君は何心もなく引き開いてごらんになると。源氏の歌に、

あやなくも隔てけるかな夜をかさねさすがになれし中の衣を

と、わざとむだ書きのやうに書きちらしたさまである。源氏にはかうした御心であらうつしやるとは、嘗て少しも氣づかなかつたが、どうしてこんなひどい御心であられるのを、心の底から親のやうにたのみ申してゐたのであらうかと、子供心にもあきれられるほどに思ひなされた。

○あやなくも隔てけるかな云々の歌——これまで永らくの間、幾夜も既に相馴れ申してきた間柄であるのに、譯もなく御隔てをなさることであるかなの意。

晝つかた渡りたまひて、「惱ましげにし給ふらむは、いかなる御心地ぞ、今日は碁もうたて、さうくしや」とてのぞき給へば、いよく御衣引きかづきて臥したまへり。人々退きつつ侍へば、寄りたまひて、「などかくいぶせき御もてなしぞ。思の外に心憂くこそおはしけれな。人もいかに怪しと思ふらむ」とて、御衾を引きやり給へれば、汗におしひたして、額髪もい

○などかくいぶせき御もてなしぞ——なぜこんな氣まづい仕方はするぞ、思ひもよらず心配な方ですね。  
○人もいかに怪し——女房どももどれほど變に思ふであらう。  
○汗におしひたして——紫上は汗びつしよりにな

たうぬれ給へり、「あなうたて。これはいとゆゆしきわざぞよ」とて、よろづにこしらへ聞え給へど、まことにいとつらしと思ひ給ひて、露の御答もしたまはず。「よし／＼更に見え奉らじ。いと恥づかし」など怨じたまひて、御硯あけて見給へど、物もなければ、わか御ありさまやと、らうたく見奉りたまひて、日一日入り居てなくさめ聞え給へど、解けがたき御氣色いとどらうたげなり。

この日の晝頃に、源氏の君は又紫上の西の對屋にお出でになつて、源氏「御氣分がわるさうにしてゐられますが、どんな御氣分でありますか。今日は碁も打たないので、淋しいことであるわい」と言つて、御寢所をおのぞきになると、いよく御着物を引きかぶつて寝てゐられる。女房どもは紫上とはすつと引き離れてゐるので、源氏は姫の御傍に接近なまつて、さて源氏が仰せられるには、「どうしてそのやうに氣まづいもてなしをするのか。案外心配なことでありますな。さうしてゐては、あたりの女房どももどれほど變に思ふであらう」と言つて、懸けてあつた夜具を引きとつてしまひなされると、紫上は汗にひたつたやうに、額髪もひどくびつしよりに濡れてゐられる。これを見られた源氏は、「まあいやなことだ。これはまたひどいことだなあ」と言つて、あれやこれやと姫君をすかしなだめなさるが、當の姫君は、心から苦しいこと

つて。  
○あなうたて。これはいとゆゆしき——まあいやな、これはまたひどいこととす。  
○よろづにこしらへ——色々となだめすかしなさるが。  
○まことにいとつらしと——紫上は心から本當にひどいと。  
○よし／＼更に見え——よろしい。もうお前には、お目にかかるまい。  
○御硯あけて見給へど——返歌でも書いて入れてあるかと。  
○物も——返歌も。  
○わか御ありさまやと——若々しいうぶな御有様である。  
○いとどらうたげ——源氏の御心に、紫上のさまを愛らしく思ふのである。



よと思つてゐられるので、一寸の御返答もなさらぬ。そこで源氏は、「よろしい。それではもうお前にはお目にかかるまい。私もまことに心恥づかしい」など怨言を述べられて、さきの御硯の蓋を開いて、御返歌でもあるかと御覽になつたが、御返歌も入つてゐないので、まだ若々しいうぶなさまでありますかなと、愛らしく思召しなつて、その日一日は御帳臺の中にて慰めなさつたが、まだ御心がうちくつろがない御様子であるので、いよく愛らしく思しめされた。

○あのこの餅——十月の初の亥日に餅を食へば、その一年は無病息災であるといふ。今日も或る地方にては行はれる。  
○かかる御思ひのほど——葵上の忌中。  
○こなたばかりに——源氏方ではせないで、紫上方にだけ。  
○檜破籠——檜製の重箱やうのもの。  
○南の方——南の表坐敷。  
○かう数々に所狭き——亥の子餅はいろ／＼のもので作つたのが深山あるが。

その夜さり、あのこの餅まゐらせたり。かかる御思ひのほどなれば、こと／＼しきさまにはあらで、こなたばかりに、をかしげなる檜破籠などばかりを、いろ／＼にて参れるを見給ひて、君、南の方に出て給ひて、惟光を召して、「この餅、かう数々に所狭きさまにあらで、あすの暮にまゐらせよ。今日はいま／＼しき日なりけり」と、うちほほゑみてのたまふ御氣色を、心ときものにて、ふと思ひよりぬ。惟光たしかにもうけ給はらで、「げに愛敬のはじめは、日擇して聞しめすべきことにこそ。さてもねのこはいくつか仕うまつらすべう侍らむ」と、まめ立ちて申せば、「三つが一つにてもあらむかし」との給ふに、心得はてて立ちぬ。物なれのさまやと君はおほす。

人にもいはで、手づからといふばかり、里にてぞ作り居たりける。

○今日はいま／＼しき日なり——新婚三日目の夜は枕元に餅を進めるのが常式である。源氏の仰せられるのはその意味であるのを、今日は日が悪いとごまかしたものである。それを惟光はすぐに悟つたのである。  
○たしかにも——問ひただしませずに。  
○愛敬のはじめ——新婚の當初。  
○ねのこは——亥の子の次の日であるから、子のこと洒落たのである。  
○三つが一つ——今夜の三分の一。  
○手づからといふばかり——殆ど自分で手作りにするばかりに。

その晩が恰度亥の子の餅をする節供に相當してゐたので、亥の子餅を差上げた。けれども君は葵上の喪服中でゐられた爲めに、仰々しく儀式ばらないで、源氏の方へは運ばず、紫上の西の對屋の方へだけ、おもむきのある檜破籠などの略式にて、いろ／＼と差しあげなされた。このさまを御覽になつた源氏の君は、南の表坐敷におでましになり、侍臣の惟光を呼びだされ、さて源氏「この餅を、かくいろ／＼と仰山に持ち運ぶことをせないで、明日の夕暮に持つて来い。今日は忌々しい日であるよ」と、新婚三日目の夜は枕元に餅を進める儀式であるから、吾等紫上との新婚三日目にあたる明日の晩持つて来いといふことを、暗にそれとなくほめかけたのである。微笑をもらしながら仰せられる御様子を、敏慧な惟光はすぐにそれと氣付いてしまつた。それで惟光は十分にそのわけを聞きただすこともせないで、「なるほど御結婚なされた最初は、吉日を選んで召しあがらねばならぬことです。さてそれについても、明日は子の日でありますから、子の子の餅はいくつこしらへて差しあげませうか」と、眞面目なさまでたづねたので、源氏の君は、「三つが一つでもよいだらう」（これ結婚三日目の晩には餅三つ食ふ慣習であつたから、そのことをほめかしたものである）と仰せられると、惟光は委細承知して立ち去つた。物事に熟練した男であると源氏の君はおほしなされる。彼惟光は、他人にも話さないで、自分一人で自ら作るといふほどにして、自宅で餅を作つてゐたのであつた。

○君はこしらへわび——源氏は紫上をすかし困つて。  
 ○年頃あはれと——これまでかはゆいと思つてきたのは、今の可愛さに比べると、片端にも及ばない。  
 ○人の心こそ——人の心といふものは、變なものである。  
 ○少納言はおとなしくて云々——乳母の少納言は老成人のことだから、紫上が恥づかしく思しめさるだらうと惟光が同情して。  
 ○女の辨——少納言の娘である辨といふ女を呼び

出して。  
 ○香匣の箱——香を入れる箱。その箱の中には、花足の臺の上に皿を置いて、餅が載せてあるのである。  
 ○あだになど——粗略になどとりあつかふな。一本に「あだになし」とある。しきるもじいませ給へ——そのやうな「あだ」といふ詞をお忌みなさい。只今は結婚の祝儀であるからの意。  
 ○よもまじり侍らじ——よもやお詞にまじることあるまいが、それでも注意して下さい。  
 ○氣色もえ深く——事情も十分分らないから。  
 ○君ぞ例の聞え知らせ——源氏は例の如く、紫上に説明して聞かせられただらう。



奏

二七

奏 二七〇  
 惟光が亥の子餅の翌日に、餅を持って来いと君の仰せを承つたので、それでは子餅はどれだけ持つて来ませうかと、軽快な滑稽を述べてゐるが、奈良朝、平安朝の國文にはかうした軽快な滑稽味が隨處にあらはれてゐる。これ吾が國民性の反映である。猪子祝（イノコイハヒ）は十月始めの亥の日に行ふ。この日に用ひる餅を亥子餅、亥猪餅、御まいり物、御なりきりなどいふ。猪は子を多く生むから、子孫繁昌を祝するものといふ。

君はこしらへわび給ひて、今はじめて盗みもて來たらむ人の心地するも、いとをかしくて、年頃あはれと思ひ聞えつるは、かたはしにもあらざりけり。人の心こそうたてあるものはあれ。今は一夜も隔てむことの、わりなかるべきことと思さる。のたまひし餅、忍びていたう夜ふかしてもて參れり。少納言はおとなしくて、恥づかしうや思さむと、思ひやり深く心しらひて、女の辨といふを呼び出でて、「これしのびてまゐらせ給へ」とて、香匣の箱をひとつさし入れたり。「たしかに御枕上にまゐらすべき、祝のものにはべる。あなかしこ。あだになど」いへば、あやしと思へど、「あだなる事はまだならぬものを」とて取れば、「まことに今けさるもじいませ給へ。

よもまじり侍らじ」といふ。若き人にて、氣色もえ深く思ひよらねば、もて参りて、御枕上の御几帳よりさし入れたるを、君ぞ例の聞え知らせ給ふらむかし。

源氏は、紫上を何とすかしだましても駄目なので、かうなつては、今はじめて盗み出して来た女のやうに思はれる。然しこれもまことに面白く感ぜられ、數年來可愛らしく思つて来たのも、今の愛らしさから見ると、その片端にも及ばないものであつた。元來人間の心といふものは、困つたものである。もう、かうなつてしまつては、一晚別れてゐることさへも、耐へられない苦しみと思しめさる。惟光に仰せつけられてあつた三日の餅を、大へん夜もふけてから、こつそりと持つて来た。この際この餅を年老いた少納言女房が取次ぎをしては、紫上が心恥づかしくお思ひになるだらうと、惟光は思ひやり深く同情の心を持つて、少納言の娘である辨の女房といふのを呼び出して、惟光が「これをこつそりと差上げて下さい」と言つて、香匣の箱を一つさし出した。さうして又惟光が「これは確に源氏の君の御枕もとに進上すべき祝儀のものであります。決して／＼粗略に取扱つてなりません」といつたので、辨女房は、不思議なことだとは思つたが、辨は「仇な粗略なことどもは、未だ嘗て存じません」と言つて受取ると、惟光は「只今はそのやうな縁起の悪い「あだ」といふ詞は忌んで使ひなされるな。よもやこんな不吉な詞が、あなたの御言葉の中に交るまいと思ひますが」といふ。この辨女房はまだ年齢のは

ども、うら若い女であるから、只今の事情も十分に分らないで、それを持参して、君の御枕もとの御几帳の下から差し入れたので、源氏の君はいつもの如くに、紫上に説明して聞かせなされるのであらうよ。

「あなかしこ。あだになど」といふ句の、「あだ」の語は、粗略といふ意味であるが、又仇心といふ「浮氣心」のあだの意も含まれてゐる。それで惟光の方は、粗略の意で「あだ」の語を使つたのを、辨女房の方では、浮氣心の意にとりちがへて、「私はまだ浮氣心（あだなる事）は習ひ知りもいたしません」と洒落たのである。そのため惟光もひやりとし、この際の如き結婚の場合に「あだ」といふ語は忌み謹まねばならぬと言つたのである。輕妙なる洒落は實に流暢な調べをなしてゐる。

人はえしらぬに、翌朝この箱をまかてさせ給へるにぞ、親しきかぎりの人々、思ひあはす事どもありける。御さらどもなど、いつの間にかし出でけむ。花足いと清らにして、餅のさまざまことさらび、いとをかしうととのへたり。少納言は、いとかうしもやはとこそ思ひ聞えさせつれ。あはれにかたじけなく、思し至らぬ事なき御心ばへを、まづうちななれぬ。「さてもうちく／＼にのたまはせよかしな。かの人もいかに思ひつらむ」とささめきあ

○人もえしらぬに——人々は新婚のことどもは知らなかつたが。  
○まかてさせ給へる——この箱をお下げになつたので。  
○思ひあはす事——人々はなるほど君には結婚なされたのかと感づいた。  
○御さら——餅を盛るためのも。

○花足——花形の脚のついた臺。  
 ○ことさらび——わざと特別に。  
 ○いとかうしもやはと——少納言は、かくまで紫上に對して、源氏が調へたるもてなしがあらうとは思つてゐなかつた。  
 ○うち／＼に——餅のことなどは、内密に私どもに仰せ付けられればよいのに。  
 ○かの人——惟光。

○おもかげに戀しければ——紫上の姿が眼前にちがついて戀しいので。  
 ○通ひたまひし所々——源氏の通はれた女ども。  
 ○新手枕——新枕の妻。  
 ○夜をやへだてむ——他の女のもとに通へば、紫上に逢はぬ夜ができやうと。

へり。

人々は、源氏と紫上との御結婚のことどもは知らないでゐたが、翌朝になり、彼の香匣の箱をお下げになつたので、親しい人々は始めて、君には御結婚なされたのであることを感づいたのである。餅を載せる御皿なども何時の間に新調なされたのであらう。花足の御臺も、頗る華美に作られ、餅のさまも、格別におもむきあるさまにこしらへられた。少納言乳母は、かく禮々しき御祝ひなどは無くして、ただ一通りの御仲と思つてゐたのである。然るに今このやうに仰々しい儀式までなされたので、身に泌みて畏れ多いことと思ひ、何事にも行きとどいた源氏の君の御心に感謝せられ、うれし泣きに泣かれたのである。「さてそれについても内々に自分でも、このことどもをお話しになればよいのを、彼の惟光なども、このことどもを何と思つたであらう」と、呟やきあつた。

かくて後は、内にも院にも、あからさまに參り給へるほどだに、しづ心なくおもかげに戀しければ、あやしの心やと我ながらおぼさる。通ひたまひし所々よりは、うらめしげに驚かし聞えたまひなどすれば、いとほしと思すもあれど、新手枕の心苦しくて、「夜をやへだてむ」と思しわづらはるれば、いとものうくて、惱ましげにのみもてなし給ひて、世の中のいと憂く

おほゆるほど過してなむ、人にも見え奉るべきとのみ、いらへたまひつゝ過し給ふ。

この後は、源氏の君は内裏の帝のもとへも、仙洞御所の院のもとへも、一寸參内なされた間でも、心が落着かず、紫上の御姿が眼前にちがつき戀しく思しめされるので、我ながら不思議な心であるかなとお考へになつた。又以前からお通ひになつた所々の女のもとからは、君が疎遠にしてゐられるのを、うらめしく恨んでゐるさまの文句を書いた御消息を送りなどされるので、源氏は頗るお氣毒なことだとは思しめられるが、新手枕の姫君が氣になるので、「吾がでかけては、姫君は夜を隔てて待ち明かすであらう」と思ひ惱みなされた。それで君にとつてはまことにうるさく惱ましげになされて、葵上の死といふ不幸を心憂く思つてゐるが、この憂がすつかり止んでからこそ、どなたにもお目にかかりませうとばかり御返事を書かれて、當分はその日／＼を過してゐられる。

○新手枕の心苦しくて夜をやへだてむ——萬葉集卷十一に「若草乃、新手枕乎、卷始而、夜哉將間、二十八不在國」とある歌によつたものである。

今後は、御櫛匣殿の、なほこの大將にのみ心つけ給へるを、實にはた、かくやむごとなかりつる方も失せ給ひぬるを、さてもあらむに、などか口を

○世の中のいと憂くおほゆる云々——葵上が死んだので世の中を、心憂く思つてゐるが、この喪服のほども終つて、私の心も少し落着いてからでかけませうと。

○今後は——弘徽殿の皇太后。  
 ○御櫛匣殿——臘月夜、弘徽殿の御妹にあたる。

○なほこの大將にのみ——やはり源氏を慕つてゐられるのを。  
 ○右大臣——弘徽殿並に臘月夜の父。  
 ○かくやむごととなり云々——高貴な奏上も亡くなりなされたから、臘月夜が源氏に嫁ぐのも何の不面目なことがあらう。  
 ○いと憎しと——弘徽殿が。

○宮仕へもをさ／＼しくだに云々——女官として宮中に奉公するにも、立派にさへなさるならば。  
 ○まゐらせ奉らむ事——臘月夜を宮仕にする事。  
 ○君もおしなべてのさまに——源氏も臘月夜をなみ／＼のさまには思はず執心してゐられたこととて、宮仕なさるのを残念に思しめさる。  
 ○ことざまに分くる——源氏は紫上以外に愛を分ける御考へもなく。  
 ○何かは、かばかり短か

しからむ」など、大臣のたまふに、いと憎しと思ひ聞えたまひて、宮仕もをさ／＼しくだにしなし給へらば、などかあしからむと、まゐらせ奉らむ事を思し勵む。君もおしなべてのさまには覚えざりしを、口惜しと思せど、ただ今はことざまに分くる御心もなく、何かは、かばかり短かかめる世に、かくて思ひ定まりなむ。人の恨みも負ふまじかりけりと、いと危くおもほしこりにたり。

御橋匠殿になられた臘月夜は、やはりこの大將源氏の君をばかり思ひ慕つてゐられるので、父の右大臣は、「なるほど、それも亦よいことだ。かく高貴でゐられた奏上が亡くなりなされたのであるから、臘月夜がその代りの妻となるのも、残念なことだと後悔などはどうしてあらうか、決してそのやうなことはない」などと仰せられて賛成の意をお漏しなさるが、(元來源氏の君に好感を持つてゐられない)只今の皇太后弘徽殿は、ひどくそれを憎くらしいと思しめされて、臘月夜が宮中の女官として宮仕しても、立派にさへなされるならば、何の悪いことがあるだらうかと、ひたすら臘月夜の君を宮仕へに奉ることをお勧めなさる。

さて源氏の君も、この臘月夜を並大抵の女とは思つてゐられない。頗る愛されてゐるのだからこの際宮仕へなされて、これきりの縁となつてしまふのを、残念なことだと思ひなされた。け

かめる——かやうに短い人生に何をしよう。  
 ○かくて思ひ定まり——このまま紫上一人を守つて行かう。  
 ○人の恨みも負ふまじ——あちこちの女に關係して、恨みなどは受けまい。  
 ○いとど危く——六條御息所生靈のことにおそろしく驚りてゐられた。

○まことのよるべ——本妻とするには。  
 ○心おかれぬべし——又恨むであらうと、常に氣がね苦勞があらうと。  
 ○年頃のやうにて——從來のやうな間柄で安心なさるならば、然るべき時々の音信の相手にはして置きたい。

○この姫君を——紫上。  
 ○ものげなきやう——重

れどもただ今は、紫上に夢中であるため、他の女の方に愛を注ぐやうな御心もないので、かやうに短い人生に、まだ何をしようか。まあ、かうして紫上一人を愛し思うてゐよう。あちらこちらの女に關係して、遂にはとんでもない怨言などを受けるべきではなかつたやうだと、嘗てあつた六條御息所の生靈のことどもを、頗る恐ろしく思ひ驚りてゐられた。

○今后は、御橋匠殿の——今后はの語は、「なか口をしからむ」など、大臣のたまふに「の次に入れて解くべし。御橋匠殿は、花鳥餘情に「御くしげどのは、臘月夜の内侍のかみのことなり、御くしげどのは、内藏寮の外御服など裁縫する所也。しかるべき大臣の女となる職なり」と。

かの御息所はいとほしけれど、まことのよるべと、たのみ聞えむには、必ず心おかれぬべし。年頃のやうにて見過したまはば、さるべきをりふしに、物聞えあはする人にてはあらむなど、さすがに殊の外には思し放たず。

彼の六條御息所は大へん御氣毒であります、誠に生涯のたよりどころ即ち正妻としてたよるには、必ず氣苦勞があるだらう。然しここ數年來のやうな間柄で安心なさるならば、然るべき折毎に音信をとり交はす人にしておかうなどと、一度はいたく驚りなされたといふもの、やはりすつかりとは思ひ切られない。

この姫君を、今まで世の人も、その人とも知り聞えぬ、ものなげなきやうな

々しいところがない。  
○父宮——兵部卿の宮。  
○御裳着——女の成年になつた祝儀。始めて裳を着用する。  
○こよなう疎み——紫上は源氏の君をひどく嫌ひなまつて。  
○まつはし聞えけるこそ——つきまとうて居たのが。  
○さやかにも見合せ奉り給はず——まともにも目を見合はさない。  
○ありしにもあらず——以前と様子の變つたのが。  
○年頃思ひ聞えし本意云々——年來あなたを寵愛してあげた、その本意が通らないで。  
○なれはまさらぬ御氣色——「馴れはまさらないで戀ぞまされる」といふのである。

○例の院——桐壺院。  
○大殿——左大臣邸。  
○新しき年ともいはず——新年であるにもかかはらず、亡くなつた奏上のごとどもを尊して淋しく悲しと思つてゐられる。  
○いとかうさへ云々——源氏の君がかう思ひがけなくも来て下さつたにツイても。  
○念じかへし給へど——こらへてゐられるが。  
○御年の——源氏が。  
○もの／＼しきけさへ——

り。父宮に知らせ聞えてむと思しなりて、御裳着のこと、人にあまねくはの給はせねど、なべてならぬさまに、思しまうくる御用意など、いとありがたけれど、女君はこよなう疎み聞え給ひて、年頃よろづに頼み聞えて、まつはし聞えけるこそ、あさましき心なりけれど、悔しうのみ思して、さやかにも見合せ奉り給はず。聞え戯れ給ふも苦しう、わりなきものに思しむすほほれて、ありしにもあらずなり給へる御有様を、をかしうもいとほしうも思されて、「年頃思ひ聞えし本意なく、なれはまさらぬ御氣色の、心うき事」と怨み聞えたまふ程に、年もかへりぬ。

この紫上を今までは、世間の人々も、どうした方であるかとも知つてゐないのだから、従つてこのままでは、その育ちも分らず重々しいところがないやうである。それで姫君の父兵部卿の宮にも申しあげて、公然たる正妻にしようとお考へになり、御裳着の祝儀のことを、他人には冷く御發表にはならないが、並大抵でないさまに、いろ／＼と考へて御準備をととのへなさる様子は、まことに世にも稀なさまであつた。源氏はかく熱心にしてゐられるが、當の紫上は大へん源氏を疎ましくなされて、ここ數年來は源氏に萬事のことどもを依頼申して、馴れ馴れしてゐたのは、振りかへつて見れば我ながら淺はかな心であつたと悔しく思はれるばかりで、源

氏とまともに顔を合はすることさへ嫌つてゐられる。又源氏が戯談などを仰せられるのも、紫上はむやみに厭なことだとふさぎこんでしまひ、從來の様子とはすつかり變つたさまでゐられるのを、源氏の君は、可笑しくもあり、可愛ゆくも思しめされて、源氏「數年來あなたを寵愛申してゐましたが、その本意もかなはず、「馴れはまさらないで、却つて戀しさばかりが増す」といふ御様子は、心憂いことあります」と怨言を言つてゐられる間に、その年も過ぎて翌年となつた。

○なれはまさらぬ——萬葉集卷十二に「御獵爲、鷹羽之小野之、櫻柴之、奈禮波不益、戀社益」の歌の意をさしてゐる。

朔日の日は、例の院に参りたまひてぞ、内、春宮などにも参りたまふ。それより大殿にまかてたまへり。大臣、新しき年ともいはず、昔の御事ども聞え出で給ひて、さう／＼しく悲しと思すに、いとどかうさへ渡り給へるにつけて、念じかへし給へど、堪へ難く思したり。御年の加はるけにや、もの／＼しきけさへ添ひたまひて、ありしより勝に、清らに見えたまふ。立ち出でて御方に入り給へれば、人々も珍らしう見奉りて忍びあへず。若君見奉り給へば、こよなくおよずけて、御笑ひがちにおはするもあはれなり。

—立派な様子までが。  
○ありしより勝に——以前より一層。  
○御方に——葵上の御部屋。  
○およずけて——成身して。  
○まみくちつき——目つきや口つきは。  
○人もこそ見奉り替む——實際は異母兄弟であるから、他人はあまり似てゐると、とやかく噂して咎めるなあ。  
○御しつらひ——室内の装飾。  
○みぞかけ——御衣掛。  
○御装束——源氏の新年の新装。  
○女のがならばぬこそ——女の装飾が並べかけてないのが。

○宮の——葵上の母宮。  
○思ひ給ひしのぶる——元日故亡き葵上の悲しみを辛抱してみますが。  
○なか——源氏の御來臨を喜ぶべきのが、反對に悲しくなる。  
○昔にならひ侍りにける御粧——葵上生存中と同様に用意したこの御装束も。  
○涙にきりふたがりて——悲しみの涙のために、何にも見えない目で仕立てましたから、定めて變な色合を見立てたものと思召すことだらうと思ひますが。  
○なほやつれさせ給へ——我が奉つた色なき衣に召し更へて、やつれ給へよ。  
○また重ねて——衣袴にかけてある他に。  
○たてまつれ——たてまつ

まみくちつき、ただ春宮の御同じさまなれば、人もこそ見奉り咎むれと見給ふ。御しつらひなどもかはらず。みぞかけの御装束など、例のやうにしかけられたるに、女のがならばぬこそ、なべてさうくしく映なけれ。

正月元日には、源氏の君は、例のやうに先づ桐齋院のもとに参内なされてから、次に帝や東宮にも拜賀なされた。それから左大臣邸に御退出なされた。左大臣は新年であるにもかかはらず、亡くなつた葵上のことどもを噂して、物淋しく悲しいことだと思つてゐられる。そこへかうしてまあ源氏の君がお出でなされたものであるから、なほ一層、この君と關係深かつた葵上の上が偲ばれて、悲しさをこらへやうと我慢してゐられたが、堪へがたく思しめされた。源氏の君も御年齢も一歳加つた爲めであるか、更に立派な御様子も加つて、以前よりは勝つて美しく見える。源氏は左大臣の御前を立つて、葵上の御部屋にお入りなされると、そこにゐた女房どもも、君の御光來を物珍しう見奉り、それについても、ありし昔のことを追慕して、堪へられず泣くのである。源氏が若君夕霧を御覽になれば、大へん御成身あそばされて、始終笑ひがちにゐられるのも、亦思へば物哀れなことである。その御目つきといひ、口つきといひ、ひたすら春宮とそつくり似てゐられるので、(實際は異母兄弟であるから)世人は、この似通うてゐらつしやるさまを見て、鬼角の噂をするだらうと心配せられる。御部屋の様子なども葵上生前のさまそのままである。今春源氏の君に奉りなされた御衣掛の

御装束なども、例年そのままのさまに架けてあるが、従前のやうに女君の衣裳が掛けてないのは、總てもの足りない淋しさで、映えくしいところがない。

宮の御消息には、「今日はいみじく思ひ給へしのぶるを、かく渡らせ給へるになむ、なか——」など聞え給ひて、「昔にならひ侍りにける御粧も、月頃はいとど涙にきりふたがりて、色あひなく御覽ぜられ侍るらむと思ひ給ふれど、今日ばかりは、なほやつれさせ給へ」とて、いみじくしつくし給へるものども、また重ねてたてまつれ給へり。必ず今日奉るべきと思しける御下襲は、色も織様もよのつねならず、心ことなるをかひなくやはとて着かへ給ふ。來ざらましかば口惜しうおぼされまじと、こころぐるし。

葵上の母大宮から源氏の君への御消息には、「今日は元日でありますから、亡くなつた葵上の悲しみは思ひ出すまいと、非常に辛抱してゐましたのに、かく源氏の君が御來臨になりますと、却つて過ぎしことどもが思ひ出されて悲しくなります」などと認めて、「葵上生存中と同じさまに、ありし日の慣習にならつて用意いたしました御装束も、この月頃は只さへ見えない老眼が、一層悲しみのために見えなくなつた目で、仕立て申しましたから、さぞ衣の色合なども君の御氣に召さないであらうと思はれますが、今日だけは吾々どもの志をもくんで、それでもこの色

つらせの約。  
 ○今日奉るべきと——  
 「奉るべきもの」との義。  
 差上げるのではなく、源氏の御着用なさること。  
 ○かひなくやは——折角くれたのを、甲斐なきさまにはせまいと。  
 ○来ざら云々——源氏の心。

○春やきぬると——悲に沈んでゐた吾が身にも、正月と共に、春がきたかどうかと見ていただくの御邸へ参りましたが。  
 ○えきこえさせ侍らず——悲しさに何事も十分に申されません。  
 ○あまたとし今日云々の歌——補欄参照。  
 ○えこそ思ひたまへ——心が亂れてどうもよく鎮められない。  
 ○あたらしき年とも云々

合なき衣に召しかへあそばされるやうにお願いいたします」と、非常に心をこめてお作りになった御装束を、衣架の他に、又重ねて差上げた。今日は必ず御着用なさるべきものと思しめされて新調なされた御下襲は、(袍は一定の例のあるものであるから、心を盡すのは下襲である) 色合も織様も普通ありふれたものでない。まことに格別立派なものである。かく格別に立派に新調してくれたものであるからして、その厚意を空しくはせまいと、源氏の君は、直ちにお召し更へなされた。このとき源氏が思はれるには、今日若し吾が来なかつたならば、さぞ残念に思つたであらうと御推察なさるについても、母宮だちの御心中が思ひやられて心苦しいことである。

御かへりには、「春やきぬるともまづ御覽ぜられになむ、参りはべりつれど、思ひ給へ出でらる事ども多くて、えきこえさせ侍らず。

あまたとし今日あらためし色ごろもきては涙ぞふるこちする  
 えこそ思ひたまへしづめね」と聞えたまへり。御かへり、

あたらしき年ともいはずふるものはふりぬる人のなみだなりけり  
 おろかなるべき事にぞあらぬや。

源氏の御返事には、「悲しみに沈んでゐましたこの私の身の上にも、正月と共にのどかな春が

の歌——補欄参照。  
 ○おろかなるべき事にぞ——双方の御なげきは並大抵のことではありませ

来ただらうかと、見ていただくために御邸に参りましたが、亡き榮上のごとどもにつき、いろ／＼と追想せられることが多くて、何事も十分に申しあげられませんが、さて源氏の歌として、  
 あまたとし今日あらためし色ごろもきては涙ぞふるこちする  
 心が亂れて沈められません」と申しあげられた。これに對する大宮からの御返事には、  
 あたらしき年ともいはずふるものはふりぬる人のなみだなりけり  
 とあつた。正月元日でさへ、かうした御悲しみでゐられたからして、實に並大抵の御歎きではないのである。

あまたとし今日あらた云々の歌——數年來、元日ごとによろこんで着かへました色のよい衣も、今日着更へて見ますと、今までは變つて涙がはふり落ちるやうな悲しさがいたします。  
 ○あたらしき年ともいはず云々の歌——今日はめでたい新年といふのに、それにもかかはらず雨のやうに降るものは、老人の愚痴の涙であります。





の無情を恨まれたが、中宮は頑として應じなさいないので、物凄く怨言を残してお歸りになった。斯うなつては、中宮は弘徽殿の嫉妬がある上に、又かうしたことが世間に漏洩したならば、春宮のためにも一大事だと、故院一周忌後、法華八講結願の日に、突然髪を断つて出家された。この頃源氏も中宮の無情を恨んで、山寺に二三日籠居なされたが、紫上が絆となつて、出家の決心もつかない。更に中宮出家後は、東宮や中宮の御後見などがあつて、いよ／＼世を脱がれ難くなり、同じい失意の境遇にある三位中將などと共に遊んでゐられる。源氏は弘徽殿一派の壓迫が日に加はつてくるにも拘はらず、例の好色を恣にされた。夏の頃臘月夜が病で退出し、全快されて弘徽殿と同じ殿中にゐられた。そのとき源氏は危版を犯して夜毎に通はれた。一夜雷雨が烈しかつた翌朝、源氏がまだ女君と帳中にゐられたとき、父大臣がおとづれられた。女君は止むを得ず、御帳から出られた。このとき折悪しくも男君の帯が御衣に引きかかり、むだ書きされた源氏の懐紙が落ちてゐる。性急な大臣はすぐに帳中をのぞきなると、男の寝姿が見える。大臣は前後の辨へもなく弘徽殿に訴へられた。弘徽殿の憤りや更に甚しく、これを好機となし、源氏の君を陥れようといふ一大事が決行されるに至つた。

巻の名は「神がきはしるしの杉もなき物をいかにまがへてをれるさかきぞ」といふ歌、「さかきを聊か折りても給へり」とあるによる。

梗

概

六條御息所は葵上逝去後、源氏の君が益々疎んぜられるので、愈々齊宮と東下を共にする決心を固くせられた。齊宮の御出發もよほど近づいてから、源氏の君は野の宮を訪問なされ、御息所とその一夜は語り明された。女は新なる感慨の湧くこともあつたが、今更伊勢下向を中止するわけにも行かず、御發向の日、久々で宮中を御覽になつた。思ひ出すことも多い。齊宮は今年十四歳で、母宮と共に下向するのを、頗る喜んでゐられる。このとき、帝は別れの御櫛を授けられるにも、御心が動くほどであつた。源氏はまた齊宮と文通をあそばされる。桐壺院は豫てから御不豫でゐられたが、十月になつてからは、愈々御危篤となり、主上に、春宮と源氏の君とのこともを御遺命あり、源氏には特に春宮の御後見を御依頼なされて、遂に崩御された。元來、院は御讓位後も天下の實權を握つてゐられたのが、今や政權は源氏の反對派である右大臣の手に歸した。天下の人々の痛嘆するは勿論のこと、藤壺や源氏の御愁傷は物哀れなさまであつた。院崩御後は右大臣や弘徽殿の思ふままになり、東宮の御位も危いさまである。疎外せられた左大臣は遂に致仕して籠居なさる。中宮は春宮のことが懸念せられ、ひたすら源氏にその御後見を御依頼された。源氏は無分別な以前の態があまりめられず、或晩中宮の御寢所に忍び入れ、さまざまと口説きながら、翌朝となつても御退出せられぬので、中宮は遂に逆上された。この騒ぎに人々はより集つて御介抱申した。源氏はその間産能の中に隠れ、やゝ不快になられた隙を見て、再び中宮

○齊宮——六條御息所の御娘、秋好中宮の伊勢下向。  
 ○御息所——母の六條御息所。  
 ○覺え給へりし——御息所が。  
 ○大殿の君——葵上。  
 ○さりともと世の人——よしや格別の御寵愛はなくとも、源氏は御息所を正妻となさるだらうと噂し。  
 ○宮の内にも——御息所方の人々も、そのつもりであつたのに。  
 ○その後しもかき絶え——葵上死後も却つて疎くなつたので。  
 ○まことに憂しと思すことこそ——例の生靈となつて葵上を苦しめたことを、源氏が心から厭なことをだと思つてゐられるのだらうと。  
 ○知りはて——御息所が合點なされたので。  
 ○ひたみちに出で立ち——

齋宮の御下向近うなりゆくままに、御息所物どころほそくおもほす。やむごとなく煩はしきものに覺え給へりし、大殿の君も亡せたまひて後、さりともと世の人聞えあつかひ、宮の内にも心ときめさせしを、その後しもかき絶え、あさましき御もてなしを見給ふに、「まことに憂しと思すことこそありけめ」と、知りはて給ひぬれば、よろづのあはれを思しすてて、ひたみちに出で立ちたまふ。

齋宮の伊勢に下向なさるのが、いよ／＼近づいてくるので、御母の御息所は何かにつき心淋しく思しめす。高貴な方でうるさい方だと思つてゐた葵上も御逝去なされてからは、よしや格別に、この御息所を御寵愛あそばされないとしても、源氏はこの御息所を正妻と定めなさるであらうと、世上の人々はとり／＼に噂をした。又御息所の方でも、今こそは正妻となられるのであらうと心をときめかしてゐたのに、葵上の死後は、却つてすつかり打ち絶えてしまひ、あきれるばかりの疎遠なもてなしぶりを御覽になるについても、「(例の生靈となつて葵上を苦しめた一件を)源氏の君は心から恨めしいことだつたと、お思しめされてゐられるのであらう」と、御息所はお考へになつたのであつたからして、すべての情愛をあきらめて、一途に伊勢下向をすることに決心あそばされた。

—一途に伊勢下向を思ひ立つ。

○親添ひて下り—親が齋宮に連れだちて伊勢に下向する例も。

○見放ち難き御有様—齋宮はまだ十四歳で、手放しにくいのを口實として。

○大將の君—源氏の君。

○さすがに今はと—源氏は流りにいよ／＼さらば別れようとする、別れるのも残念な氣持がして。

○女君—御息所。人は心づきなしと云々—御息所の心である。

源氏の君は不快に思つてゐられるだらうに、今更對面したならば、自分は

「よろづのあはれを思しすて、ひたみちに出で立ちたまふ」と。さすが女性としての御息所は、きつぱりと源氏の君をあきらめられなかつた惱みがあつたのだ。それをいろ／＼と惱みに惱んだそのはてに、遂にかうきつぱりと決心されたものである。

親添ひて下り給ふ例も、殊になけれど、いと見放ち難き御有様なるにつけて、うき世をゆきはなれなむとおぼすに、大將の君、さすがに今はとかけ離れたまはむも口惜しうおぼされて、御消息ばかりは、あはれなるさまにてたび／＼かよふ。

齋宮に母宮が連れ添うて下向なさるといふ先例は、特別にないのであるが、齋宮はまだ十四歳で、手放しにくい幼少であるといふのを口實として、御息所はこの心憂い世間からかけ離れて、伊勢に下向しようとおぼしめたのであつた。それについても源氏の大將は御息所を恨めしくお考へになつてゐたとはいへ、さらばいよ／＼別れるとなると、別れるのも残念な氣持がして、おたよりの手紙だけは、しみ／＼と情あるままで度々送られた。

對面し給はむことをば、今更にあるまじき事と、女君もおぼす。人は心づきなしと、思ひ置き給ふ事もあらむに、我は今すこし思ひ亂るることのまさるべきを、あいなしと心強く思すなるべし。

もとの殿には、あからさまに渡り給ふをり／＼あれど、いたう忍びたまへば、大將殿はえしり給はず。たはやすく御心にまかせて、參うてたまふべき御住處にはたあらねば、覺束なくて月日も隔たりぬるに、院の上、おどろ／＼しき御惱にはあらで、例ならず時々なやませ給へば、いとど御心の暇なけれど、つらきものに思ひはて給ひなむもいとほしく、人ぎき情なくやと思し起して、野宮にまうてたまふ。

源氏の君と對面するなどは、今となつてあるべからざることだらうと御息所は思し召す。彼の源氏の君は不快に思つてゐられるだらうに、今更對面したならば、それについて、いろ／＼の惱みが又湧いて来て、ためになほ一層思ひ亂れるであらう。だから君に對面するのはつまらぬことだと、御息所は心強くお考へなされたやうである。

御息所はもとの六條京極の邸へ、ちよい／＼とお通ひなさることもあるが、大へんにこつそりと隠れて行かれるので、源氏の大將は、一向そのことを御存じでない。御息所の只今居られる野宮は、たやすく心まかせに訪れるやうなところではないから、源氏の君は心もとなく思ひながら、すん／＼と月日は経過した。このとき桐壺院は大へんな御病氣といふのではないけれども御病氣に時々惱みなさるので、それらの心配もあつて、源氏の君は一層御心の暇もなかつ

なほ一層思ひ悩むことが増すであらうを。  
○あいなし「對面せんはあいなし」の意。對面するのとはつまらない。  
○もとの殿には—六條京極の邸へは、御息所がちよい／＼とお出でになることもあるが。  
○たはやすく御心に云々—御息所の今居られる野宮は、神聖な所で容易に訪問できる御住居でもないから。  
○院の上おどろ／＼しき云々—桐壺院は大へんな御重態といふほどではないが。  
○例ならず—御不例で。  
○御心の暇なけれど—源氏の君が。  
○つらきものに云々—御息所が源氏を薄情な男だと思ひあきらめなさるのも氣毒だと、  
○人ぎき情なくやと—世人が聞いても餘り薄情

であるかと。

○無下に今日明日とおぼす——ごく近いうちに出發すると思へば、十六日齋宮御東下である。  
○女方——御息所がた、  
○立ちながらと——立談でもよいかと、源氏から度々おたよりがあつた。

○いでや——さやどうしたものであらうかと、御息所が思しめさる。  
○いとあまりうもれいたきを——あまり極端に引籠んでゐるのもどうであらうか、異様であらう、御座越の對面位はよいだらうと。

賢木

二九〇

た。けれども御息所が源氏を薄情な男だと思ひあきらめなさるのも氣毒であるし、又世人が聞いても私のやりかたは、女君に對して薄情な仕方であると思ふだらうと考へられて、野宮へ御訪問になつた。

評 ここに桐壺院御惱のことが書かれてゐるが、これはこの巻の中程に至つて院崩御なさるのをほのめかしたものである。

九月七日ばかりなれば、無下に今日明日とおぼすに、女方も心あはただしけれど、立ちながらと、たび／＼御消息ありければ、いでやとは思しわづらひながら、いとあまりうもれいたきを、物越しばかりの對面はと、人知れず待ち聞え給ひけり。

九月七日の頃であるから、伊勢下向もごく近い今日明日といふことになつたので、御息所方でも頗る氣忙しいのであるが、源氏の君のもとは「立つてゐるままでもよいか、御目に懸りたい」と、たび／＼御文通があつたが、御息所はさあどうしたものであらうか、古歌にも、「いで人は言のみぞよき草のうつし心は色ことにして」とあるからと思ひ迷うてゐられた。けれどもあまり極端に引籠つてばかりゐるのもどうであらうか、それこそ異様であらうぞ、單に御座越しの對面位はよいだらうと、人知れぬ御心地には御心待ちにしてゐられた。

○いでやとは——古今集戀歌四の「いで人はことのみぞよき草のうつし心は色ことにして」とあるのによる。

遙けき野邊を分け入り給ふより、いと物あはれなり。秋の花みな衰へつつ、淺茅が原もかれ／＼なる蟲の音に、松風すごく吹き合せて、そのことも聞き分れぬほどに、物の音ども絶え／＼聞えたる、いと艶なり。むつまじき御前十餘人ばかり、御隨身ことごとしき姿ならで、いたう忍びたまへれど、ことに引き繕ひ給へる御用意、いとめでたく見え給へば、御供なるすきものども、所からさへ身にしみて思へり。御心にも、などて今まで、立ちならさざりしつらむと、過ぎぬるかた悔しう思さる。

源氏は御息所をたづねようと、遙かな野邊をおし分けて野宮のある嵯峨野に入られる。するとまことに物あはれなさまである。秋草の花もすつかり枯れてしまひ、枯れ／＼になつた淺茅が原にも、弱り果てた虫の音に、秋風がもの凄く吹いてゐる。そこには何の音楽の音とも聞き分けられないほど幽な爪音が、たえ／＼に聞えるのも、頗る優艶な趣である。源氏の君は極く睦じい前驅十餘人ばかりお連れになり、御隨身も仰々しく弓箭を帶するなどせない姿で、大へんこつそりと隠れ忍びの歩行であつたけれども、格別にめかしてゐられる源氏の御身づくろいは、頗る立派なものに見えたので、御供してゐた好色の者どもは、嵯峨野の景色まで面白くな

○遙けき野邊——源氏が遙な嵯峨野の野邊を分け入り。  
○そのことも聞き分れぬ——何といふ音楽とも分らぬほど幽かな音楽。  
○御前十餘人——睦じい源氏の御前驅。  
○ことごとしき姿ならで——弓箭など持たないさまをいふ。  
○引き繕ひ給へる御用意——源氏が格別にめかしてゐられる身だしなみ。  
○所からさへ——嵯峨野の景色までが面白いと。  
○御心にもなどて云々——源氏自身も、こんなおもむきのあるのに、どうして今まで屢出かけなかつたのだらうと。

賢木

二九一

り、おもむきのある御歩行だと、身に泌みて思つた。源氏の君も、こんなに面白いのであるのに、なぜ今まで屢々出かけ歩かなかつたかと残念に思しめされた。

物はかなげなる小柴を大垣にて、板屋どもあたりく、いとかりそめなめり。黒木のとりみどもは、さすがにかうくしく見え渡されて、わづらはしき氣色なるに、神官の者ども、ここかしこにうちしはぶきて、おのがどち物言ひたるけはひなども、ほかにはさま變りて見ゆ。火焼屋かすかに光りて、人氣少くしめくとして、此處に物思はしき人の、月日を隔て給へらむ程を思しやるに、いとみじうあはれに心ぐるし。

お粗末な小柴垣を總圍ひにした、板葺の假屋が其處此處に建ててある。黒木のままの鳥居はさすがに神々しく見える。かうした神聖な場所へ、女をたづねに来るのは、遠慮される氣がするの、齋宮についてる神官の者どもは、此處彼處に咳ばらいなどして、各々同志が何か物語つてゐる有様なども、他の所とは様子が變つて見える。火焼屋の火が、かすかに輝いて、人のゐる氣はひも少く、ひっそりとしてゐる。こんな陰氣な所に物思ひに沈んでゐられる御息所が、永らくの月日を送つてゐられるのを推察するについても、非常に氣毒なことであると、心苦しい思ひがする。

○大垣——外圍として。  
○板屋どもあたりく——板葺の家が處々に、いと粗末に建てられてゐる。あたりくはそここの意。  
○黒木のとりみ——皮のついたままの丸太の鳥居。  
○わづらはしき氣色——神々しくて、女に對面に行くには憚られて、邪魔に思ふさま。  
○うちしはぶきて——嘆するさまで老人のさま。  
○火焼屋——野宮では神撰の物などをしたたむる所。  
○しみく——しんみりとして。  
○物思はしき人の——こんな寂しいところに、御息所が物思ひに沈みながら、月日を送つてゐられるのを。

○立ち隠れ——源氏の君が。  
○御消息聞えたまふに——訪問した旨を申し入れる。  
○遊びは云々——音楽どもはすつかり止めて、心ゆかしい人の立居の様子どもが深山聞える。  
○何くれの人傳の御消息——御息所は何かと取次を以つての御應接ぶり、御自身は御對面にならない。  
○ものし——厭はしい。  
○かやうのありきも今は云々——このやうな微行も今は不釣合な身分になつたのを、それにもかかはらず、特にまゐりました心を御推察下さるならば。  
○しめの外にはもてなし給はで——注連繩の外に立たせて、内へも入れないやうな待遇をなされなさい。  
○いぶせう侍る云々——

北の對の、さるべき所に立ち隠れたまひて、御消息聞えたまふに、遊びはみなやめて、心にくきけはひあまた聞ゆ。何くれの人傳の御消息ばかりにて、自らは對面し給ふべきさまにもあらねば、いとものしとおほして、「かやうのありきも、今はつきなきほどになりて侍るを、おほし知らば、かうしめの外にはもてなし給はで、いぶせう侍ることをも、あきらめ侍りにしがな」と、まめやかに聞えたまへば、人々、「げにいと片腹痛う、立ちわづらはせ給ふに、いとほし」などあつかひ聞ゆれば、「いさや此處の人目も見苦しう、かの思さむこともわかしく、出で居むが、今更につつましきこと」と思すに、いと物憂けれど、情なうもてなさむにもたけからねば、とかううち歎きやすらひて、ゐざり出でたまへる御けはひ、いと心にくし。

源氏は野宮の北の對屋の、然るべき所に立ち隠れて、訪問したといふ口上を御息所へ申し傳へなさんと、音楽の音はすつかり止めて、奥ゆかしい人だちの立居のさまが、いろくくと聞える。さて御息所のもとからは、何や彼かやと侍女にことづけた御たよりはあるが、御息所御自身身が源氏に對面なすることが無いので、源氏は厭はしいと思しめされ、君から更に、「こんな輕

胸のふさぎをも晴したい  
 ものです。  
 ○いきや云々——いやさ  
 うでもない。此處にゐる  
 人だから見られるのも  
 恥づかしいし。  
 ○かの思さむことも——  
 彼の書宮も若々しい振舞  
 だと思召されるだらう。  
 ○出で居むが——出で逢  
 ふのが恥づかしい。  
 ○情ならもてなきむ云々  
 ——つれなく對面をこと  
 わるのも決行しかねたの  
 で。  
 ○とかくうち歎き云々——  
 色々と思案にくれ迷う  
 たが、遂にずつてでなつ  
 かつた様子が。

○こなたは實子云々——  
 ここは神事の宮のこと  
 であるが、縁側に上る位  
 のことはお許しあります  
 かな。  
 ○うちふるまひ——源氏  
 の。  
 ○月頃のつもり——數月

卒な微行は、只今の自分の身分としては不釣合なほどになつてしまひましたのを、強ひてわざ  
 く、でかけてきました。これほどの熱心な心持を、あなたがお汲み下さるならば、かやうに  
 注連繩の外に私を立たせて待たせるなどの待遇はなさらないのである。さても胸中の日頃のふ  
 さぎの思ひを、きつぱりと晴したいものであります」と、眞面目に仰せられると、女房どもも、  
 「まことに御氣毒にも、源氏の君は外に立ち困つてゐられますのに、お入れ申さぬのも御いと  
 いことである」などと、取次ぎ申すので、御息所は「いやさうでもない。ここにゐる女房ども  
 に見られるのも恥づかしいし、彼の娘齋宮が若々しい振舞だと思ひなされるだらう。それで伊勢  
 下向と決心しながら、今改めて立ち出でて源氏に逢ふのも氣恥づかしいことである」と思ひな  
 さんと、頗る物憂ひが、さればとてつれなく源氏との對面を斷るのも決行しかねるので、とや  
 かくと思案に暮れ迷ひ、遂に膝行して源氏の立たせられるところへ出でられた。そのときの御  
 息所の有様は、まことに奥ゆかしいものであつた。

「こなたは、實子ばかりの許されは侍るや」とて、上り居給へり。花やか  
 にさし出でたる夕月夜に、うちふるまひ給へるさま、にほひ似る物なくめ  
 てたし。月頃のつもりを、つき／＼しう聞えたまはむも、まばゆきほどに  
 なりにければ、神をいささか折りても給へりけるを、さし入れて、「變らぬ

色をしるべにてこそ、忌垣をも越え侍りにけれ。さも心憂く」と聞えたま  
 へば、

神垣はしるしのすぎもなきものをいかにまがへて折れるさかきぞ  
 と聞えたまへば、

をとめごがあたりと思へば神葉の香をなつかしきとめてこそ折れ  
 大方のけはひわづらはしけれど、御簾ばかりはひききて、長押におし懸り  
 て居給へり。

○さも心憂く——面會も  
 しないで歸さうとなさる  
 のが、心愛いことであり  
 ます。  
 ○神垣はしるしのすぎも  
 云々の歌——補欄参照。  
 ○をとめごが云々の歌——  
 補欄参照。  
 ○大方のけはひ云々——  
 すべてそこの様子に氣  
 が置かれて煩はしいが。  
 ○御簾ばかりは——簾の  
 据を引きかづいて、簾中  
 に顔をさし込まれ。  
 ○長押におし懸り——廊

源氏が仰せられるには、「此處は齋宮のゐらせられる御殿であります。縁側に上る位のこと  
 はお許し下さいますな」といひながら實子の上にのぼられた。ときしも花やかにさし上つた夕  
 月の光に、源氏の振舞うてゐられる有様は、比べるものなく立派である。數月この方のつもる  
 物語りを似つかはしく御息所に申しあげるにも、あまりに御無沙汰をしたので、氣恥づかしい  
 位になつたから、神の枝をいささか折つて持つてゐられたのを、御簾の中にさし入れて、源氏  
 「神葉の變らない色のやうに、私の變らない眞心を道しるべとしまして、野宮の忌垣をも越え  
 てここにまゐりました。然るにこのやうな熱心な心を哀れと思しめされないので、すげなく私  
 を歸さうとなさるのが心愛いことであります」と申されると、御息所は、

の間と奥の間との境にある下の長押。

賢木

二九六

神垣はしるしのすぎもなきものをいかにまがへて折れるさかきぞと仰せられるので、源氏の君の御返歌には、

をとめごがあたりと思へば榊葉の香をなつかしみとめてこそ折れと。すべてそこらあたりの様子が、気が置かれて煩はしいさまであるが、源氏は御簾をひきかぶつて簾中に入られ、上段の間の長押におし懸つてゐられた。

○忌垣をも越え侍りにけれ——拾遺集戀四に人丸の歌として、「ちはやぶる神のいがきもこえぬべしいまはわが身のをしけくもなし」とある歌、(この歌萬葉集卷十一にあり、四句「いまは吾名の」とあり)及び續千載集戀三の讀人不知や伊勢物語中にある「ちはやぶる神のいがきもこえぬべし大宮人のみまくほしさに」の歌の意によつて書いたもの。○神垣はしるしのすぎも云々の歌——古今和歌集雜歌上にある「わが庵は三輪の山もとこひしくばとぶらひきませ杉たてる門」を本歌としてよんだもので、三輪山ならば杉をしるしに尋ねられるだらうが、ここにはしるしの杉もないのに、どうして杉を折つて尋ねられたのであるやら、お門違ひでありませう。○をとめごがあたりと云々の歌——細流抄にある古歌「榊葉の香をかしくはしみとめくればやそ氏人もまとゐせりけり」の歌、(拾遺集神樂歌には、「やそ氏人も」を「やそ氏人ぞ」となつてゐる。)によつたもの。歌意は、杉でなくして榊葉をなつかしく思つて尋ねてくるといふが、私をとめ子(齋宮)のあたりと思はれたので、榊葉の香をなつかしく尋ねて折つたのであります。決してとりちがへたのではない。榊葉に御息所を含ませてゐる。



賢木

二九七

○心にまかせて見奉り——源氏が心のままに逢ふことも出来た。  
 ○人も慕ひ——御息所も慕つてゐた頃は。  
 ○のどかなりつる御心おごり——何の心配もなく心長閑であつたので、自由になる女であるところが驕つてゐられた。  
 ○心のうちにいかにぞや——御息所の生霊となられたことをさす。  
 ○むかし覺えたるに——昔に似てゐるので。  
 ○あはれと思し亂るる——源氏が。  
 ○女はさしも見えじ——御息所はそのやうに心弱いさまに見られまいと思ひこらへてゐられたが。  
 ○いよ／＼心苦しう——源氏が思されるさま。  
 ○なほ思しとまるべき云々——伊勢下向を思ひとどまりなさるやうに。  
 ○怨み聞え給ふに——源氏がさ／＼にお怨みを

心にまかせて見奉りつべく、人も慕ひさまに思したりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしも思されざりき。又心のうちにいかにぞや、きざりありて思ひ聞え給ひにし後、はたあはれもさめつつ、かく御中も隔りぬるを、珍らしき御對面のむかし覺えたるに、あはれと思し亂るる事かざりなし。來しかた行くさき思し續けられて、心弱く泣きたまひぬ。女は、さしも見えじと思しつむめれど、えしのびたまはぬ御氣色を、いよ／＼心苦しう、なほ思しとまるべき様をぞ聞え給ふめる。月も入りぬるにや、あはれなる空をながめつつ、怨み聞え給ふに、こころ思ひ集めたまへるつらさも消えぬべし。

○女はさしも見えじ——御息所はそのやうに心弱いさまに見られまいと思ひこらへてゐられたが。  
 ○いよ／＼心苦しう——源氏が思されるさま。  
 ○なほ思しとまるべき云々——伊勢下向を思ひとどまりなさるやうに。  
 ○怨み聞え給ふに——源氏がさ／＼にお怨みを

源氏が思ふままに御息所に逢ふことも出来、御息所の方でも源氏の君を愛慕してゐられた頃は、何の心配もなく、心長閑であつたから、自由なる女であるといふ心が驕つてゐたので、そんなに女を愛し思つてもゐられなかつた。又源氏が心の中に、どうやら御息所の生霊となられた瑕があつて、不愉快に思ひられてからは、女に對する情愛も薄くなり、かく御交りも疎遠になつてしまつた。それが只今の珍しい御對面で、過ぎし昔のことも思ひ出だされて、源氏の君

申されるので。  
 ○こころ思ひ集めたまへる——御息所のつもる恨みも消えたやうである。

○やう／＼今はと思ひ離れ——やうやくにして今は、源氏のこと全くと忘れられてゐたのに。  
 ○さればよと云々——されば思つた通りであつたよ。對面すれば心の動くこと。  
 ○殿上の若君達——殿上の若い君達がうち連れて訪れたのである。  
 ○うけぱりたる有様——得意氣なありさま。  
 ○思ほし残す云々——胸の思ひのありだけを語り

は感慨無量となり、思ひ亂れなさることは甚だしいものがあつた。過ぎ去つた過去の事や、今後の未來のことどもを思ひつづけられて、源氏は心弱くも泣きなかつた。御息所はそのやうに心弱いさまには見られまいと、胸の感慨を押し隠して、氣丈夫に我慢してゐられるが、包みきれぬ御様子でゐられたので、源氏の君はそのさまを見てとり、いよ／＼心苦しくなり、御息所に向つて、やはり伊勢下向は思ひとどまりなさつたがよろしうございませと申しあげられたやうである。やがて月も隠れてしまつたか、星あかりのする物哀れな空となつた。その空を源氏がながめられて、御息所がわれを振捨てて伊勢に下向なさるのを御怨み申されるので、御息所が日頃胸に集められてゐた數多の辛き恨みも、今は消え去つたであらう。

やう／＼今はと思ひ離れ給へるに、さればよと、なか／＼心動きて思し亂る。殿上の若君達などうちつれて、とかく立ち煩ふなる庭のたたずまひも、實に艶なる方に、うけぱりたる有様なり。思ほし残すことなき御中らひに、聞えかはし給ふ事ども、まねびやらむかたなし。

御息所は、今となり、やうやくのことで、源氏の君のことどもも、思ひあきらめられて、いさぎよく伊勢下向をなされやうとされてゐたのに、源氏の君に只今對面なさると、なるほど思つてゐた通りに、なまなかに心が動いて、かき亂される。殿上の若い君達などが、打ち連れだつてきてゐられる。さうしてとやかくと庭のあたりをさまようて、言ひ交す人をもとめてゐら



あつた。  
○まねび云々——語りやうもない。

○あかつきの別は云々の歌——補欄参照。  
○出でがてに——源氏は別れがたくて、御息所の御手を握つて躊躇してゐられるさま。  
○さして思ふことなきだに——これといふ心配がないんでも。  
○わりなき御心惑ひども——御息所のひどく心迷ひに亂れてゐられては。  
○なか／＼ことも——かやうな晩秋の絶景に、却つて思ふやうに歌もできないのかと、例の如く歌の不出來なことを卑下したものである。  
○大かたの秋の云々の歌——補欄参照。

○悔しきこと多かれ——過ぎ去つたことどもを振りかへつて見ると、残念に思はれることが多いけれども、最早詮方がなくて。これ源氏の心。  
○明け行く空も云々——夜も明けはなれてゆく空に、うろ／＼としてゐるのもきまりがわるくて、やがて出でられた。

○月影の御かたち——月下の光に見た源氏の君の御姿。  
○なほとまれるにほひ——

賈 木

れるやうである。その庭のありさまはまことに優美に得意なさまである。君と御息所と思ひ残すところなく、胸のありだけを語りあふ御中の、物語りなされたことどもは、とても筆紙の盡すところではない。

補 ○實に艶なる——葵卷にある「殿上人ども朝夕の露分けありくをその比の役になんする」とあるのに應ず。

やう／＼明け行く空の氣色、殊更につくり出でたらむやうなり。

あかつきの別はいつも露けきをこは世に知らぬ秋のそらなる

出でがてに、御手を執へてやすらひ給へる、いみじうなつかし。風いとひややかに吹きて、松蟲の鳴きからしたる聲も、をり知りかほなるを、さして思ふことなきだに、聞き過しがたげなるに、ましてわりなき御心惑ひどもに、なか／＼こともゆかぬにや。

大かたの秋のわかれもかなしきに鳴くねなそへそ野邊の松蟲

悔しきこと多かれどかひなければ、明け行く空もはしたなくて出でたまふ。

補 だん／＼と夜も明けはなれてゆく空の景色は、特別に作りだしたやうに趣のあるものであつた。そこで源氏は一首の歌、

あかつきの別はいつも露けきをこは世に知らぬ秋のそらなる

と。源氏は御息所と別れがたさうにして、彼女の手をとらへ、ためらうてゐられるさまは、まことになつかしいものである。朝風ひややかに吹き渡つて、松蟲の鳴き囁らした聲も折知り顔である。さしてこれといふ心配のない人でも、このあはれな虫の聲を耳にとどめずにはをられないのに、ましてや大へん心惑うてゐられる御息所などは、かやうな秋晩の絶景に對しては、却つて思ふやうに歌も出來ないのであるか。御息所は、

大かたの秋のわかれもかなしきに鳴くねなそへそ野邊の松蟲

と詠まれる。源氏の君は、過ぎ去つたことどもを振りかへつて見れば、残念に思はれることも多いが、もう詮方ないので、明け渡る曉の空に、うろ／＼とさまようてゐるのもきまりがわるいから、やがてそこを出で立たれた。

補 ○あかつきの別はいつも云々の歌——曉のわかれば、何時でも悲しさに涙で袖をぬらすのに、今朝は未だ嘗て経験したことのない物哀れな秋の空である。○大かたの秋のわかれ云々の歌——すべての秋の別離は物悲しいものであるのに、野邊に鳴いてゐる松蟲よ、そんなに鳴く聲をそへて、吾等をあまりに悲しませてくれるな。

道のほどいとつゆけし。女もえ心強からず、名残あはれにて眺め給ふ。ほの  
見奉りたまへる月影の御かたち、なほとまれるにほひなど、若き人々け

賈 木

源氏の去りなされたあ  
とに残つてゐる移り香。  
○若き人々は云々——若  
い女房どもは、源氏の御  
姿にぞつと思ひ込んで、  
ともすれば過失もするほ  
どに噂しあつた。  
○いかばかりの道にてか  
——いかほど結構な道だ  
言つて。  
○あいなく——うちつけ  
に。分別なく。

○御文——源氏から来た  
後朝の消息。  
○思し靡くばかり——御  
息所はつい源氏の仰せに  
つれこまれさうに書いて  
あるが。  
○又うちかへし定め云々  
——又伊勢下向をどうし

ようかと考へ迷ふべき事  
でもないから。  
○おしなべての列には——  
並一通りの女と、同列  
に思つてゐられなかつた  
御息所であるから。  
○かくて背き——かうし  
て彼女が伊勢へ別れ去ら  
うとするのを。  
○口惜しうもいとほしう  
も——源氏が残念でもあ  
り、氣毒でもあると思召  
されるであらう。  
○旅の御装束——御息所  
の。  
○とぶらひ聞え給へど何  
ともおぼされず——お贈  
りなされたが、御息所は  
何とも思はれない。  
○あはくしう心愛き——  
輕卒な浮名を世に流し  
て。生靈の一件をさす。  
○あさましき身の——な  
さけない身となつたこと  
を。

身にしめて、過失もしつべくめて聞ゆ、「いかばかりの道にてか、かかる御有様を見すては、別れ聞えむ」と、あいなく涙ぐみあへり。

源氏はお歸りの道すがら、頗る露けき朝である。あとに留りなされた御息所も、さすが女の心は弱々しくて、御別れしたのが悲しく、物思ひに沈みながらあたりを眺めてゐられる。月夜にほのかに見奉つた源氏の君の御姿、この時まで残りどまつてゐる男君の移香などを、若い女房どもはしみんと思ひ込んで、ともすれば過失もするほど噂しあつた。彼等女房どもが言ふには、「我が主の御息所はどのやうな結構な所へ行かれるといふのでか、かやうな立派な源氏の君の御有様を見捨てて、お別れなさるのだらう」と、うちつけに涙ぐんでゐた。

「名残あはれにて眺め給ふ」といふのは、御息所が源氏との後朝の別を述べたもので、前段にあつた「出でがてに、御手を執へて云々」の句によつて、既に一夜の宿りをされたことが暗示されてゐる。

御文、常よりは細やかなるは、思し靡くばかりなれど、又うちかへし定めかね給ふべきことならねば、いとかひなし。男はさしも思さぬ事をだに、情のためには能くいひ續け給ふべかめれば、ましておしなべての列には、思ひ聞え給はざりし御中の、かくて背きたまひなむとするを、口惜しうも

いとほしうも思し惜むべし。旅の御装束よりはじめ、人々のまで、何くれの御調度など、いかめしう珍らしき様にて、とぶらひ聞え給へど、何ともおぼされず。あはくしう心憂き名をのみ流して、あさましき身の有様を、今始めたらむやうに、程近くなるままに、起きふしなげきたまふ。

源氏のもとから、御息所のもとへ送られた後朝の御手紙は、いつもよりも細やかに書きつゞられて、御息所の心もつれこまれさうであつたが、又伊勢下向をどうしようかと考へ迷ふべき事でもないから、今度の源氏の御手紙は何の効果もない。源氏はさほどまで愛し思つてゐないので、人情としては、上手な言葉づかひをなさるやうであるから、まして並大抵の愛を注ぐ女ではない。いたく愛してゐる女としてゐられた御息所がかくこの世を去つて伊勢に下らうとなさるのを、どんなにか残念にも氣毒にも惱みられるであらう。その後、御息所の旅をなされる御服装を始めとなし、侍従のものまで、あれやこれやと必要な道具どもを、源氏の君は立派に然も珍奇なさまに新調なされてお贈りになつた。けれど御息所はそれらについては何とも思しめされない。ただ輕卒な浮名だけをこの世に残し、なさない身の有様となつてしまつたことが、今に始つたやうに、伊勢下向の日が近づくにつれて、起き臥し毎に御敷きあそばされた。

○不定なりつる御出立の  
母御息所が出で立た  
たれるかどうかと、未定  
であつた母の出發が。  
○例なきことと——齋宮  
の下向に母が伴つて行く  
ことは前例がない。  
○もどきもあはれがりも  
批難するのも同情す  
るのも。

○何事も人に云々——何  
事についてでも、世人か  
ら批難せられない身分の  
者は暢氣である。作者の  
評。  
○所狭き事——窮屈な  
事。

○桂川——山城國葛野郡  
にあり、西川のこと。  
○御禊——齋宮出發前の  
潔齋。  
○長奉送使——伊勢まで  
御送りする使。中納言か  
参議のものがつとめる。  
その他の御前や、勅使は

齋宮は、若き御心に、不定なりつる御出立の、かく定り行くを、嬉しとの  
み思したり。世の人は、例なきことと、もどきもあはれがりも、様々に聞ゆ  
べし。何事も、人にもどきあつかはれぬきはやすげなり。なか／＼世に  
ぬけ出てぬる人の御あたりは、所狭き事多くなむ。

齋宮は未だ年若い心に、母宮の一緒に連れだつて出發なさるか、どうかは久しく不定であつ  
た伊勢下向が、いよ／＼かく母宮が同道なさると決定されたのを、まことに嬉しいことだとば  
かり思はれた。世間の人達は、斯く齋宮の下向に、母宮が同道なさるのは前例もない事と、批  
難するものも、又反對に同情するものもあつて、噂はとり／＼であるやうだ。何事についても、  
世人から彼此と批難せられない身分の人は氣楽なやうである。世に抜け出でた立派な身分の人  
になると、却つて窮屈な事が多いものである。

十六日、桂川にて御禊し給ふ。常の儀式にまさりて、長奉送使など、さら  
ぬ上達部も、やむごとなくおぼえあるを選らせ給へり。院の御心よせもあ  
ればなるべし。出て給ふほど、大將殿より例の盡させぬ事ども聞えたまへ  
り。かけまくも畏き御前にとて、木綿につけて、なる神だにこそ、

八洲もる國つ御神もこころあらばあかぬわかれのなかをことわれ  
思ひたまふるに、あかぬ心地し侍るかな」とあり。いとさわがしきほどな  
れど、御かへりあり。宮の御をば、女別當して書かせ給へり。

十六日には桂川で御禊があつた。普通の場合の儀式よりもすぐれて、伊勢まで御送りする使  
などを初め、その他これに關係ある上達部も、すべて身分も高貴であり、世の評判も高い方を  
選擇なさつた。桐壺院が、齋宮母子を特に大切になさる關係もあるのであらう。さていよ／＼  
野宮を御出發といふ際に、源氏の大將よりは、例の通り盡きぬ思ひを書きつらねてお贈りになつ  
た。「恐縮な次第であります、齋宮の御前に捧げます」と言つて、神前に捧げる木綿四手に文  
がつけてある。源氏からの消息文には、「天の原ふみとどろかしなる神も思ふなかをばさくも  
のかは」とさへ申すから、

八洲もる國つ御神もこころあらばあかぬわかれのなかをことわれ  
どう考へて見ましても、不満な心地がいたしますかな」と書いてあつた。このときは伊勢に出  
發といふので非常に取りこんでゐた時であつたが、御返事が直ちにあつた。齋宮の御返事をば  
宮の別當である女官に書かせられた。その御歌は、

國つ神そらにことわるなかならばなほざりごとをまづやたださむ

河原から歸京する。  
○院の御心よせ——桐壺  
院が特に齋宮母子を大切  
になさるわけもあるのだ  
らう。このこと前に見ゆ。  
○出で給ふほど——野宮  
御出發に際して。  
○かけまくも畏き云々——  
齋宮の御前にとて。  
○なる神だにこそ——古  
今集戀四に「天の原ふみ  
とどろかしなる神も思ふ  
なかをばさくものか  
は」とあるの意で、齋宮  
が源氏と御息所との間を  
さかれるのを恨んでゐ  
る。  
○八洲もる國つ御神云々  
の歌——補欄参照。  
○ひとさわがしきほど——  
大へんな取りこみ中で  
あつたが、御返事があつ  
た。  
○宮の御をば——齋宮の  
御返事をば。  
○女別當——齋宮の別當  
で女官である。  
○國つ神そらに云々の歌

○御有様ゆかしうて——源氏は、齋宮や御息所が御暇乞のための参内が見たくて。  
 ○うち棄てられて——打棄てられた男が、捨てた女を見送るのも體裁悪い氣持がしたので。  
 ○宮の御返りの——齋宮の返歌が大人ふうにませてるのを。  
 ○ただならず——氣になる。  
 ○かやうに例に違へる云々——このやうに普通とは異つた面倒な女との關係に、屹度心がひかれる源氏の性癖で。  
 ○いとよう見奉りつべかりし——見ようと思へば

よく見ることの出来た。  
 ○世の中さだめなければ——世は不定であるから。これは天子の御代がいつ代るかわからぬをいふ。

○心憎くよしある——齋宮も御息所も、ゆかしく上品な御姿だとの評判であつたからして、見物人が多つた。  
 ○申の時——午后四時頃。  
 ○御息所御輿に乗り給へる——御息所齋宮と同輿であるが、今日は神事である爲め牛車でなく輿であるについても

補欄 ○八洲もる國つ御神云々の歌——大八洲國即ち日本國を守護してゐられる國つ御神も、もし御情があるならば、何故に私どもは飽かぬ別をいたしますのか、私どもの中を道理のあるさばきをして下さい。○國つ神そらに云々の歌——若し國つ神が、あなたの御なからひをお裁きなさるならば、まづ第一に、あなたの實意のない、よい加減な御心を質しなさるであらう。

大將は御有様ゆかしうて、内裏にも参らまほしうおぼせど、うち棄てられて見送らむも、人わろき心地し給へば、おぼしとまりて、徒然にながめ居給へり。宮の御返りのおとなくしきを、ほほゑみて見居給へり。御年のほどよりは、をかしろもおはすべきかなと、ただならず。かやうに例に違へる煩はしさに、かならず心かかる御癖にて、いとよう見奉りつべかりし、いはけなき御程を、見ずなりぬるこそ妬けれ。世の中さだめなければ、對面するやうもありなむかしなど思す。

源氏の大将は、齋宮や御息所母子が伊勢下向について、暇乞するために参内なさる御様子を、見たいから、自分も内裏に参内しようとお考へになつたけれども、打捨てられた男が、捨てて行く女を見送るのも體裁わるい心地がしたので、そのことは思ひとどまつて、畏屈さうに憤然

とながめに沈んでゐられた。さうして齋宮の御返歌が大人らしくませてゐるのを、微笑しながら見てゐられた。御年齢の割合よりは、随分ませて面白くゐらつしやるであらうと、ただならず氣にしてゐられる。かやうに普通とは異つた煩雜な事情のもとにある女には、必ず心がひかれる源氏の御性癖で、齋宮のまだ御幼少でゐられ、見ようと思へば自由に見られた御幼少のとき、見ないで暮したのは残念なことだつた。然し世の中は定めないのであるから、何時帝がお代りになつて、齋宮も交代なされ、その機會に對面することもあるだらうなどと思しめされた。

「御年のほどよりは、をかしろもおはすべきかなと、ただならず云々」とあるのは、後になつて、齋宮が下りなまつて源氏に養はれなさることをほめかけたものである。

心憎くよしある御けはひなれば、物見車多かる日なり。申の時に、内裏にまゐり給ふ。御息所、御輿に乗り給へるにつけても、父大臣のかぎりなきすぢに思し心ざして、いつき奉りたまひし有様かはりて、末の世に内裏を見給ふにも、物のみつきせずあはれにおぼさる。十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつり給ふ。三十にてぞ、今日また九重を見給ひける。

○父大臣の云々——父大臣は御息所を東宮の妃として、果ては皇后にもと思召されたのが、引きかへて輿で参内する身分となつたのをあはれに思すのである。

○末の世に云々——年老いた世に、こんな境遇になつて参内するのを。

○故宮——故皇太子の妃となられて。

○そのかみを今日云々の歌——補欄参照。

○うるはしうしたてまつり——きちんと端麗におつくりになつたのが。

○別の御櫛——帝が大極殿に出御なさつて、齋宮の額に櫛をさし、京の方を顧み給ふことなかれと訣別なさる式をいふ。

○八省——八省院のあたりへの意。八省院は大極殿の總構で朝堂院ともいふ。

○出車——袖口や裳の裾などをわざと簾の外に出した飾り車。ここはお供の車。

○袖口——車の外へ出してある袖口。

○私のわかれ——御息所の女房と関係のある殿上人などが、こつそり名残を惜むものも。

そのかみを今日はかけじとしのぶれど心のうちにものぞかなしき  
齋宮は十四にぞなり給ひける。いと美しうおはするさまを、うるはしうしたてまつり給へるぞ、いとゆゆしきまで見え給ふを、帝御心動きて、別の御櫛奉り給ふ。いとあはれにて、しほたれさせ給ひぬ。

齋宮も御息所もゆかしく上品なさまでゐられたから、この風雅な姿を今日は見ようといふので、見物に出た車は随分多つた。午後の四時の頃に御参内になつた。御息所は齋宮と同輿してゐられるについても、父在世の時が偲ばれる。あの父大臣は限りなく私の出世することを考へられて、いろ／＼と大切にお育て下されたが、その跡方もなく、只今自分がかう年老いて参内するについても、何やかにつき果てしもなく悲哀の感を抱かれた。御息所は十六歳で故東宮の宮の妃になられて、二十歳で死に別れなさつた。さうして三十歳になつた今日は又、九重を御覽になつた。そこで御息所の一首の歌、

そのかみを今日はかけじとしのぶれど心のうちにものぞかなしき  
と。齋宮は十四歳にお成りあそばされた。頗る愛らしいさまでゐらせられるのを、更に端麗にお飾りなされたさまこそ、大へん立派に見えたので、主上も御心が動きながら、別離の御櫛を齋宮の額におさしになる。帝はかうした美しい若い女を、遙か遠い伊勢に下向させるのを、頗る可愛いさうだと、しよんぼりと元氣なくしてゐられた。

補

○そのかみを今日は云々の歌——今日は大切な祝儀のあるときであるからして、その昔のこ

とどもを思ひ出して悲しむまいと辛抱してゐるが、心の内ぞ何となく悲しさに堪へられない。

評 この所に御息所のことにつき、「故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつり給ふ三十にてぞ、今日また九重を見給ひける」と言つてゐるが、源氏の君は今年二十三歳である。さうして故東宮朱雀院の立坊は源氏の君四歳のときであつた。故に立坊より今日までには十九年の年月がある。だからして御息所の年齢を最少限度に計算し、立坊の年、東宮が薨せられたとしても、今年は三十九歳となる。又齋宮がその年誕生されたとしても、本年は二十歳でゐられるわけになる。所詮この年齢は矛盾してゐると言はねばならぬ。

出で給ふを待ち奉るとて、八省に立て續けたるを出車どもの、袖口、色あひも、目慣れぬさまに心憎きけしきなれば、殿上人どもも、私のわかれ惜む多かり。くらう出でたまひて、二條より洞院の大路を折れ給ふほど、二條院の前なれば、大將の君いとあはれにおぼされて、櫛にさして、  
ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川やせせのなみに袖はぬれじや  
と聞え給へれど、いと聞う物さわがしき程なれば、またの日、關のあなたよりぞ、御返ある。

鈴鹿川八十瀬の波にぬれ／＼ずいせまでたれか思ひおこせむ  
 ことそぎて書きたまへるしも、御手いとよし／＼しくなまめきたるに、あはれなるけを、少し添へ給へらましかばとおほす。

○くらう出で——日も暮れて暗くなつてから出發なさつて。  
 ○洞院の大路——東の京の堅通りの名稱。  
 ○ふりすてて今日は云々の歌——補欄参照。  
 ○またの日關のあなた——翌日逢坂の關の先方から。  
 ○鈴鹿川八十瀬云々の歌——補欄参照。  
 ○ことそぎて書き——ざつと簡略にお書きなされたが。  
 ○あはれなるけを云々——物あはれな情趣を今少し加へてあつたならばよいにと源氏が思しめされる。

齋宮や御息所が宮中から御退出なさるのをお待ち申すと云つて、八省院のあたりに立て並べてあつた出車どもが、その簾の下から女房どもの袖口や、色あひの目慣れぬさまに心ゆかしのを見せてゐた。それだから殿上人で、これら御供の女房と知り合ひであるものは、こつそりと別れを惜むものが多くあつた。さて日も没し暗くなつてから御出發なされて、二條の通りから、洞院の大路を御曲りになる處には、恰も源氏の君の邸である二條院の前をお通りになるのだから、源氏の大將は、お別れを大へん悲しく思されて、轡に文をつけて奉られた。そのときの源氏の君の歌、  
 ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川やせせのなみに袖はぬれじや  
 と申されたが、時は全く日も暮れてすつかり暗く、頗る物騒しい頃であつたから、御息所からは何とも御返事がなくして、翌日、逢坂の關の彼方から御返事があつた。御息所の御返歌は、  
 鈴鹿川八十瀬の波にぬれ／＼ずいせまでたれか思ひおこせむ  
 と、極くざつと簡單にお書きになつたのでも、御筆跡は頗る高貴に然も優美に書かれたが、今少し物あはれな情趣をつけ加へたならばよかつたにと、源氏の君はおほしめされた。

○ふりすてて今日は云々の歌——あなた御息所は、氣強くも私を振りすてて御出發になりませんが、伊勢にお着きになり、鈴鹿川をお渡りになるときは、私のことどもを思ひ出して八十瀬の波で(悲しみの涙で)御袖を濡らしなさることでありませう。○鈴鹿川八十瀬の波に云々の歌——伊勢國鈴鹿川の瀬々の浪に、私の袖が濡れるか、濡れないかと、遙々私の伊勢のことまで、誰が心配してくれませうぞ、誰も心配してくれませんか。あなたも今すぐに私のことをお忘れになりませう。

霧いとう降りて、ただならぬ朝ぼらけに、うちながめてひとりごちおほす。  
 行くかたをながめもやらむこの秋は逢坂山をきりなへだてそ  
 西の對にも渡り給はで、人やりならず、物淋しげに眺め暮したまふ。まして旅の空は、いかに御心づくしなる事多かりけむ。

霧がひどく降つて、頗る風情に富んだ夜あけがたに、源氏の君は悄然と思ひに沈んであたりをながめながら、獨言をしてゐられる。このとき源氏の君の歌に、  
 行くかたをながめもやらむこの秋は逢坂山をきりなへだてそ  
 と。西の對屋に住んでゐられる紫上のもとへも行かれず、他人のせいではなく、自分自らの仕向けのために、御息所を伊勢下向させるはめに至らしめたことを、物淋しげに思つて、あたりを眺めてお暮しになる。まして旅の道中にゐられる御息所は、どれほど氣苦勞をしてゐられる

○ただならぬ朝ぼらけ——頗る風情に富んだ明けがた。  
 ○行くかたをながめも云々の歌——補欄参照。  
 ○西の對——西の對屋にゐられる紫上の部屋。  
 ○人やりならず——我が心からの。即ち他人のせいではなくて。  
 ○まして旅の空は——殊に旅の空にゐられる御息所は、どんなに氣苦勞してゐられることが多いだらう。

ことが多かつたらう。

**補** ○行くかたをながめ云々の歌——逢坂山を越えて伊勢に行く戀しい人の行く方を眺めやうと思ふから、今年の秋は霧も氣をつけて、逢坂山を立隠して隔てをしてくれるな。

**評** これにて御息所のことどもは一先づ終り、今後は院の御不例なことのつづきを又書き出すのである。

○院の御惱——桐壺帝の御病氣。  
○内にも思し歎き——朱雀院も御心配になり、御見舞の行幸がある。  
○弱き御心地——病氣で弱つてゐられる院の御心にも。  
○春宮の云々——春宮即ち後の冷泉院のことを、くれぐれも朱雀院に御依頼があつて。  
○大將の御事——源氏大將のこと。  
○侍りつる世にかはらず——私の存命中と變らず大小何れの事も源氏を授見とされよ。  
○齡の程よりも云々——

院の御惱、神無月になりては、いと重くおはします。世の中に惜み聞えぬ人なし。内にも思し歎きて行幸あり。弱き御心地にも、春宮の御事を、かへすく聞えさせ給ひて、次には大將の御事、侍りつる世にかはらず、大小の事を隔てず、何事も御後見とおほせ。齡の程よりも、代をまつりごたむにも、をさくはばかりあるまじうなむ見給ふる。必ず世の中保つべき相ある人なり。さるによりて煩はしさに、皇子にもなさず、ただ人にて、おほやけの御後見をせさせむと、思ひ給へしなり。その心違へさせたまふな」と、あはれなる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべき事にしあらねば、この片端だにかたはらいたし。

源氏は年齡の割合よりは老成であるから、世の政治を司るには、まあく差支がないだらうと思ふ。帝は源氏の兄である關係上。  
○必ず世の中保つべき——必ず世の中を統治すべき人相ある人である。このこと桐壺巻に出づ。  
○その心——私の心に背かないやうにして下さい。  
○女のまねぶ——女の語り記す。

○更に違へ聞えさすまじきよし——決して院の仰せに違背せないのであらうといふ事。  
○御容貌——帝の。  
○嬉しくたのもしく——桐壺院が。  
○なかくなる事——却つて御心を惱しなざる事。

**補** 桐壺院の御病氣は、十月になつてからは、一層御重態にならせられた。世の中の人は畢つて惜しみ奉つた。主上も宸襟を惱しなかつて、御見舞の行幸があつた。桐壺院は、衰弱した心地にも、春宮のことを繰返し仰せられて、歿後のことを御依頼になつた。又次には源氏大將のことについて、院には「私の存命中と同じやうに、大小何れの事件についても隔てなく、源氏を御後見の世話人と思しめされよ。彼源氏は年齡の割合には老成であつて、一國の政治を司らしめるに、まあく差支はないだらうと思はれる。必ず世の中を統治すべき人相の備つてゐる人である。そのやうなわけで、うるさいことを憚つて皇太子にもなさず、ただの臣下の列になし、天下の政治の御後見をさせようと思つてゐました。この私の意志に違はないやうにしてくれ」と、哀れな遺言が、澤山あつたやうでありましたが、これ等は尊いことで、女(紫式部)の語るべき事でもありませんでしたから、このやうにそれに關しての一端を述べたのでも、氣毒に思はれます。

帝も、いと悲しと思して、更に違へ聞えさすまじきよしを、返すく聞えさせたまふ。御容貌もいと清らに、ねびまさらせ給へるを、嬉しくたのもしく見奉らせ給ふ。限あれば急ぎかへらせ給ふにも、なかくなる事多くなむ。

**評** 主上朱雀院も、頗る悲しいと思しめされ、決して院の仰せには違背いたしませんでせうとい

ふことを、返すくも申しあげられた。主上は御容貌もまことに美しく成身なされるさまを、桐壺院は嬉しくもたのもしくも御覽あそばされる。限ある行幸のことであるから、主上はいそいで歸られた。それについても盡きない名残に、却つて御心を惱しなされるが多つた。

○一度にと——帝と一緒に見舞ふと。  
○御年の程よりは——東宮今年五歳。  
○戀しと思ひ聞え——東宮は桐壺院を戀しと思つてゐられる心が積り積つてゐたので。  
○何心もなく嬉しと思して——東宮が、院の重態をも忘れ、ただ何といふこともなく嬉しとよろこんで、院を見てゐらつしやるさまが、本當にいちらしい。  
○中宮は涙に沈み云々——中宮は泣いてばかりゐられるのを、このとき中宮は既に院にゐられたのである。  
○見奉らせ給ふにも——桐壺院が。  
○よろづのことを聞え知

春宮も、一度にと申し召しけれど、物さわがしきにより、日をかへて渡らせ給へり。御年の程よりは、おとなび美しき御様にて、戀しと思ひ聞えさせ給ひけるつもり、何心もなく嬉しと思して、見奉りたまふ御氣色いとははれなり。中宮は、涙に沈みたまへるを、見奉らせ給ふにも、さまざま御心亂れて思し召さる。よろづのことを聞え知らせ給へど、いと物はかなき御ほどなれば、うしろめたく悲しう見奉らせたまふ。大將にも、おほやけに仕う奉り給ふべき御心づかい、この宮の御後見し給ふべきことを、返すくものたまはず。夜更けてぞ歸らせたまふ。残る人なくつかう奉りてのしるさま、行幸に劣る差別なし。飽かぬほどにて還らせ給ふを、いみじう思しめす。

○東宮も帝と御一緒に、桐壺院へ御見舞に参上しようと思しめされたが、それではあまりに仰

むせ——桐壺院が冷泉院即ち東宮にいろ／＼なことを御教訓になるが。  
○いと物はかなき——東宮の幼稚なさま。  
○うしろめたく——院は不安に。  
○大將にも——源氏の大将をいふ。このとき源氏も坐にゐられたものらしい。  
○おほやけに仕う奉り云々——院が源氏に對しても、朝廷に奉仕する心掛や、この東宮の御世話のことを、丁寧に仰せつけられた。  
○いみじう思しめす——大へん名残惜しく院が思召される。  
○太后——皇太后弘徽殿。  
○中宮のかく添ひおはする——藤壺中宮のかく院についてゐらつしやるのに遠慮せられて。  
○おどろ／＼しきさま——格別な御重病になられ

々しく物騒しいので、別の日を選んで行啓あそばされた。東宮は御年齢五歳でゐらせられる場合には御成人あそばされ、然も愛らしいお姿で、ひたすら院をなつかしいと思つてゐられた心の積り積つてゐたので、院の御重態であらせられることも忘れ、ただ何といふこともなく嬉しとよろこんで院を御覽になつてゐらつしやるさまは、頗るいちらしい。中宮が悲しい涙に沈んでゐられるのを、桐壺院が御覽になるについても、あれやこれやについて御心をとりみだしなされる。さて院は萬のこともについて、東宮に御物話なさるが、まだ極く幼少な年頃でゐられるから、不安なものだと物悲しく思つて、ちつと見ながめてゐられる。又このとき参院してゐらつしやつた源氏の大将にも、朝廷に奉仕するべき御心がけや、この東宮の御後見あそばさすべきことなどを、繰返し／＼仰せられる。さて東宮には夜もよほど更けてから還啓あそばされた。今日の東宮の行啓には、宮中の重なる人々が残りなく供奉し奉つて、どよめき騒いでゐるさまは、行幸の當日に劣るとは見えない。まだ物足らないほどで、東宮が還啓あそばされたのを、桐壺院は大へん名残惜しく思しめされた。

太后もまわり給はむとするを、中宮のかく添ひおはするに、御心置かれて思しやすらふほどに、おどろ／＼しきさまにもおはしませ、かくれさせ給ひぬ。足を空に思ひ惑ふ人多かり。御位を去らせ給ふといふばかりにこそあれ。世の政をしづめさせ給へることも、わが御世の同じことにて、お



ることなくして。  
 ○かくれさせ給ひぬ——  
 桐壺院の崩御をいふ。  
 ○御位を去らせ給ふと云々——桐壺院は御讓位なされたとはいふものの、それは名ばかりで天下の政務をおとりになつてゐられたことは、御在位中と同じきであつた。  
 ○祖父大臣——弘徽殿の父右大臣。  
 ○心いと急にさがなうおはし——性急でよくない癖でみられるから。

○中宮大將——藤壺や源氏は。  
 ○勝れて——悲歎がまさつて。  
 ○後々の御わざ——七日七日などの佛事。  
 ○孝じ——供養し。  
 ○藤の御衣——喪服に源

氏が。  
 ○去年今年とうちつゞき——去年は葵上の死、今年桐壺院と、打續いての不幸を見給ふについても。  
 ○かかる序にもまづ思し立たる——かうした機会に出家しようと、源氏の君はお考へになることもあるが。  
 ○さまぐの御ほだし——夕霧や紫上といろく／＼な係累が多くて、出家するのむづかしい。

はしまいつるを、帝はいと若うおはします。祖父大臣、いと急にさがなうおはして、その御ままになりなむ世を、いかならむと、上達部殿上人皆思ひなげく。

弘徽殿皇太后も、院の御病氣御見舞のために参上なさらうと思しめされたが、藤壺中宮が斯く院に引き添うてゐらつしやるのに遠慮せられて、どうしようかと躊躇してゐられた間に、桐壺院はさほどの御重態といふこともなくして、遂に崩御あそばされた。足を空にしてあはて迷ふものが多つた。元來、桐壺院は新帝に御讓位あそばされたとはいふものの、それは單に名ばかりであつた。天下の政務を自らとつてゐられたことは、御在位當時と同じきまでみせられたのを、かく崩御なさつては困つたことであり、なほ新帝朱雀院は、まだ御年も若くみせられる。外戚の御祖父大臣は頗る性急な悪い御性格でゐられて、天下の政務はその方の心のままになつて行く世を、どうなるのであらうかと上達部殿上人どもは皆心配してゐる。

中宮、大將殿などは、まして勝れて物も思しわかず。後々の御わざなど、孝じ仕うまつりたまふさまも、そこらの御子たちの御中にすぐれ給へるを、ことわりながらいとあはれに、世の人も見たてまつる。藤の御衣にやつれ給へるにつけても、限なく清らに心苦しげなり。去年今年とうちつゞき、



かかることを見給ふに、世もいとあぢきなう思さるれば、かかる序にも、まづ思し立たるることはあれど、またさまぐの御ほだしおほかり。

藤壺中宮や、大將源氏の君は一層悲歎がまさつて、ただぼんやりと途方に暮れてゐられる。さうして院崩御後の佛事どもを御供養してゐられる有様は、多くの皇子達の中でもすぐれて熱心につとめられる。これも道理のあることながら、御氣毒なことだと、世の人々も見奉つた。源氏が喪服にやつしてゐられる御姿についても、限りなく美しく氣毒なさまである。去年は葵上の死、今年に桐壺院の崩御と引きつづいての不幸を御覽になるについても、世の中の無常がつく／＼と感ぜられて、出家しようかと、源氏の君は先づ發心なさるのであつたが、振りかへつて見れば、夕霧や紫上といろ／＼なほだしも多くて、出家するのむづかしかつた。

御四十九日までは、女御御息所だち、みな院に集ひ給へりつるを、過ぎぬれば散り／＼にまかてたまふ。十二月の廿日なれば、大方の世の中とぢむる空の氣色につけても、まして晴るる世なき、中宮の御心のうちなり。大后の御心をも知り給へれば、心にまかせ給へらむ世の、はしたなく住み憂からむを思すよりも、馴れ聞えたまへる年頃の御有様を、思ひ出で聞えたまはぬ時の間なきに、かくてもおはしますまじう、みなほか／＼へと出で給ふほど、悲しき事かぎりなし。

世の中は、都合の悪い住み愛いものだらうと思しめすがそれよりも。  
○馴れ聞えたまへる云々  
年頃馴れ親んでゐた桐壺院の御有様ばかりが思ひ出されるのに。  
○かくてもおはしますまじう——このままこの院に居ることも出来ないの

○大方の世の中とぢむる云々——全體の世間は年暮の心寂しい空模様であるから心細いのに、まして院にお別れになつた中宮は一層の心淋しいときである。  
○大后の御心云々——藤壺は弘徽殿の心中をも御存じであるから、  
○心にまかせ給へらむ——大后の心のままになる

四十九日の間は、女御や御息所だちは、皆院中に集つてゐらつしやつたが、それも終つてしまふと、何れの方もちり／＼に退散なまつた。その頃は十二月の廿日のことであるから、全體の世間は、年暮れの寂しい空模様で、誰でも物悲しいのであるのに、まして桐壺院に死に別れとなられた中宮藤壺は、一層心の中がなぐさめられない。弘徽殿の大后の心中を御存じであるからして、大后の御心のままになつて行く今後の世の中は、都合悪く住みづらいものであらうと思しめされるについても悲しいのであるが、それよりも、朝夕馴れ親んでゐた年頃の院の面影を思ひ出さない時はなく、始終思ひ浮べてゐられた。然るに只今となつては、かうしてゐるわけにも行かず、院中の人々が何れも皆他所へ退散なまるといふ時になつたので、中宮のその悲しさは果てしもないものである。

宮は、三條の宮に渡りたまふ。御迎へに、兵部卿の宮参りたまへり。雪うち散り風烈しうて、院の内、やう／＼人めかれゆきて、しめやかなるに、大將殿こなたにまゐり給ひて、ふるき御物語きこえ給ふ。御前の五葉の雪にしほれて、下葉枯れたるを見たまひて、みこ、  
かけひろみたのみし松や枯れにけむ下葉散りゆく年のくれかな

○宮は三條の宮に——藤壺の宮は里邸の三條の宮に。  
○兵部卿の宮——藤壺の兄で、紫上の父。  
○人めかれゆきて——院の内にはだん／＼と人も少くなつて。  
○大將殿こなた云々——源氏も今なほ院中に表に

何ばかりのこともあらぬに、折から物あはれにて、大將の御袖いたうぬれぬ。池のひまなうこほれるに、

（源氏）  
さえわたる池の鏡のさやけきに見なれしかげを見ぬぞかなしき  
とおほすまに、あまり若々しうぞあるや。王命婦、

年暮れて岩井の水もこほりとち見しひとかげのあせもゆくかな

藤壺の宮は、里邸三條の宮にお移りになる。そのお迎へには御兄兵部卿の宮がお出でなされた。時しも雪がちら／＼と降り、風は烈しく吹き、院の内には人もだん／＼と少くなつてひっそりとしてゐる。かねてから院にゐらつしやつた大將源氏の君は、此の方にお出でなされて、兵部卿の宮と昔物語りをされる。御前の前裁にある五葉の松は、雪にしをれ、下葉は枯れてゐる。このさまを御覽にあそばされた兵部卿の宮の御歌に、

かげひろみたのみし松や枯れにけむ下葉散りゆく年のくれかな

と。これといふほどのよい歌でもないが、折から物哀れに聞えて、源氏の大將の御袖も涙で濡れた。池が一面に氷つてゐるので、そのさまを源氏は一首の歌に、

さえわたる池の鏡のさやけきに見なれしかげを見ぬぞかなしき

と。ただ思はれたままにお詠みになつた。あまり子供らしい歌である。次に藤壺の侍女である王命婦のよんだ歌は、

服してゐられたが、藤壺の部屋に来て、兵部卿の宮と昔物語をなされた。  
○五葉の——五葉の松。  
○かげひろみたのみし云々の歌——補欄参照。  
○何ばかりのことも——何でもないつまらぬ歌ではあるが。  
○さえわたる池の云々の歌——補欄参照。  
○とおほすまに云々——思つた通りに、何の飾りもなく詠んだのは、あまり子供らしい歌である。  
○王命婦——藤壺の侍女。  
○年暮れて岩井の水も云々の歌——補欄参照。

年暮れて岩井の水もこほりとち見しひとかげのあせもゆくかなと。

補 ○かげひろみたのみし松云々の歌——木陰が廣いといふのでたよりにしてゐた松も枯れてしまつたかな。下葉がだん／＼と枯れて行く年の暮である。即ちたよりにしてゐた桐壺院がお隠れになつたので、お仕へしてゐた人々がだん／＼と退散するので淋しい年の暮れである。○さえわたる池の鏡の云々の歌——氷つた池は鏡のやうに冴えきつてゐるが、今まで見馴れてきた父桐壺院の面影が寫つて見えないのがまことに悲しい。○年暮れて岩井の水も云々の歌——年も暮れたので、岩井の水も氷でとざされてしまひ、今まで見馴れてゐた人影も、だん／＼と見えなくなつてゆくことであるかなの意。

評 この三人の歌には、それ／＼に三人の色彩をあらはしてゐる。さすが兵部卿の歌は老巧な比喩を用ひ、源氏の君の歌は率直にして飾りのないところに、父を思ふ眞情をあらはし、王命婦はさすが侍女だけあつて、歌のしらべも亂れてゐる。かうしたやうに三人三様の趣を出したあたりは、さすが紫式部の老練な筆致である。

そのついでにいと多かれど、さのみ書きつゞくべきことかは。渡らせ給ふ儀式かはらねど、思ひなしにあはれにて、ふるき宮は、かへりて旅心地し給ふにも、御里住絶えたる年月のほど、思しめぐらさるべし。

○そのついでに云々——その折にまだ人々のよんだ歌も深山あつたが。  
○渡らせ給ふ儀式云々——藤壺の三條の宮にお移りになる儀式は、やはり

中宮の格式通りで、別段粗略にされたわけでもないが、氣のせいかな何となくしめやかで。  
○御里 絶えたる——里邸に退出なく、始終院の傍にゐられた年月の事。

○世の中今めかしきことなく——世間は花やかなことなくひっそりとしてゐる。諒闇中であるから。  
○除目——春の縣召の除目で、地方官の任免が行はる。  
○院の御時をば云々——院の御在位の時はいふにも及ばず、御讓位後も御存命中は何の變りもなく、源氏の門前には隙間もなく車馬が立ち込めてゐたのが、今はすつかりそれも少くなつて。(これ源氏の勢の衰へたことをいふ)

○御門のわたり——源氏の里邸二條院の門前。  
○宿直物の袋——邸の役所に宿直する人も少いために、宿直者の夜具包の持ち運ばれる事も無い。  
○特に急ぐことなげに云々——格別に忙しさに急いでゐるさまもないのを御覽になると。  
○御櫛匣殿——朧月夜の君。  
○院の御思ひに——前侍が桐壺院の喪のために出家したので、その代りになつたのである。  
○あまたまゐり集りたまふ中に——今上の女御更衣などの多くゐられるなかに、この侍は特に寵愛を蒙りなかつた。  
○后は——弘徽殿の皇太后のこと、侍の跡にあたる。  
○梅壺——凝華舎の一名。  
○かんの君——内侍のか

賢木

その折に人々の詠んだ歌は、右のほかに澤山ありましたが、そんなに書きつづくべきことでもないでせう。さて藤壺の宮が、里邸三條の宮にお移りになる儀式は、やはり中宮の格式によつて行はれたので、何も粗略にしたといふわけでもないが、さう思つて見る氣のせいかな、何となく物哀れであつた。三條の舊邸にお歸りになると、今では却つて餘所へ行つたやうな旅心地がするについても、これまで里邸に住まれることが絶えてゐて、院の御側にはかりゐられた幾年月の永い間を思ひ出しなさるらしい。

年かへりぬれど、世の中今めかしきことなく静なり。大將殿は、物憂くて籠り給へり。除目の頃など、院の御時をば更にもいはず、年頃劣るけじめなくて、御門のわたり、所なく立ち込みたりし馬車うすらぎて、宿直物の袋をさく見えず。親しき家司ばかり、殊に急ぐことなげにてあるを見給ふにも、今よりはかくこそはと思ひやられて、ものすさまじくなむ。

年が改つたが、世間は花やかなこともなく、まだ諒闇でひっそりとしてゐる。大將源氏の君は物憂くて引籠り中である。春の縣召の除目が行はれる時などは、桐壺院御在位中は言ふまでもなく、御讓位後も御存命中は何の變りもなく、源氏の君の門前には、隙間もなく立ち込んでゐた馬や車も、今日この頃は頗るまばらとなり、宿直に夜具を入れた袋を携へて来る者どもも殆んど無くなつた。ただ親しく御仕へ申してゐる家司だけが、殊に忙しくて急ぐといふこともなく、ゆつくりとしたさまで通うてゐるのを見給ふについても、今後はこのやうな寂寥たるさまで世を過ぎねばならぬことかと思ひやられて、何ごとにももの淋しいことである。

「年かへり」とあるは、源氏の君の二十四歳になりなかつたのである。又、「御門のわたり、所なく立ち込みたりし馬車うすらぎて」とあるのは、自氏文集中の琵琶行の「門前零落鞍馬稀」の句のおもむきである。

御櫛匣殿は、二月に侍になり給ひぬ。院の御思ひに、やがて尼になり給へるかはりなりけり。やむごとなくもてなして、人がらもいと善くおはすれば、あまたまゐり集りたまふ中にも、すぐれてときめき給ふ。后は、里邸におはしまして、参り給ふ時の御局には、梅壺をしたれば、弘徽殿に

はかんの君住み給ふ。登花殿うもれたりつるに、晴れくしうなりて、女房なども數知らず集り参りて、今めかしう花やぎ給へど、御心のうちは、思ひの外なりし事どもを忘れ難う歎き給ふ。いとしのびて通はし給ふことは、なほ同じさまなるべし。物の聞えもあらば、いかならむと思しながら、例の御癖なれば、今しも御志まさるべかめり。

賢木

御掃部殿即ち臘月夜の君は、この二月に尙侍に御昇進あそばされた。これは前尙侍が、桐

壺院の喪に尼とられた方の代りである。この今の尙侍御掃部殿は、身分も高くみせられるし、人柄も頗る良い方であるから、今上の女御更衣など多くみせられる中でも、すぐれた寵愛を蒙つてゐられた。弘徽殿の太后は、この頃は里邸にばかりお住ひあそばされることが多い。さうして御参内なさるときの御局には梅壺をあてがはれたから、従前太后の御局であつた弘徽殿には尙侍(即ち臘月夜の君)がお住みなさるのになつた。尙侍が従来住んでゐられた登花殿は奥まつた陰気な所であつたが、弘徽殿にお移りになつては、花やかに晴れ／＼しくなり、女房どもも数多く集つて、何事も派手に賑やかなことである。けれども御心の中には、いつぞや思ひもかけず源氏の君と逢つたことどもを、忘れ難く思ひつづけてゐられる。今でもこつそり源氏の君と御文通してゐられるのは、尙侍になられない以前と同様であるやうだ。この内密な文通が露顯して、世の評判とならばどんなことになるだらうと、源氏の君は心配しながらも、爲し遂げられない無理な戀は、意地にも果したいといふ何時もの御性癖でゐられるから、今となつては尙侍を愛しなさる御心は一層強烈になつたやうである。

補

こゝで臘月夜は尙侍となられたが、實は御妃でゐられたので、この方が尙侍となつて女御となられなかつたわけは、この巻の末になつて書かれてゐる。元來内侍は女の役人であるが、當時は妃であつた方も多かつた。

みの君の略。尙侍の臘月夜をさす。

○登花殿のうもれたりつるに——臘月夜の君は、従来奥まりたる登花殿に引込でゐられたのが、弘徽殿に移られてからは、花やかになつて。

○思ひの外なりし事——いつぞや思はずも源氏と逢つたこと。

○いとしのびて——こつそりと源氏と文通のあることは、尙侍にならぬときと同様である。

○物の聞えもあらば——この事が評判にでもなつたならば、どうなるだらうと。

○例の御辭——無理な戀は意地にも果したいといふいつもの性質。

○后の御心いちはやくて——弘徽殿の御心は烈しくて。

○かた／＼思しつめたる事——いろ／＼と思ひ集めた怨みの復讐をしよう

と。

○はしたなき事——源氏に取つては都合の悪いこと。

○見知り給はぬ世のうさまで全く見知りもしなかつた浮世の心愛さに。

○立ちまふべく云々——世の中の交りに立ち交らうとも思はれない。

○故姫君をひきよぎて云々——奏上を今上が東宮のときに懇望せられたのを御辭退して、源氏の君に差上げた左大臣の心持を、弘徽殿の皇太后は前から恨に持つてひどく憎んでゐられた。

○大臣の御中も——左大臣と右大臣との交情も。

○そば／＼しう——中よ

院のおはしましつる世こそ憚り給ひつれ。后の御心いちはやくて、かたがた思しつめたる事どもの、報せむと思すべかめり。事に觸れて、はしたなき事のみ出て来れば、かかるべき事とは思ししかど、見知り給はぬ世のうさに、立ちまふべくも思されず。左大臣も、すさまじき心地し給ひて、こゝに内裏にも参り給はず。故姫君をひきよぎて、この大將の君に聞えつけ給ひし御心を、后はおほしおきて、よろしくも思ひ聞え給はず。大臣の御中も、もとよりそば／＼しうおはするに、故院の御世には、わがままにおはせしを、時移りて、したり顔におはするを、味氣なしと思したるも道理なる。

釋

桐壺院のまだ御在世中こそは、弘徽殿の太后は御遠慮してゐられたが、院の崩御になつた今日は、太后の御心は容赦ない烈しい御心で、いろ／＼について思ひ込んだ事どもの復讐をしようと思つてゐられたやうである。事毎について、都合の悪いことばかりが出てくるので、源氏の君は、以前から斯うなるであらうと思つてゐらつしやつたが、これまでこんな心辛い目にお逢ひになつたことのない浮世の憂さに、もう世間と交際しようと思しめされない。左大臣も面白からず思召して、ことに宮中に参内なさることもない。今上がまだ東宮でゐられたときに

からぬこと。  
 ○わがままにおはせしを  
 左大臣の心の儘であつたのを。  
 ○したり顔におはする—  
 右大臣が。  
 ○味氣なしと思し—左大臣が面白からぬと思す。

○渡り通ひ給ひて—左大臣邸へ通ひなすつて。  
 ○侍ひし人々をも—侍女等を却つて昔よりは増して細かに心附けられる。

○若君—夕霧。  
 ○いたづき聞えたまふ事は左大臣が源氏をいたはれることは従前の通りである。  
 ○限りなき御おぼえ云々—桐壺院の源氏を寵愛なさるのが、あまりに甚しかつた爲めに、源氏も出仕などに忙しくて暇もなかつたが、今は暇も出

故葵上を懇望せられたのであるが、それを御辭退して源氏の君に差上げた左大臣の心持を、大后は兼ねてより憤つてゐられたので、左大臣に對しても、非常に悪く思つてゐられる。左大臣と右大臣との間柄も、もと／＼から御仲がよろしくなかつた。故桐壺院御在世中は、左大臣が心のままに振舞うてゐられたが、今や時勢は移り變つて、右大臣が得意顔に振舞はれるのを、左大臣がつまらぬことと思し召してゐられるのも御尤である。

○よろしうも思ひ聞え給はず—この「よろしうも」は、「よろし」といふ「よし」とは異つて、中等なることをいふ。並々にも思はれず、ひどく憎まれるのである。

大將は、ありしに變らず渡り通ひ給ひて、侍ひし人々をも、なか／＼に細に思しおきて、若君をかしづき思ひ聞え給へること限りなければ、あはれにありがたき御心と、いとどいたづき聞えたまふ事ども同じさまなり。限りなき御おぼえの、あまり物騒しきまで、暇なげに見えたまひしを、通ひたまひしところ／＼も、かた／＼に絶えたまふ事どもあり。輕々しき御忍歩行も、あいなう思しなりて、殊にし給はねば、いとのだやかに、今しもあらまほしき御有様なり。

源氏の大將は、過ぎし日に變らず左大臣家(なくなつた葵上の家)に通ひなすつて、葵上に仕

來て。  
 ○通ひたまひし—方々に忍び通うてゐられた女の許も。  
 ○かた／＼に云々—かうした喪の機會や、その他いろ／＼の原因で。  
 ○あいなら—面白みなく。  
 ○いとのだやかに—まことに落着いて、紫上と添うてゐられるのが、今こそ理想的である。

○西の對の姫君—紫上。  
 ○人知れず故尼君云々—私かにこれも故尼君(祖母)が朝夕紫上の幸福を祈願されてゐた効驗であると思つた。  
 ○父親王—兵部卿の宮。  
 ○聞えかはし—文の交換。即ち文通をいふ。  
 ○嫡腹のかがりなくと云

へてゐた昔の女房どもをも、却つて昔よりは親切にこま／＼と御世話なされ、若君である夕霧を一切に養育なさるさまは限りもないほどであつたから、これはまことに感謝に耐えない結構な源氏の君の御心であると、左大臣殿が、一層源氏を大切にいたはれるさまは、葵上存生のときと變りはない。桐壺院が御在世中は、院の源氏を御寵愛なさるのがあまりに極端であつた爲め、出仕のことなどで多忙で些の暇もないやうに見えたが、院崩御の後には暇も出来、又忍びやかに通うてゐられた女房どもの處も、喪の機會とかその他のことでも中絶なすつたこともある。(それで只今の源氏はそれこそおひまでゐられる。)源氏は輕卒な忍びの女通ひも、興味なくお考へになつて、特になさらないから、頗るゆつたりとして紫上と添うてゐられるのは、今こそ理想的な御有様である。

西の對の姫君の御幸福を、世の人もめて聞ゆ。小納言なども人知れず、故尼上の御祈禱のしるしと見奉る。父親王も思ふさまに聞えかはし給ふ。嫡腹のかぎりなくと思すは、はか／＼しうもえあらぬに、ねたげなる事多くて、繼母の北の方は、安からずおぼすべし。物語りに、殊更に作り出でたるやうなる御有様なり。

二條院の西の對屋に住んでゐる紫上の御幸運を、世の人々も結構なことだと持てはやした。

々——兵部卿宮の今の正妻の腹の女子で、頗る寵愛してゐるのは、嬪子の紫上のやうによいこともなく。

○物語りに云々——紫上の幸運な有様は特に物語りに作つたやうである。

○齋院——賀茂の齋院は桐壺院の第三皇女で、御喪服のためおやめになつたから。

○いつきには云々——齋院は大抵内親王がお立ちになるので、諸王の王女がなりなされることは先例も少いのであつたが。

○さるべき女御子——適當な内親王。

○なほ御心離れ云々——朝顔の姫を思ひあきらめなかつたに。

賢木

三二八

御乳母の少納言なども、ひそかに御祖母故尼上が、生前に於て姫君の幸福のために、御祈禱あそばされたその効驗であると思つて見てゐる。父の兵部卿宮も、思ふままに御文通をあそばされた。只今の正妻の女子で、限りなく出世するやうにと寵愛してゐるのは、はか／＼しくもよい御縁がないので、とかく妬ましい事が多い。それで紫上には繼母にあたる今の北の方は、胸中穩かならず思召すであらう。紫上の幸運でゐられる御有様は、昔物語に殊更に作り出したやうである。

評 「西の對の姫君の御幸福を、世の人もめで聞ゆ」といふ突然な簡単な文によつて、紫上が源氏の君の正妻となられたことを知らせてゐる。

齋院は御服にて、下り居給ひにしかば、朝顔の姫君は、かはりに居たまひにき。加茂のいつきには、孫王の居給ふ例多くもあらざりけれど、さるべき女御子やおはせざりけむ。大將の君、年経れど、なほ御心離れたまはざりつるを、かうすぢことになり給ひぬれば、口惜しとおぼす。中將に言づれたまふことも同じことにて、御文などは絶えざるべし。昔に變る御有様などをば、殊に何とおぼしたらず。かやうのはかなし事どもを、紛ることなきままに、此方彼方と思し惱めり。

○すぢことには——言通と變つた身分となられたので。

○中將に——朝顔の君の侍女。

○昔に變る御有様——源氏の御勢力は、往昔と比べて衰へ變つた有様などは殊に何とも思はれない。

○紛ることなき——閑散な身分。

○此方彼方——此方の女彼方の女についても。

○あはれにおぼし——帝が源氏の君を大切に思つてゐられたが。

○御心なよびたる——御氣だてが優柔過ぎて。

○母后、祖父大臣云々——皇太后弘徽殿や御父右大臣がそれ／＼勝手になされることは反対もなされず。

賢

賀茂神社の齋院でゐられた先帝第三の皇女は、院の御喪服のためにおとりになつてしまひな

さつたから、その代りに院の姫であらせられる朝顔の姫君がお立ちになつた。元來加茂の齋院には、諸王の王女がお立ちになることは先例もあまりないことであつたが、今回は然るべき適當な内親王がゐらつしやらなかつたので、かうした異例を開かれたのであらう。大將源氏の君は、永の年月を経たけれど、それでもやはり朝顔の姫のことは、御心から忘れることはなかつた。それがかうして常人と異つた齋院といふ境遇になりなかつたからして、まことに残念なことだと思しめされる。朝顔の姫の侍女である中將といふ女房と文通されることは、前と變りはない。さうしてこの中將を便として、朝顔の姫と絶えず文通をなされた。大體源氏の君、御自身境遇が昔とはすつかり變つた勢力の無い状態となつたが、それ等をば、特に何とも深く考へてゐられない。斯うした女との文通といふつまらぬことを、閑散な身であるので、あちらこちらの女と贈答して心を苦しめられる。

帝は、院の御遺言違へず、あはれにおぼしたれど、若うおはしますうちに、御心なよびたる方過ぎて、強き所おはしまさぬなるべし。母后、祖父大臣、とり／＼にしたまふことは、え背きたまはず。代の政御心にかはぬやうなり。

釋 帝朱雀院は故桐壺院の御遺言にも違へず、源氏の君を大切に愛してゐらつしやつたが、元來、

賢木

三二九

帝はまだお若くみらせられるうちにも、御氣だてが優雅な方に過ぎて、強くしつかりとした所はあらせられぬやうである。御母後の弘徽殿や御祖父右大臣が、さま／＼勝手に爲されることには、少しも反対をなさらない。世の政治は大御心には適はないありさまである。

煩はしきのみ増れど、かんの君は、人知れぬ御志通へば、わりなくとも覺束なくはあらず。五壇の御修法のはじめにて、慎みおはします隙を伺ひて、例の夢のやうに聞えたまふ。かの昔おほえたる細殿の局に、中納言の君まぎらはして入れ奉りたり。人めも繁きころなれば、常よりも端近なるを、そらおそろしうおぼゆ。朝夕に見奉る人だに、飽かぬ御さまなれば、まして珍らしきほどにのみある御對面の、いかでか疎ならむ。女の御さまも、實にぞめてたき御盛なる。おもりかななる方はいかがあらむ。をかしうなまめきわかびたる心地して、見まほしき御けはひなり。

弘徽殿の勢力が加はるについても、源氏の君にとつては、日毎にうるさいことばかりが増すのであつたが、かの侍臘月夜の君は、常に御志を源氏に通はしてゐられたからして、無理な間柄ではあるけれども、逢はぬと言つて氣をもむこともなかつた。時々逢ひなされる機会もあつた。五壇の御修法が初つて、帝には御深慮中である隙を伺つて、源氏は侍に逢ひ夢のやうな物語りがあつた。

○中納言の君——臘月夜の侍女。  
○入れ奉りたり——源氏を。  
○そらおそろしうおぼゆ——見つかりはせぬかと、中納言が恐ろしく思つた。  
○飽かぬ御さま——源氏の美貌は。  
○疎ならむ——女が疎略に思ふ筈はない。  
○おもりか——落着いた點。

○ただここにしも——すぐ側で。  
○宿直申し——近衛の官人が、大將以下少將以上の當夜、宿直の首席の人に、各々名乗をなし、宿直に侍る由をつけ、時刻を知らせること。

うな物語りがあつた。彼の弘徽殿の細殿で臘月夜に始めて逢つた夜が思ひ出されるやうな細殿の局に、中納言の君といふ女房が、源氏の君をうまく紛らかして入れ申した。この頃の弘徽殿あたりは人目も繁きころであつたから、常よりも端近な御座所は、人に見咎められることもあらうかと、何となく恐ろしく思つたからである。朝晩始終源氏の君にお目にかかる者でさへも、君の美しい姿は見飽かないさまである。まして侍はたまさかにお逢ひなされる御對面であるからして、どうして疎かに思ひめされやうか。又女君侍も、世の評判の通りに美しい盛りである。ただ重々しく落着いた方面はどうであらうか、これは少し足りないやうである。然しおもむきがあり、艶麗で若々しく見え、すかれさうな御様子でゐられる。

臘月夜の侍と、源氏の君とは、これまで屢々密通のあつたことは、「常よりも端近なるを、そらおそろしうおぼゆ」とか、「珍らしきほどにのみある御對面の」語によつてほめかされてゐる。

ほどなく明けゆくにやと覺ゆるに、ただここにしも「宿直申し侍ふ」と、こわづくるなり。又このわたりにかくろへたる近衛司ぞあるべき。腹穢きかたへの教へおこするぞかすと、大將は聞きたまふ。をかしきものからわづらはし。此處彼處尋ねありきて、「寅ひとつ」と申すなり。女君、



心からかた／＼袖をぬらすかなあくとをしふるこゑにつけても  
との給ふさま、はかなだちていとをかし。

なげきつ、我身はかくて過せとやむねのあくべき時ぞともなく  
しづ心なくて出でたまひぬ。

○又このわたりに云々——源氏は自分宿直でき  
てゐるのでないから、他  
の近衛の次将などが、此  
邊の女房のもとに隠れ忍  
んでゐるのを、それを知  
つた意地の悪い仲間のも  
のが、官人に居所を知ら  
せて、宿直申しにこま  
でよこしたものであると  
源氏が推察なさるのであ  
る。  
○腹穢き——意地の悪い  
傍輩。  
○寅ひとし——これ近衛  
の官人の言である。寅一  
刻即ち午前四時頃をい  
ふ。  
○心からかた／＼云々の  
歌——補欄参照。  
○はかなだちて——心細  
いさまで。  
○なげきつ、我身云々の  
歌——補欄参照。

問もなく夜もだん／＼と明けはなれて行くのかと思はれる頃に、すぐ側のあたりで、「宿直申  
し候」と聲をたからかに言ふものがある。(自分源氏は近衛の大將であるが、勿論我を知つてゐ  
て、我に對して宿直申しをする悪戯ではない)察するに我と同じ近衛司が、このあたりの女  
房の局にでも隠れてゐるのであらう。意地の悪い者どもが、それを嗅ぎつけ、官人どもに教へ  
て、ここに来て宿直申しをさせ、當のかくれてゐる近衛司をおどろかしてゐるのに違ひないと、  
大將源氏の君はお考へになつた。その悪戯は面白いものであるが、又うるさいとも思はれる。  
彼の官人は宿直申し候と言つてゐるが返事がないので、此處彼處と尋ねめぐり、遂に近衛司を  
発見したのであらう。「寅の一刻であります」と申した。朧月夜はそれをお聞きになり、一首の  
歌をよまれる。  
心からかた／＼袖をぬらすかなあくとをしふるこゑにつけても  
と仰せられるありさまは、心細いさまで、まことに趣きがある。さて源氏の返歌には、  
なげきつ、我身はかくて過せとやむねのあくべき時ぞともなく

と、落着いた心でもゐられないので、遂に女の局を出でられた。

○心からかた／＼云々の歌——夜がもう明けましたと申す宿直申しの聲を聞くについても、  
人に厭かれるといふ「厭く」のことが聯想せられて、我が心ながら、何かについて悲しくなり、  
袖を濡らすことである。○なげきつ、我身は云々の歌——我身は斯く歎き悲しみながら、この  
一生を過せといふのであらうか。この夜はもう明けるといふのに、自分の胸の悶えは「開ける」  
といふことなく、何時までもなげいてゐることであるの意をかねてゐる。

夜深きあかつき月夜のえもいはず霧わたれるに、いと痛うやつれてふるま  
ひなし給へるしも、似る物なき御有様にて、承香殿の御兄の頭中將、藤壺  
より出でて、月の少しく隈ある、立菰のもとに立てりけるを、知らで過ぎ  
たまひけむこそいとほしけれ。もどき聞ゆるやうもありなむかし。かやう  
の事につけても、もてはなれつれなき人の御心を、かつはめでたしと思ひ  
聞えたまふものから、わが心のひく方にては、なほつらう心憂しと覺えた  
まふ折多かり。

夜もまだ明けはなれない曉の残月の光まだほの暗く、言ひやうもなく面白いさまに霧が立ち  
こめてゐるときに、源氏は姿をやつして人目立たないやうに振舞うて出て行かれた。その姿は

○やつれてふるまひなす  
——姿をやつして、人の  
知れないやうにするこ  
と。  
○承香殿——主上朱雀院  
の女御、鬘黒の妹である。  
○頭中將——葵上の兄と  
は異なり、鬘黒の弟であ  
る。  
○隈ある——立菰のかけ  
であるから、少し暗いの  
である。  
○立菰——目隠しの屏。  
○もどき聞ゆるやう——  
頭中將は源氏を非難する  
であらう。  
○もてはなれつれなき人  
——遠ざかつて薄情なそ

ぶりをされる藤壺。  
○わが心のひく方にては  
—わが心の勝手なこと  
については。

○内に参り給はむ—藤  
壺の中宮が参内なさるこ  
と。

○うひ／＼しく所狭く—  
—きまりわるく窮屈に。

○又たのもしき人も—  
藤壺のたよりとなる有力  
な人もないので。

○なほこのにくき御心の  
—やはり源氏が懸想な  
さる道ならぬ御心がやま  
ないので、藤壺はどうか  
すると胸にはつとすること  
がある。

○いささかも氣色を云々  
—桐壺院が、中宮と源  
氏との秘密を知らずに無

くなりなされたことを思  
ふさへも、空おそろしく  
なるのに。

○又さる事の聞えありて  
—さうした密通のこと  
が噂となつては。

○我身はさるものにて—  
—自分の身はどうなつて  
もよいとしても。

○このこと思ひやませ奉  
らむと—源氏に道なら  
ぬ心を断念させようと。

○思し至らぬことなく—  
—精々心を用ひて。

○心深くたばかり給ひけ  
む—源氏が注意深く計  
畫して忍び入りなされた  
ことを、侍女どもも知ら  
なかつたので。

○夢のやうにぞ—藤壺  
の感じ。

○まねぶべきやうもなく  
—言ひやうもないほ  
ど。  
○宮いとこよなく—藤

他に比べられないほどおもむきのあるさまであつた。承香殿女御の御兄の頭中將が、藤壺から出て来て、月影ほの暗い立郡のもとに立つてゐられた。源氏はこの頭中將に氣づかずしてお通りになつたことは、まことにお氣毒であつた。忍びの歩きを發見せられたので、これからはいろ／＼と、批難を受けられるであらう。かうした臘月夜のことについても、彼の藤壺中宮の全く遠ざかつて、無情な態度をしてゐられる御心を、一方では立派な心がけでゐられるとは思はめされるが、然しまた他の一面からは、自分勝手な感情の爲めに、やはり中宮のすげないさまを、心辛い方である。氣にくはぬ方だと思ひなさる時が多かつた。

内に参り給はむことは、うひ／＼しく所狭く思しなりて、春宮を見奉り給はぬを、覺束なく思えたまふ。又たのもしき人も物し給はねば、たゞこの大將の君をぞ、よろづに頼み聞え給へるに、なほこのにくき御心のやまぬに、ともすれば御胸をつぶし給ひつつ、いささかも氣色を御覽じ知らずなりにしを、思ふだにいとおそろしきに、今さらに又さるこの聞えありて、我身はさるものにて、春宮の御ために、必ずよからぬこと出で來なむと思すに、いとおそろしければ、御祈禱をさへせさせたまひて、このこと思ひやませ奉らむと、思し至らぬことなく通れたまふを、いかなる所にかあり

けむ。あさまじうて近づき参り給へり。心深くたばかり給ひけむことを、知る人なかりければ、夢のやうにぞありける。

藤壺の中宮は宮中に参内なさるのも、きまりわるく窮屈に思され、従つて永らく参内ならぬ。そのため久しく春宮に御目見えないので、心不安に思つてゐられる。又他に特別にたよりとする有力な人もないので、ただこの源氏の大將をたよりとしてゐられる。然しやはり源氏が懸想なさる道ならぬ懸がやまないで、どうかすると藤壺は胸にはつとすることがある。故桐壺院が世を終るまで、少しもこの源氏との秘密を御存じなかつたことを、思ひ出して見ても、頗る空おそろしいのに、今更に又、さうした秘密が評判となつては、この自分の身はどうなつてもよいとしても、我が子、東宮のためには必ずよくないことが起るであらうと思すと、いよ／＼こわくなつてきた。さては藤壺が御祈禱までなされて、源氏の君の道ならぬ御心を、断念あそばすやうにと百方手を盡して、それを通れてゐられたが、どうした機會であつたのか、思ひがけなくも源氏が、藤壺の御座所近くに接近なされた。かう接近なさるには、源氏も随分計畫なされたのであつたらう。然るに侍女どもは誰も氣づくものがなかつたのであるから、唯夢のやうであつた。

まねぶべきやうもなく聞え續けたまへど、宮いとこよなくもてはなれ聞えたまひて、はて／＼は御胸を痛う惱み給へば、近う侍ひつる命婦、辨など

畫の宮は手づよくはねつけて。  
○あさましう云々——あきれながら御看護申した。

○男は——源氏は。

○來しかた行くさき——過去のことも、未來も希望がなくなつて、眞暗となり、正氣が失せて。

○しげうまがへば——大へん混雜したので。

○われにもあらで——夢心地で。

○塗籠——四方壁で圍み物置寢室などにする室。

○御衣ども云々——源氏の衣類を隠して置く侍女どもも、わづらはしいことである。

○御氣あがりて——いぼせて。

ぞ、あさましう見奉りあつかふ。男は、うしつらしと、思ひ聞え給ふ事かぎりなきに、來しかた行くさき、かきくらす心地して、現心も失せにければ、明けはてにけれど、出て給はずなりぬ。御惱に驚きて、人々近う参りてしげうまがへば、われにもあらで、塗籠に押し入れられておはす。御衣ども隠しもたる人のここちども、いとむつかし。

釋

源氏は、言ひやうもないほど巧に藤壺を口説きなさるが、藤壺の宮は、手づよくはねつけた態度をなさつて、果ては御胸を頗る痛みなさるので、近く伺候してゐた命婦だとか、辨などは意外なことだと言ひながら御看病申した。源氏は、藤壺のすげない態度を心憂くも辛くもあるかなと、頗る怨言を申されるのであつた。さうして御自身は、過去のことといひ、今後のことといひ、すつかり途方に暮れたやうな心地がして、正氣でもゐられないから、夜はすつかり明けてしまつたが、そのまま藤壺の所にとどまりなかつて、お歸りはなかつた。

藤壺の御病氣に驚いて、人々が近く参上して、いたく混亂してゐたから、源氏は夢心地で塗籠に押し入れられてゐらつしやつた。君の衣類を人に見られまいと、近侍のものどもが、隠し持つてゐる人々の心持なども、まことにわづらはしいことだ。

宮は、物をいとわびしと思しけるに、御氣あがりて、なほ惱ましうせさせ

○兵部卿宮——藤壺の兄。

○宮の大夫——中宮大夫をいふ。中宮職の長官。

○僧召せ——御病の加持祈禱をなさるのである。

○かく籠り居給ひ——かく塗籠に源氏が隠れてゐらつしやるとは、藤壺は少しも氣がつかず。

○御心惑はさじと——藤壺に心配をかけないで置かうと。

○畫の御座——藤壺が表座敷に。

○よろしう思さる云々——藤壺の御病氣もよくなりなかつたのだと、兵部卿の宮もお歸りになり。

○例もけちかくならさせ

給ふ。兵部卿宮、宮の大夫などまゐりて、僧召せなどさわぐを、大將いとわびしう聞きおはす。辛うじて暮れゆくほどにぞおこたりたまへる。

釋

藤壺中宮は、あまり御心痛あそばされた結果、のぼせあがつて、やはり御病氣の體でゐられる。御兄兵部卿の宮や、中宮職の長官などがお伺ひ申して、御平癒御祈禱のために加持の僧を呼べなど言ひ騒ぐのを、源氏の大将は頗るなやましいことだと、塗籠の中で聞いてゐらつしやる。然しやうやくのことで、日も暮れる夕方の頃、藤壺の御病氣も、やや御氣分がよろしくなられた。

かく籠り居給へらむとは思しもかけず、人々も又御心惑はさじとて、かくなむとも申さぬなるべし。畫の御座に膝行出ておはします。よろしう思さるるなめりとして、宮もまかで給ひなどして、御前人ずくなになりぬ。例もけちかくならさせ給ふ人少ければ、此處彼處の物の後などにぞ侍ふ。命婦の君などは、「いかにたばかりていだし奉らむ。今宵さへ御氣あがらせたまはむ。いとほしう」などうちささめきあつかふ。

釋

かく源氏の君が塗籠の中に隠れてゐられるとは、藤壺の宮は少しも思つてゐられないことであるし、側近に仕へてゐる人々も、宮に心配をかけまいと思しめされて、源氏はかうくして

云々——いつも側近に侍る人が少ないので。これ當時のつつましやかな人の態度。  
 ○此處彼處の——藤壺の女房どもが、  
 ○いかにたばかりて云々——どう都合して源氏の君をお歸し申さうか。源氏があらつしやつては、藤壺は今夜又のぼせなさるのであらう、氣毒である。

○珍らしく嬉しき——昨夜源氏は藤壺に逢ひなかつたが、顔を見られなかつたのが、今屏風の間からお顔を見て、珍らしく嬉しく思ひなされる。  
 ○涙はおちて——源氏が、  
 ○世やつきぬらむ——壽命も盡きたのであらう。  
 ○傍目——傍から見た様子。  
 ○箱の蓋——昔は蓋を今日の欲のやうに使つた。  
 ○見入れ給はず——藤壺

わられると申さないやうである。藤壺は何も御存じないので、表座敷に膝行出でてゐらつしやる。もう宮の御病氣もよくなつたのであらうと言つて、兄の兵部卿の宮なども御退出なされて、御前には侍ふ人々も少くなつた。元來、藤壺の側近には、ふだんから侍ふ人々を、少くしてゐらつしやつたのであるから、女房どもは此處彼處の物のかけに退りぞいてゐた。命婦の君などは、「どう取りはからつて、源氏の君をお歸し申さうか。源氏の君がゐらつしやつては、宮は今夜また、おのぼせなさるであらう。さうなつてはまことに氣毒なことである」などと、ささやきあつて、とりなしに困つてゐる。

君は、塗籠の戸の細目にあきたるを、やをらおしあけて、御屏風の間ひんびょうまに傳ひ入りたまひぬ。珍らしく嬉しきにも、涙はおちて見奉り給ふ。「なほいと苦しうこそあれ。世やつきぬらむ」とて、外の方を見出したまへる傍目、言ひしらずなまめかしう見ゆ。御菓子おんくぢものをだにとてまゐりすゑたり。箱の蓋などにも、懐しきさまにてあれど、見入れ給はず。世の中をいたう思ひなやめる氣色にて、のどかに眺め入りたまへる、いみじうらうたげなり。簪、頭つき、御髪みかみのかかりたるさま、限りなきにほはしさなど、ただかの對の姫君ひめぎみに違ふところなし。年頃少し思ひ忘れたまへりつるを、あさましきま

で覺え給へるかなと、見たまふままに、少し物思ひのはるけ所ある心地し給ふ。

○世の中をいたう思ひ——世の中の無常果敢ないことどもを、しみじみと思ひ悩んでゐられるさま。  
 ○ただかの對の姫君に云々——全くあの紫上そつくり似てゐる。  
 ○年頃少し思ひ忘れたまへり——年來、源氏は紫上のために、藤壺のことは、すっかり忘れてゐられたが。  
 ○あさましきまで覺え給へる——びつくりするほど、藤壺が紫上に似てゐられることかな。  
 ○少し物思ひのはるけ所云々——藤壺の戀しい時は、紫上を見ればよいと思つて、心の晴し所あるやうに思ふ。

源氏の君は、塗籠の戸が細目に開いてゐるのを、そろりと開いて、御屏風の間を通つて、藤壺の居られる表座敷にお入りになつた。昨晚、源氏は藤壺にお逢ひになつたが、そのときは藤壺の宮を御覽にならなかつたのが、今、お顔を御覽になると、珍しくもあり嬉しくもあつて、遂に感涙に咽びながらご覽になる。藤壺は、「やはりまだ胸が苦しい。もう吾が壽命も盡きたのであらうか」と言ひながら、外の景色を見てゐられる横顔は、何とも言はれないほど艶麗に見える。せめて御菓子でも召しあがるやうにと御前に据ゑてある。箱の蓋などに優美なさまに置かれてあるが、宮はごらんにはさへならぬ。ただ世の中の無常轉變の果敢なきさまを思ひ悩んでゐられるさまで、靜かに物を眺めてゐらつしやるのが、頗る愛らしい姿である。又簪、頭のさま、御髪の垂れさがつてゐるありさま、大へんよい顔の色艶などは、ひたすら彼の二條院の西の對屋にゐる紫上をつくりの姿である。

■

○世やつきぬらむ——樹下集に、「あはざりしなみだ、もろくなりゆくは世をつきぬらん時や

きぬらん」といふ歌あり。

氣高う恥づかしげなるさまなども、更に他人と思ひわき難きを、なほかぎりなく、昔より思ひしめ聞えてし心の思ひなしにや、さまことにいみじうねびまさり給ひにけるかなと、類なく覺えたまふに、心惑ひして、やをら、御帳の内にかかづらひよりて、御衣の褌を引きならし給ふ。

藤壺の人品の氣高く、他から見ても氣恥づかしい有様なども、全く紫上とは別人であると思はれないほど似通うてゐられるが如くに源氏の君が思しめされるのは、昔から宮を心に深く思ひ慕つてゐられるためであらうか。藤壺は格別に美しく女盛りになりなかつたかなと、源氏の君は、たぐひなく思ひなさんと、前後の分別も忘れてしまひ、そろりと御帳の内に傳ひよりなかつて、藤壺の御衣の褌を引き動かさなさん。

けはひしるくさとにほひたるに、あさましうむくつけう思されて、やがてひれふし給へり。見だに向き給へかしと、心やましうつらくて、ひき寄せ給へるに、御衣をすべし置きて、膝行退き給ふに、心にもあらず、御髪の取りそへられたりければ、いと心憂く、宿世のほど思し知られて、いみじ

○更に他人と思ひ云々——全く紫上とは別なる人と思はれない。  
○昔より思ひしめ——昔から思ひ込んでゐる氣のせいにして。  
○さまことに——藤壺の方が際だつて美しい女盛りになりなかつたかな。  
○心惑ひして——前後の分別も忘れて。  
○御衣——藤壺の御衣。

○けはひしるく——源氏とすぐに分るほど、薰物の香がただよつたので。  
○あさましうむくつけう——あきれほど厭はしく。  
○ひれふし——うつ伏になる。

とおほしたり。

源氏の君が近づかれたのであると、その氣分が十分わかるほどに、源氏の薰物の匂ひがさつと強く匂うたので、藤壺はあきれればかり厭はしく思しめされ、そのままうつぶしなかつた。せめてこちらを見向きでもなさいと、源氏の君は心なやましく辛氣であつたから、藤壺の體を引き寄せなかつたが、藤壺は御衣を脱ぎ捨てて、膝行しながら退かせられると、源氏は摺むつもりでなかつたが、藤壺の御髪の毛が少し、脱ぎ捨てなかつた衣服とともに、源氏の君の手中に取り残されたので、君は頗る心憂く思しめされ、これも前世からの悪縁のいたす爲めと知られ、甚だ心憂く思はれた。

男も、こころ世をもてしづめ給ふ御心皆亂れて、うつしさまにもあらず、よろづの事をなく、恨み聞え給へど、まことに心づきなしとおほして、御答も聞え給はず。ただ「心地のいと惱ましきを、かからぬ折もあらば聞えてむ」との給へど、盡せぬ御心のほどを言ひつづけ給ふ。さすがにいみじと聞え給ふしもまじるらむ。あらざりしことにはあらねど、改めていと口惜しう思さるれば、懐かしきものから、いとよりの給ひ遁れて、今宵も明けゆく。

○見だに向き給へかし——此方に向けてでもいなさい。  
○ひき寄せ——源氏が藤壺を引きよせなさん。  
○御衣をすべし——藤壺は御衣服を脱ぎすて置いて。  
○心にもあらず——源氏の摺むつもりでもなかつたが、藤壺の御髪の毛が少し衣服と共に、手中にあつたので。  
○宿世のほど——前世からの悪縁のほどを。  
○男もこころ世をもてしづめ——源氏の君も、幾度となく、自ら沈靜にしてゐられた御心もかき亂されて。  
○まことに心づきなしと——藤壺は源氏のしうちを、けしからぬ所爲とおほして。  
○言ひつづけ給ふ——源氏が。  
○さすがにいみじと——藤壺もやはり心の動くこ

ともあるであらう。  
 ○あらざりしこと——源氏に肌をゆるしたことはないでもないが。  
 ○改めていと——そのときのことどもを思ひ出せば、新しく顔る残念であるから。  
 ○懐かしきものから——源氏に心はありながら。

○せめて随ひ聞えざらむ——押したちたることをして、御言葉に背くのも。  
 ○心恥づかしき——源氏の君が。  
 ○ただかばかりにても——このやうに時々物語して、私の聞々たる憂き晴しが出るならば、それに満足して分不相應な心も起しますまい。

源氏の君も、これまで幾度となく御心を沈靜に靜めてゐられた御心も、今はすつかり亂れてしまひ、まつたく正氣を失ひなまつた。さうして萬事のことどもを、泣きながらお恨みになつたが、藤壺は、源氏のしうちをけしからぬ態度であると思つて、御返答さへもなならない。ただ藤壺は、「今は私の氣分が頗るなやましようあるから、お話し申すことも出来ません。けれども氣分のよい時もあるならば、そのときこそ御物語りをいたしませう」と仰せられるが、源氏はそれでも限りなき御心のほどを言ひつづけなされる。かうなつては、藤壺もさすがに、なるほどと御心の動くやうなこともあるだらう。是れまでには源氏との關係もないわけでもないが、その當時のことを思ひ出せば、あらためて残念な強く思しめされるので、源氏の君を懐しく慕ふ心もあるけれども、體裁よく君の言を遁れ避けてしまひなまつた。かうして今晚も徒らに夜は明けて行くのである。

せめて随ひ聞えざらむもかたじけなく、心恥づかしき御けはひなれば、<sup>（源氏）</sup>ただかばかりにても、時々いみじき憂をだに晴け侍りぬべくは、何のおほけなき心も侍らじ」など、たゆめ聞え給ふべし。なのめなる事だに、かやうなるなからひは、あはれなることも添ふなるを、まして類なげなり。

押し立ちてまでも無理に、藤壺の御言葉に背くのも畏れ多いことであるし、源氏自らも心恥づかしと思はれる藤壺の様子であつたから、源氏は「ただかうして時々相違うて物語するだけ

したゆめ——油断させ  
 ○なのめなる事——何でもないつまらぬこと。  
 ○かやうなるなからひ——斯うした無理な慰の中  
 ○二人して云々——王命婦と辨とが、源氏のゐられるのを迷惑な事だと申しあげ。  
 ○なかばはなきやうなる——藤壺も半死の状態  
 ○源氏も氣毒に思しめされたので。  
 ○世の中にあると云々——この世に生きながらへてゐることを、宮がお聞きになるのも恥かしいから、このまま私は死にたいとは思ひます。  
 ○又この世ならぬ罪となり——それも亦來世の罪障となるであらうと思へば、それも出来ず。  
 ○むくつけきまで——藤壺が心におそろしいほどに思ひ込まれた。

でも、私の聞々の情を晴らすことが出来るならば、どうして身分不相應な心を起しませうか——などと、宮の心をして油断させるやうなこともあらう。何でもない一寸とした相思の間でも、かやうな戀中では、物哀れなことがありがちなものであるのを、ましてや比較すべきものもないほどな情緒纏綿たる仲では一層の哀れもあつたやうである。

明けはつれば二人して、いみじき事どもを聞え、宮は、なかばは、なきやうなる御氣色の心苦しければ、<sup>（源氏）</sup>世の中にありと聞し召されむも、いとほづかしければ、やがて亡せ侍りなむも、又この世ならぬ罪となり侍りぬべきこと」など聞えたまふも、むくつけきまでおほし入れり。

「逢ふことのかたきを今日にかぎらずは今幾世をかなげきつつ經む御ほだしにもこそ」と聞え給へば、さすがにうちなげき給ひて、

長き世のうらみを人にのこしてもかつは心をあだとしらなむはかなくいひなさせ給へるさまの、いふよしなき心地すれど、人の思さむ所も、わが御ためも苦しければ、我にもあらで出て給ひぬ。

夜も明け離れてしまつたので、王命婦や辨の二人の女房どもは、源氏のゐられるのは、甚だ

○逢ふことのがたき云々の歌——補欄参照  
○御ほだしにもこそ——私のこの執心は、あなたのほだしともなりませう。

○長き世のうらみ云々の歌——補欄参照。  
○いふよしなき心地すれど——何とも言へないほどなつかしい、戀しいのである。  
○人の思さむ所も——藤壺の思はれることも。  
○我にもあらで——ぼんやりとして出でられた。これ後に心の残るさまである。

困まつたことだと申しあげた。宮も又、半死半生の態で心苦しいさまでゐられたから、源氏の君は、「私がまだこの世の中に生きながらへてゐると、宮が聞しめされるのも、頗る心恥づかしいことでありますから、私もこのままで死にたいと思ひます。けれどもそれも亦、來世の罪業となるだらうと思へば、それもかなはず」などと申し上げられたので、藤壺の宮は、氣味わるいほどに思はれた。源氏の歌、

「逢ふことのかたきを今日にかぎらずは今幾世をかなげきつつ經む  
私のこの熱心は、藤壺の宮のほだしともなりませう」と申されると、宮も流石にうちなげかれて、藤壺の御返歌は、

長き世のうらみを人にのこしてもかつは心をあだとしらなむ  
と。果敢なく言ひなされたさまが、源氏にとつては、何ともいひやうのないほどなつかしく、戀しい心地がするけれども、藤壺の思しめされる所も、自分のためにも、長居するのは心苦しから、源氏は後に心を残しながら、我にもあらぬさまで出でられた。

**補** ○逢ふことのかたきを今日に云々の歌——「かたき」の語には、「難き」と「敵」との二義が含まれてゐる。即ち歌の意は、お逢ひ申すのがむづかしいのは、私の敵であるが、假令、我が身が今日限り失せましても、この敵ぞと思ふ念が絶えないで後世にまでも残るならば、今後幾許の生を更へても歎き暮すであります。なほ玉の小櫛にある本居宣長の説にも「かたきとは、難きに敵をそへたり、返しの下の句、これをうけたりと、拾遺にいへるがごとし。さて敵とは、

逢ふ事の難き敵といふ意をもていへる也。けふにかぎらずとは、上にやがてうせ侍りなんとあるごとく、我命は、今日限りなるべけれども、逢ふ事の難き敵ぞと思ふ。執着の心の、今日に限らず残らばの意なり。上に又此世ならぬ罪となり侍るべきとあるこれ也。四の句は、今日後生々世々也。諸物にかたきを、只難きとのみ見て、敵のさたなきは、次に、御ほだしにもといひ、返歌に、あたとあるなどにはなはず。拾遺の説の中にも、いささかたがへる所まじれり」とある。○長き世のうらみを人に云々の歌——來世までも盡きない恨みを私の身上にお残しになるのもよいでせう。然し又一面に於ては、私が敵であるのではなくして、自分の心が自分の仇であつたのだといふことも、君には御承知下されたいものであります。

○いづこをおもてにかは——何の面目があつてか又藤壺に再び逢はれようかと源氏が思しめさる。○いとほしと思し知るばかり云々——藤壺の方で氣毒と感ぜしめるやうにと考へられて、後朝の御手紙をもさしあげなさない。  
○うち絶えて——源氏の君がすつかりうち絶えての意。  
○人の御心かなと——あ

いづこをおもてにかは又も見え奉らむ。いとほしと思し知るばかりと思して、御文も聞えたまはず。うち絶えて内、春宮にもまゐり給はず、こもりおはして、起き臥しいみじかりける人の御心かなと、人わろく戀しうかなしきに、心魂も失せにけるにや、惱ましうさへおぼさる。物心細く、「なぞや、世にふれば、うさこそまさされ」と思したつには、この女君のいとらうたげにて、あはれにうち頼み聞え給へるを、振り捨てむこといとかたし。

**釋** 源氏はもう、何の面目があつて、藤壺に再び顔を合すことが出来よう。この上は藤壺の方で

まりにひどい藤壺の御心であるかなと。  
 ○人わろく云々——源氏が人の手前も恥づかし。  
 ○なぞや世にふれば——何しにこの憂きことの多い世にかかづらはうや。俗界に居ればこそ心愛けれ、山中にても道世せば心安からうと。なほ補欄を見よ。  
 ○この女君——紫上をさす。  
 ○うち頼み聞え給へる——紫上が源氏の君に信頼してゐるのを。

○宮もその名残云々——藤壺も病氣から後は、容態もふだんのやうでもない。  
 ○かうことさらめきて——源氏がこんなに態とらしく引き籠つてゐて音信もなさないのか。  
 ○御心置きたまはむこといとほしく——源氏があ

源氏に對してはまことにお氣毒なことであつたと思ひなされるまで、後朝の御手紙も差しあげなさらぬ。又、帝や東宮のもとへも参上なさらず、すつかり籠居してゐられる。さうして起き臥しごとに、藤壺はひどく薄情な方であつたかなと、源氏は世人の手前も恥づかしくもあり、戀しくも悲しくもあるので、自分の心や魂も失せてしまつたのか、心悩ましうさへぞ思ひめされる。源氏は何となく物心ほそくなり、「何としてこの憂きこと多い世にかかづらはうや。俗界にゐればこそ心愛いのである。山中にても道世したならば心安いだらう。(古歌にも、世にふればうきこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてむ)」とあるから」と出家のことも考へ立たれるのであるが、それについてもこの紫上が、頗る愛らしいさまで、氣毒なほど源氏の君をたよりとしてゐられるさまを振りすてて、出家隠遁するのも、とても出来ないことである。

○世にふれば云々——古今集雜歌下に「世にふればうきこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてむ」といふ讀み人知らずの歌によつたものである。

宮も、その名残例にもおはしませず。かうことさらめきて籠り居、音づれ給はぬを、命婦などはいとほしがり聞ゆ。宮も、春宮の御ためを思すには、御心置きたまはむこといとほしく、世を味氣なきものに思ひなり給はゞ、直道に思し立つこともやと、さすがに苦しう思さるべし。

藤壺の宮も、御病氣でのぼせなまつてからは、その後の御容態もふだんのやうにはおはしま

まりに藤壺に對して隔心なされては、東宮のためにも氣毒になり。  
 ○世を味氣云々——源氏の君が思すのである。  
 ○直道に思し立つこともや——源氏が一途に思ひ込んで、出家なさることあらうかと。  
 ○かかる事絶えずは——源氏の忍び入られることが。  
 ○いとどしき世に——只さへうるさい世に。  
 ○大后のあるまじきことに云々——弘徽殿が怪しからぬことに言つてゐられる中宮の位もさらうかと。  
 ○院の思しのためはせしさまの——藤壺が、桐壺院の寵愛盛んなりし昔時のことを追想すると。  
 ○戚夫人の見けむめのやうにこそ云々——戚夫人は漢高祖の夫人で、高祖の崩じた後は、呂太后に斬まれ、手足を断たれ、

さす御不例でゐられる。源氏の君は、かくことさらに籠居してばかりわらつしやつて、少しも音づれなさらぬのを、命婦どもは氣毒に思つてゐる。藤壺の宮も、東宮のためを思しめされるには、源氏があまりに私に對して隔心をなされては、東宮のためにも氣毒であり、又もしやこれがために、源氏の君は世間をつまらないものと思ひなされるやうなことがあらば、一途に發心して出家隠遁なさることもあらうかと、藤壺は流石に心苦しうおぼさるやうである。

「かかる事絶えずは、いとどしき世に、うき名さへもり出てなむ。大后の、あるまじきことにの給ふなる、位をも去りなむ」と、やうくおぼしなる。院の思しのためはせしさまの、なのめならざりしを思し出づるにも、よろづの事ありしにもあらず、變り行く世にこそあめれ。戚夫人の見けむ、めのやうにこそあらずとも、必ず人笑へなる事は、ありぬべき身にこそあめれなど、疎ましう過し難う思さるれば、背きなむことを思し取るに、春宮見奉らて、おもがはりせむことあはれに思さるれば、忍びやかにてまゐり給へり。

藤壺は、「源氏の君が斯やうに忍び入られることが今後絶えないならば、只さへうるさいこの世の中では、憂き名の世に漏れ出づるであらう。兼ねて前から、弘徽殿の大后が、怪しからぬ



眼をくじり、側に置かれて辱められた。その戚夫人の見たやうな愛目のやうでなくとも、  
○疎ましく過し難う——世の中もうとましく、このままでは過しがたく思しめざる。  
○背きなむことを——出家隠遁することを。  
○春宮見奉らで云々——東宮に逢はないで、このまま自分の姿が變つて行くのを。

賢木

やうに思つてゐられる、私の中宮の位も去つてしまはうか」と、だん／＼と決心あそばされる。過ぎし昔、故桐壺院が在世中に、いろ／＼と親切に仰せられた御寵愛のほども並大抵でなかつたことどもを追想なさるについても、浮世の萬事は昔とすつかり移り變つて行く世であるやうだ。その昔漢の高祖の戚夫人が逢ひなされた愛き目ではないとしても、必ず世人の物笑への種子となるやうな事は、この私の身には何時かはあるのであらうなどと思しめされる。藤壺はいよ／＼世の中も疎ましくなり、このままでは人生は過し難いものだと思はれたから、いざ出家隠遁しようと思心なされるについても、今一度東宮に御目にかからないで、この姿を尼の姿に變へてしまふのも、悲しく思しめされたので、こつそりと忍びながら東宮のもとに参内なされた。

三四八

○戚夫人——史記呂后本紀第九に「太后遂斷戚夫人手足、去眼輝耳、飲瘡藥、使居廁中、命曰人彘、居數日、召孝惠帝、觀人彘、孝惠見問、迺知其戚夫人、迺大哭、因病、歲餘不能起、使人請太后曰、此非人所爲云々」とある。又、花鳥餘情にも、「戚夫人は漢高祖の妾、趙王如意の母也。惠帝の太子にて有しを立かへんとせしかどもつゐにその事ならずして高祖は崩じ給ぬ。惠帝位につき給てのち、呂太后かのむくひせんとて、戚夫人の眼をぬきて人彘となづけて、かはやの中におしこめておかれし事のありしかば見けんめのやうにはあらずとも藤壺の中宮の大きき御心をおそれ給ふ御詞也」と、

○さらぬ事だに思しよらぬ事なく——源氏は一寸した事でも細心に氣をつけて御世話なさるのが。  
○御送にも——中宮行啓の御見送りに源氏はでかけられない。  
○おほかたの御訪問——普通の音問は變りがないけれど。  
○むげに思し屈しにける——源氏が非常に屈托してゐられると。

○宮は——東宮冷泉院のこと。  
○珍らしく嬉しと——藤壺を見て珍らしく美しと思はれる。  
○悲しと見奉り——藤壺が。  
○思し立つすちは——出家することは出来にくさうであるが。  
○出で入り給ふにも——宮中に入出入するにもさま

大將の君は、さらぬ事だに思しよらぬ事なく、仕うまつり給ふを、御心地惱ましきにつけて、御送にも参りたまはず。おほかたの御訪問は同じやうなれど、むげに思し屈しにけると、心しるどちはいとほしがり聞ゆ。

大將源氏の君は、このやうな中宮行啓のことでも、何事にも細心に氣をつけて、お世話なさるのであつた。それを今度は少し氣分が悪いといふのを口實として、御送りにでかけられない。普通一般の音づれば變りがなく、何時と同じやうにしてゐられるが、源氏の君は近頃非常に屈托してゐられると、そのわけを知つてゐる女房同志は氣毒なことに御同情申しあげた。

宮はいみじう美しうおとなび給ひて、珍らしう嬉しと思して、むつれきこえ給ふを、悲しと見奉り給ふにも、思し立つすちはいと難げなれど、内わたりを見給ふにつけても、世の有様あはれにはかなく、移り變ることのみ多かり。大後の御心もいと煩はしくて、出で入り給ふにもはしたなく、事に觸れて苦しければ、宮の御ためにも危く、忌々しうよろづにつけて思しみだれて、御覽せて久しからむほどに、容貌の異様にて、うたてげに變り

賢木

三四九

て侍らば、いかが思さるべき」と聞え給へば、御顔をうちまもり給ひて、式部がやうにや。いかでかさはなり給はむ」と、笑みての給ふ。

東宮冷泉院は大へん美しいさまに御成人あそばされ、母藤壺の宮の珍らしい御参内を、心細く思ひ、なつかしげに睦れなさるのを、母宮がご覽になつては、出家の發心をなされたことも、子の愛に引かれて出来がたいやうである。けれども宮中をご覽になるについても、世の中の有様はあはれに果敢なくも移り變ることばかりが多い。大后弘徽殿の御心も頗る氣むづかしく、出入りなさるについてもきまりが悪くて、何事についても心苦しいのであつた。そのため、このままでゐては、東宮のためにもよろしくなく、萬事についていましく思ひ亂れて、藤壺「私が久しい間、東宮にお目にかからないでゐるうちに、私の姿が風がはりな、厭なさまに變つてしまつたならば、これ尼となることをほのめかす。東宮にはどのやうに思ひめされますか」と申されると、東宮は藤壺の顔をちつとご覽あそばされて、東宮は「姿醜い老女房式部のやうになるといふのか、どうしてそのやうな姿におなりなさることがあらうか」と、笑ひながら仰せられる。

いふかひなくあはれにて、「それは老いて侍れば、醜きぞ。さはあらで、髪をそれよりも短くて、黒き衣などを着て、夜居の僧のやうになり侍らむと

り悪く、何かについて心づらいので。  
○宮の御ためにも——東宮のためにも。  
○御覽で久しからむ——永く私をご覽なさらない中に、もしや私の姿が尼などの變な厭な姿となりましたらば、東宮には何とお考へになりますか。  
○式部がやうにや——姿の醜い老女房のやうにか。

○いふかひなく——言ひがひもなく物哀れで。  
○夜居の僧——帝や后の御寮所の次に控へてゐる

形夜加持する僧。  
○いとど久しかるべき——今よりはよいよ、間があるであらう。  
○背きたまへる——横をむいてゐられる。  
○まみ懐しげに匂ひたまへるさま——目つきのやさしくほのかに潤ひのあるさまは、御成人なさるにつれて。  
○ただかの御顔を云々——余く源氏の顔をとつてつけたやうに似てゐられる。

○御齒の少し朽ちて——御齒のさま。  
○女にて——東宮を女として見たいやうである。  
○いとかうしもおぼえ給へる——まことにかくまで、源氏に似てゐらつしやるのが辛氣なことだと。  
○玉の瑕——似てゐるのが玉の瑕といふ感じがする。  
○世のわづらはしき——

すれば、見奉らむ事も、いとど久しかるべきぞ」とて泣き給へば、まめだちて、「久しうおはせねば、戀しきものを」とて、涙のおつれば、恥かしと思ひ、さすがに背きたまへる、御髪はゆらゆらと清らにて、まみの懐しげに匂ひたまへるさま、おとなび給ふままに、ただかの御顔をねきすべ給へり。御齒の少し朽ちて、口の内黒みて、笑みたまへる薫美くしきは、女にて見奉らまほしう清らなり。いとかうしもおぼえ給へるこそ心憂けれど、玉の瑕に思さるるも、世のわづらはしきの、空恐ろしう覺え給ふなりけり。

言ふかひもないほど物哀れになつて、藤壺は、「それは年老いてゐるから醜いのであります。私のいふ容貌の異様云々といふのは、髪は彼の式部よりは一層短くして、黒い着物などを着て、夜居の僧のやうにならうとするのだから、東宮にお目にかかることも、今後は一層遠のくことでありませうぞ」といひながら、しく／＼と泣きなさるので、東宮は眞面目になつて、「久しくお目にかからないと戀しく思ひますのに、(そんなことはなさるな)」といひながら、涙が自然に落ちるので、さすがに恥づかしいと思ひめされて横をお向きなされた。その御髪のゆら／＼と美しく、御目つきのなつかしげに、ほんのりと美しいつやのある有様、何れも御成人なさるにつれて、すつかり源氏の君のお顔をとおつてつけたやうに似てゐらつしやる。御齒は少し虫ばん

世間の口のうるささが。

賢木

三五二

で、口の内の黒い所を見せて微笑なざる御有様の美しさは、東宮を若い女として見たてまつりたいほど美しくゐられる。そこで藤壺は、東宮はかくまで源氏の君に似てゐらつしやるのが心配である、この似てゐられることばかりを玉の瑕のやうに思つてゐられるのも、世間の口がうるさいから、ありし日の源氏との関係を何となく恐ろしく思し召すがためであつた。

**補** ○髪はそれより短くて——當時代に於ける出家の僧は、多く下げ尼といつて、長い髪を切り下げてゐたのである。今日のやうにすつかり剃髪するのではない。

**評** 源氏は桐壺院崩御後昔に變るさまを、何とも思つてゐられないが、藤壺はさすが女性であらせられるだけあつて、戚夫人に比べて、昔にかはる今の境遇を物ごとく悲しんでゐられる。

大將の君は、宮をいと戀しう思ひ聞え給へど、あさましき御心のほどを、時々思ひ知るさまにも見せ奉らむと、念じつつ過したまふに、人わろくつれく、に思さるれば、秋の野も見給ひがてら、雲林院にまうて給へり。故母御息所の御兄の律師の籠りたまへる坊にて、法文など讀み、行せむと思して、二三日おはするに、あはれなること多かり。

**評** 源氏大將は、東宮を頗る戀しいと思しなされるけれども、その母藤壺の宮があきれるほど氣強い御心でゐられるのを、時々あちらで感づくやうに、こちらでも無情なさまして見せようと、

○宮を——東宮を。  
○あさましき御心のほどを——藤壺のあきれるほど無情でゐられる氣強さを、時々あちらで思ひ知るやうに、こちらでも無情な態度を見せてやらうと。  
○念じつつ——東宮を戀ひて行きたい心を我慢して。  
○人わろく——人の手前も體裁わるく。  
○雲林院——京の北郊紫野にある寺。

○故母御息所——桐壺更衣。  
○坊——雲林院中の僧坊。  
○法文——經の文。  
○行せむ——佛法の勤行。

○故郷——源氏の我が家。  
○才——學識をいふ。  
○論議せさせて——佛教上のことを議論せさせて。  
○思しあかしても——悟つても。

賢木

三五三

東宮がなつかしくて行きたいが、それを我慢しながら日を送つてゐられると、かうして引籠つてばかりゐるのも、人の手前も恥づかしいと思しめされ、秋の野の景色を見がてら、京の北郊紫野にある雲林院に參詣なされた。さうして今は亡くなられた桐壺の更衣の御兄にあたる、何某律師の參籠してゐる僧坊で、經文を讀誦したり、佛前の勤行をしようと思ひなさつて、二三日御逗留あそばす間に、感深きことが多かつた。

**補** ○大將の君は、宮をいと戀しう云々——この「宮を」を、舊來の古註には藤壺の宮として解いてゐるが、これは本居宣長が言つてゐるやうに、東宮をさすものである。玉の小櫛にも「宮は東宮也、源氏君の、東宮へ參り給はねば、藤壺の、いかがおほしめす故に、然思はせ奉らんために、戀しけれどねんじて、參り給はぬ也、此宮といへる、もし藤壺の御事ならんには、つたなき文也、藤壺ならば、宮をといふこと、なくてよろし」と言つてある。○雲林院——僧契沖の源注拾遺に「今按常康親王の僧正偏昭にゆづりたまへるを寺として、元慶寺の末寺とし給へり。委三代實錄に見えたり」と。

紅葉のやうく色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたるなど見給ひつ、故郷も忘れぬべくおぼさる。法師ばらの才あるかぎり召し出でて、論議せさせて聞し召させたまふ。所がらに、いとど世の中の常なきを思しあかしても、なほ「うき人しもぞ」と思し出でらるる。

のうき人しもぞ——藤壺をさす。新古今集戀四、よみ人知らずの歌として「天の戸を押し明けがたの月みればうき人しもぞ戀しかりける」とある歌の句を引いたものである。

○おしあけ方の——「天の戸をおしあけ方の月見ればうき人しもぞこひしかりける」の歌の句をとつたもの。  
○閻伽——佛に奉る水。梵語。  
○からくと鳴し——閻伽を奉るとき、花血を洗ひ、からくと鳴らす作

紅葉がいよ／＼色づいて来て、秋の野原の極めて美しい景色をご覽になりながら、御自分の家のこと忘れられさうに思しめさる。法師どもの中で學識高いものどもをお呼びあつめになり、佛敎上のごともをお互に論評せしめてお聞きになる。所がらとて、一層世の中の無常變轉極りなきを思しながら夜をあかしなすつても、やはり（古歌に、天の戸を押し明けがたの月みればうき人しもぞ戀しかりける。といふやうに）心憂く思つてゐる藤壺の宮のことが「思ひ出される。

補 ○秋の野のいとなまめきたる——この句、古今集俳諧歌に僧正遍昭の歌として、「秋の野になまめきたるをみなへしあなながし花も一とき」あるのによつて書いたもの。○論議——花鳥餘情には「つがひろんぎ、番論議也」とある。これ河内本の句にて、青表紙にはただ「ろんぎ」とある。

おしあけ方の月影に、法師ばらの閻伽奉るとて、からくと鳴しつ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折りちらしたるもはかなけれど、このかたのいとなみは、この世もつれ／＼ならず、後の世はたたのもしげなり。さも味氣なき身をもて惱むかななど、思しつゞけたまふ。律師のいと尊き聲にて、念佛衆生接取不捨とうち述べて、行ひ給へるがいとやらやましなければ、な

ぞやと思しなるに、まづ姫君の心にかかりて、思ひ出でられ給ふぞ、いとわろき御心なるや。

法があるといふ。  
○このかたのいとなみは——佛道の方面の修行はこの世でも寂寞を感じないし、後生もまたたよりとなる。  
○さも味氣なき身——我は彼等と異つて、つまらない身で。  
○もて惱む——もてあますこと。  
○念佛衆生接取不捨——觀無量壽經の文句。如來の光明はあまねく十方世界を照し、念佛の衆生を攝取して救ひ、決して捨てなからぬ彌陀の本願をいふ。  
○なぞやと思し——なぜ自分は思ひ切つて出家が出来ないのかと。  
○姫君——紫上。

○例ならぬ日數も——珍らしくも紫上と相離れて

「天の戸をおしあけ方の月見れば云々」といふ歌のやうに、夜もあけ方の月影に、法師どもが佛に閻伽を奉るとて、花血を洗つて、又からくと音をたてながら、菊の花や、濃き薄きさま／＼の紅葉などを折り散らしたさまは、物はないものである。然し、かうした佛に仕へる方面のことは、この現世でもつれ／＼の慰めともなり、後生のためにもたよりとなるさまである。さてそれについても、我は彼等と異つて、このつまらない身を、世にかかづらつて持て餘してゐることかななどと、あれこれと思ひつづけなされる。律師はまことに尊嚴な音聲で、「念佛衆生接取不捨」と、觀無量壽經の文句を讀誦して、御修行あそばされるのが、本當に羨しいので、源氏の君は、自分はなぜにまあ、思切つて出家する元氣が無いのかと思しめさるについても、まづ二條院の西の對屋にゐられる紫上の身の上が心配になつて、そのことを思し出だされるとは、さて／＼まあ、わるい御心でゐられるかな。

補 ○からくと鳴しつ——このことにつき宣長は、玉の小櫛に、「閻伽奉る時に、花血をすすぎて、重ねて、からくとならず作法ありとぞ、ただおのづからなる音にはあらず」とあるはよろし。

例ならぬ日數も、おぼつかなくのみ思さるれば、御文ばかりぞ繁う聞えた

ゐられる日数も久しくなつたので、紫上のごとも、どうかと心配になつて、  
○行き離れぬべしや—  
浮世から超越して出家ができるかと。  
○聞きさしたる事—教義のことで聞きかけたことがありますから。  
○やすらひ侍るほどをいかに—家に歸るのも見合せてゐるが、この間の御様子はいかがでありますか。  
○陸奥紙—檀紙。  
○あさぢふの露の云々の歌—補欄参照。  
○女君—紫上。  
○風吹けばまづぞ云々の歌—補欄参照。

賢木

まふめる。行き離れぬべしやと、試み侍る道なれど、徒然もなぐさめがたう、心ほそさまさりてなむ。聞きさしたる事ありて、やすらひ侍るほどをいかに」など、陸奥紙に、うちとけ書き給へるさへぞめでたき。

あさぢふの露のやどりに君をおきてよものあらしぞしづ心なきなど細やかなるに、女君もうち泣き給ひぬ。御かへし白き色紙に、

風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅がつゆにかかるささぎにとあり。

源氏の君は、珍らしくも紫上と相離れてゐられることも、随分久しい日数がたつたので、源氏は御消息だけは、たび／＼繁く送られるやうである。源氏の君からの消息に「私は浮世から超越して、出家してみようと試みてゐるのでありますが、つれ／＼の退屈さへも慰めることがむづかしく、ますます心細くなりますので、とても出家などは出来ないやうに思はれます。教義のことで聞きかけたことがありますから、家に歸るのも見合せてゐますが、この頃の御様子はいかがでありますか」など、檀紙にうちとけたさまで走り書きなまつたのは見事なものである。さて源氏の御歌、

あさぢふの露のやどりに君をおきてよものあらしぞしづ心なき

などと、こまやかに書きつらねてあるので、紫上も感極まつて泣きなまつた。御返事は白色紙に、紫上の歌が、

風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅がつゆにかかるささぎにとあり

あさぢふの露のやどり云々の歌—浮世の果敢なさを思ふと、私の家とても、浅茅生に露がやどつたやうな、果敢ないものと思はれます。さうした淋しい所にあなた紫上を残し置いてここに長い逗留をしながら、四方から吹きくる風を聞くについても、まづあなたが心配になつて、私は安心してゐられません。○風吹けばまづぞみだるる云々の歌—色も變つて紅葉した浅茅の露にかかつてゐる蜘蛛の糸は、風が吹きますと先づ最初に亂れます。そのやうにあなた源氏の君の御心も、色かはつた浅茅の露のやうになられた君の御心をたよりとしてゐます妾のことですからして、何事かがあるとすぐに心が亂れて心配になります。

あさぢふの云々の歌、並に、風吹けば云々の歌は、古來の註どもには、何れも源氏の君の權勢が、今やすつかり昨の如くにならぬさまをなげいたものと言つてゐるが、それは正しくないと思ふ。ここは本居宣長が玉の小櫛に言つてゐるやうに、あさぢふの云々の歌は、「初二句に、よものあらしを合せて、上に、所からいと世の中をつねなきをおぼしなして、とある心をもて見べし」といひ、風吹けば云々の歌は、「色かはるは、源氏君の心のかはれるよし也、下に色かはると有しも云々といへるにてしるべし、注、ここもかしこもたがへり、ささぎには、ささ

賢木

がにの糸也、然らざれば、みだるといふに縁なし」とあるをよしとす。

○御手はいとをかしよう—  
—紫上の筆蹟は頗る立派  
になりなさるばかりで、  
○何事につけても—何  
の藝についても、拙から  
ず、立派に育てたことで  
あると源氏が考へられ  
る。

「御手はいとをかしようのみなりまさるものかな」と、ひとりごちて、うつ  
くしとほほゑみたまふ。常に書きかはし給へば、我が御手にいとよく似て、  
今少しなまめかしよう、女しき所書き添へたまへり。何事につけてもけしう  
はあらず、生ふしたたりかしとおぼす。

源氏は紫上の筆蹟を見て、「御筆蹟もすこぶる立派になりなさることであるわい」と、獨り言  
して、愛らしいとほほ笑みてご覽になる。源氏は常に彼の紫上と御文通をなさるので、女君の  
筆力が大へんよく源氏の君のものに似通うてきた。さうして今少し艶麗な趣きがあつて、女ら  
しいところをもつき加へられた。何の藝能についても拙なからず、立派になるやうにお育て申  
したと、源氏は考へられる。

○ふきかふ風も—加茂  
の齋院のゐられるところ  
と、紫野の雲林院とは頗  
るほど近い間であるか  
ら。  
○齋院に聞え—源氏は  
朝顔の齋院にも音信をな  
さつた。

ふきかふ風も近きほどにて、齋院にも聞えたまひけり。中將の君に、「かく  
旅の空になむ、物思ひにあくがれにけるを、思し知るにもあらずかし」な  
ど恨みたまひて、御前には、  
「かけまくもかしこけれどもそのかみの秋おもほゆる木綿だすきかな  
かけまくもかしこけれどもそのかみの秋おもほゆる木綿だすきかな

○中將の宮に—朝顔の  
齋院の侍女。  
○かく旅の空になむ云々  
—朝顔の君が戀しさに  
かくまで心あこがれて迷  
ひ出たのを、御察し下  
さらないのでありませ  
う。

昔を今にと思ひ給ふにもかひなく、とり返されむものやうに」と、なれ  
なれしげに、唐の淺緑の紙に、榊に木綿つけなど、かうくしうしなして  
參らせ給ふ。御かへり中將、「紛るることなくて、來しかたの事を思ひたま  
へ出づるつれづれのままには、思ひやり聞えさする事多く侍れど、かひな  
くのみなむ」と、少し心とどめておほかり。

○かけまくもかしこ云々  
の歌—補欄参照。  
○昔を今にと思ひ—朝  
顔の君が齋院でゐられる  
のが、昔のやうな普通の  
人であられることを、今  
一度見たいものである。  
伊勢物語に「古の賤のを  
だまきくりかへし昔を今  
になすよしもがな」の歌  
による。

源氏の君が只今ゐられる紫野の雲林院は、加茂の齋院のゐられるところと、吹き通ふ風もほ  
ど近い所であつたので、源氏の君は、齋院のもとへ御消息があつた。彼の齋院の侍女である中  
將の君には、源氏が、「私は齋院朝顔の君がなつかしくて、かく旅の空にまであこがれてまし  
た。このやうな私の心をあなたはお察し下さるでありませうね」など怨みを述べたおたよりが  
あり、さて齋院の御前へは、

○とり返されむもの—  
「とりかへすものにもが  
なや世の中をありしなが  
らのわが身と思はん」と  
いふ古歌の意。  
○紛ることなく云々—  
—齋院は他に氣のまぎれ  
る事もなく、過ぎし昔の  
ことどもを追想なさるつ

かけまくもかしこけれどもそのかみの秋おもほゆる木綿だすきかな  
古歌の「古のしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」といふ通り、朝顔の君の昔  
の姿を今一度見たいものでありますが、それもかひなく、ただ取り返しをつくものやうに思  
ひ悩むことであります」と、なれづれのままに、唐の薄緑の紙に書きしたため、木綿を榊に  
つけ、その神々しいのに御消息をもつけてお送りになる。この御返事は、中將から來たのには、  
「齋院は他に氣のまぎれる事もなく、過ぎし昔のことどもを追想なさるつれづれのとときには、

れんゝのときには。  
○思ひやり聞え——源氏の君のことを思ひだされることも多いが。

○御前のは——朝顔の君の御返事は。  
○そのかみや云々の歌——補欄参照。  
○御手こまやか云々——御筆蹟は纖麗であるとは言へないが。  
○らう／＼しう草など——巧みなもので草書などなか／＼雅致がある。  
○まして朝顔も云々——朝顔も一層年と共に美しくなりなかつたであらうと。「朝顔」には單に「顔」の意もある。

○おそろしや——神に對して恐しい。  
○野宮のあはれなりしこと——あの六條御息所を野宮に訪ねたときの情趣深かつたことを思ひ出し。  
○怪しうやうのもの——御息所にしても、齋院にしても、妙に同じさまで神の憚りのために思ひをとげることが出来ない。  
○さもありぬべかりし年頃——朝顔を手に入れることの出来た時分は、のんきに捨て置いて。  
○院も——朝顔の齋院も。  
○えしももてはなれ云々

源氏の君のことを追想なさることも多くありますが、思ふかひもないことで」と、少し心とどめて澤山に書いてある。

○かけまくもかしこけれ云々の歌——神にお仕へしてゐられる齋院にあれやこれやと申しあげるのも、畏れ多いのでありますが、まだ普通の御身分でゐられたときに、あなたと交通をいたしてゐましたあの當時の秋が懐しく思ひ出だされますの意。木綿だすきかなは、「かけまくも」の「かけ」の縁語に用ひたのに過ぎない。

御前のは、木綿のかたはしに、

「そのかみやいかがなりしゆふだすき心にかけて忍ぶらむゆゑ

近き世に」とぞある。御手こまやかにはあらねど、らう／＼じう、草などをかしうなりにけり。まして、朝顔もねびまさり給ふらむかし、と思ひ遣るもただならず。

齋院からの御返事には、木綿の一端に、

そのかみやいかがなりしゆふだすき心にかけて忍ぶらむゆゑ

近き世には、何事があつたのでせう、私は少しも存じません」と書いてある。その筆蹟は纖麗なものではないが、巧みなもので、草書體で雅致あるやうに書いてある。これではましてや、朝顔の君の御容貌は、年をとりなさるにつれて、一層美しくおなりあそばされるであらうと、

御推量になるについても、ただならぬ氣でゐられる。

○そのかみやいかが云々の歌——あなたは心にかけてありし昔の秋のことどもを思ひ出すと仰せられますが、その當時にはどのやうなことがあつたのでせうか、私には何の覺えもございませぬから、わかりかねますの意。木綿だすきは、やはり「かけ」の縁語。○思ひ遣るもただならず——鈴木朗曰く、「遣る」の「る」は「り」の誤かと。

おそろしや。あはれこの頃ぞかしと。野宮のあはれなりしことと思し出て、怪しうやうのものと、神うらめしう思さるる御癖のみぐるしきぞかし。わりなう思さば、さもありぬべかりし年頃は、長閑に過したまひて、今は悔しう思さるべかめるも、あやしき御心なりや。院も、かくなべてならぬ御心ばへを、見知り聞え給へれば、たまさかなる御返などは、えしももてはなれ聞え給ふまじかめり。少しあいなき事なりかし。

源氏は「神に對しては恐ろしいことであるが、ああ、恰度、去年の今頃であつた」と、彼の野宮に六條御息所をおたづねになつたことどもを思ひ出だされて、不思議にも同じやうに、御息所にしても、齋院朝顔の君にしても、同じく神の憚りで思ふ心をとげられないと、神をうらめしく思つてゐられる源氏の君の御性質は見苦しいものである。若し君が、分別なきほど思つ

—爲さないでゐるに忍びないので、返事をされるやうである。  
○少しあいなき—少しへんに未練なやうであるぞ。

○六十卷—天台の六十卷。即ち玄義、文句、止観、尺籤、疏記、弘決、各々十卷である。  
○文讀みたまひ—源氏が讀まれる。  
○おぼつかなき所々—不審の箇所。  
○山寺にはいみじき云々—源氏の君の御逗留なさるのは、山寺の光榮であつて、我々僧の勤行の功德なりと。

てゐられるならば、朝顔の君を手に入れられるときがあつたから、そのとき手に入れなさればよいのに、その手に入れられる恰度よい年頃は、ゆつたりとした心持で過しなされ、齋院とられた今となつて、どうにもならぬときに、悔しく思つてゐられるとは、不思議な御心でゐられる。齋院の方でも、源氏の普通とは變つた御心のほどを見知つてゐられるから、たまさかな御文通などは、爲さないでゐるに忍びないので、とき／＼おたよりをなされたやうだ。これは少しへんに未練があるさまだ。

補 ○やうのもの—源注餘滴に、「眞淵云、やうのものは、式などに方つものの様器とあり、それは物の下形を作って、それがやうに作らせなどするより出で何にても相似たることを様の物といふなるべし。同様のものてふ意とのみいへるはことたらず」と。

六十卷といふ文讀みたまひ、おぼつかなき所々、解かせなどしておはしませすを、山寺にはいみじき光行ひ出し奉れりと、佛の御面目ありと、あやし歸らむ事物憂かりぬべけれど、人ひとりの御事思しやるがほだしなれば、久しうもえおはしまさで、寺には御誦經いかめしうせさせ給ふ。

源氏の君は天台の六十卷といふ書をお讀みになつて、意義の不審なところ／＼を僧どもに説明せさせてゐられるのを、山寺の方では、光る源氏の君の御逗留を、大へんな光榮となし、こ

○人ひとりの御事—紫上。  
○御誦經—大法會をさす。





れも要するに我々僧どもの勲行の功德によるものである、佛様にとつても大なる名譽であるとして、位低い法師どもまでが喜びあつてゐた。源氏の君はかうした森閑な山寺で、世の中のこどもをつく／＼と考へなざると、このまゝここにゐて佛道を修行したいやうになつて、再び俗界の騒しいところに歸るのも物憂く思はれるのであるが、この紫上一人の身を心配するのが世のほだしとなつて、久しくこの寺で御修行もなされない。やがて大法會をその寺で盛大に修せられた。

あるべきかぎり上下の僧ども、そのわたりの山賤まで物賜び、尊きことのかぎりを盡して出でたまふ。見奉り送るとして、このもかものにあやしきしばふる人ども集り居て、涙をおとしつつ見奉る。黒き御車の内にて、藤の御袂にやつれ給へれば、ことに見え給はねど、ほのかなる御有様を、世になく思ひ聞ゆべかめり。

ありだけの上下の僧侶どもから、その附近にゐる山中の賤しき人々に至るまで御布施をなされ、尊きことのありだけを盡して出でられた。源氏の君の歸京なさるのを見送るとして、こちらでもあちらでも賤しき老人どもが集り、感涙を流して見送り申した。源氏の君は、黒く飾られた御車の内で、喪服にやつしてゐられるから、格別に目立つては見えなけれども、うすら／＼と見奉る御様子、世に又とない尊い姿と思つて眺めてゐたやうである。

○しばふる人——しばふる人、即ち嘆ずる人で、老人をさす。なほ、柴刈る人、柴賣る人、鎌古人、柴古人、嘆き人などの異説がある。  
○黒き御車——忌服中のことであるからして、裝飾が黒で施したのである。  
○藤の御袂——藤衣のこととて喪服をいふ。  
○ほのかなる御有様——よくも見えない御有様。

○しばふる人——一本には「しばふるひ人」とある。

女君は、日頃のほどに、ねびまさり給へる心地して、いといたうしづまり給ひて、世の中いかがあらむと思へる氣色の、心苦しうあはれに覺えたまへば、あいなき心の、さまざま亂るるやしむ。「色かはる」とありしもらうたう覺えて、常より殊に語らひ聞え給ふ。山づとにもたせ給へりし紅葉、御前に御覽じくらぶれば、殊に染めましける露の心も見過しがたう、覺束なさも人わろきまで覺え給へば、ただ大方にて宮に參らせ給ふ。

○女君——紫上。  
○日頃のほどに——暫くの間。  
○世の中いかがあらむ——落魄の境遇にある源氏の君の、今後の地位はどうなるだらうかと紫上が心配なさるのである。  
○あいなき心の——源氏の藤壺のことを思つて思ひ亂れてゐられる分別なき心をいふ。  
○色かはる——前に紫上がよまれた、風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅がつゆにかかるささがにの歌をさす。  
○御前のに——庭前に。  
○殊に染めましける露の心も——露が心ありて、特別に濃く染めた勞をも無しがたく。  
○覺束なさも人わろきまで——藤壺への御無沙汰も餘り人目につくほどで

紫上は暫らくの間に、美しく御成人なされたやうな心地がして、以前よりはすつと沈着になりなされた。さうして院崩御後落魄の境遇になりなされた源氏の君は、今後どのやうにおなりあそばされるだらうと、心配してゐられる紫上の様子も、源氏の君にとつては、まことに氣苦しいほど可愛さうに思はれた。まして、われ源氏が、藤壺と分別なき戀に、心もいろ／＼と思ひ亂れてゐるのが、目だつて分らないだらうか、又紫上が「風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅がつゆにかかるささがに」と詠んだのも、愛らしく思はれて、ふだんよりは格別睦しいさまに物語りあそばされた。山寺から土産として持つて來られた紅葉を、二條院の庭前にある紅葉に見比べると、目立つて色が濃い。かう濃く染めなした山間の露のまごころも見捨てられず、

あつたから、ただ何となくこの紅葉に手紙をつけて藤壺に送られる。

○入らせ給ひにけるを——藤壺が東宮の見舞に参内なされたといふが。  
○宮の間のこと——藤壺と東宮との間柄の様子。  
○行ひも——雲林院にての勤行をも。  
○心ならずやとて——勤行の豫定を果さないでゐるのも不本意なことだと思つて。  
○錦くらう——古今集秋下、貫之の歌に「みる人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり」の意。一人見るのもつまらないとのこと。

○折よくて——御機嫌のよいときに御覽なさい。  
○御目とまるに——藤壺の。  
○例の聊なるもの——小さく引き結んだ手紙。  
○御顔の色もうつろひて——藤壺の顔色もかはつて。  
○なほかかる心の——やはら源氏にこんな嫌な御心の絶えないのは厭なことだ。これ藤壺の心。  
○大方のことども云々——通常の用事で東宮に關したことであるならば、藤壺は源氏を力としてゐるやうに、眞面目な返事をしてくれるがと、源氏の心である。  
○さも心かしく云々——戀文のことになると、頗る用心深く何時も逃げたてしうことであるわい

賢木

又常に氣にしてゐる藤壺への御無沙汰もあまり甚だしく、人の手前も體裁わるいやうであつたから、ただ何といふこともなく、この山づとの紅葉に手紙をつけて、中宮藤壺のもとに送られた。

三六六

○世の中いかがあらむ——湖月抄師説に「此所の心には世の中いかがあらんとおぼせば、物思はしき氣色なるを、源は藤壺などの事を思ひみだるるあいなき御心のある故に、もし外にもあらはれけんを、紫の見しりてうらみ玉ふにやと心くるしう哀におぼして常よりも懇にかたらひ玉ふ也」とある。なほ一説に「世」を男女間の情としてゐるが、それにも意味が通ずる。

命婦のもとに、「入らせ給ひにけるを、珍らしき事とうけたまはるに、宮の間のこと、おぼつかなくなり侍りにければ、しづ心なく思ひ給へながら、行ひも勤めむと思ひ立ち侍りし日數を、心ならずやとてなむ、日頃になり侍りける。紅葉は一人見侍るに、錦くらう思ひ給ふればなむ、折よくて御覽じさせ給へ」などあり。

命婦のもとに、源氏の君から御消息がある。それには、「藤壺の中宮には、珍らしくも東宮を御見舞に参内なされたと承つてゐますが、藤壺の宮と、東宮との間柄の子もどうかと心に懸けてゐましたから、心も落着かず思つてゐました。けれども雲林院に佛道修行をしようと思つた日數だけを果さないで歸るのも不本意なことだと思つて、遂に數日の逗留になりました。

山づとにと持ち歸りました紅葉も私一人で見つてゐましては、切角の美しい錦のやうな紅葉も夜の錦で、黒く映ないものでありますから、今度この紅葉をお贈りいたしますゆゑ、然るべき時に、藤壺に御目にかけて「ただきたい」などと書いてあつた。

實にいみじき枝どもなれば、御目とまるに、例の聊なるものありけり。人々見奉るに、御顔の色もうつろひて、「なほかかる心の絶え給はぬこそいと」とまじしけれ。あたたら、思ひやり深うものし給ふ人の、ゆくりなく、かやうなる事をりん、ませ給ふを、人あやしと見るらむかし」と、心づきなうおほされて、瓶にささせて、廂の柱のもとにおしやらせたまひつ。大方のことども、宮の御事に觸れたる事などは、うち頼めるさまに、すくよかなる御返ばかり聞えたまへるを、さも心かしく、盡せずもとうらめしう見給へど、何事も後見聞えならひ給ひにたれば、人あやしと見咎めもこそすれと思して、まかて給ふべき日参り給へり。

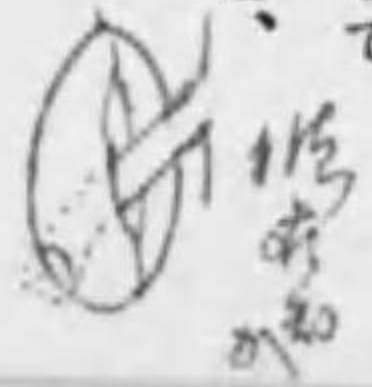
なるほど、源氏の君から奉られた紅葉は立派な枝であつたから、藤壺の宮はよく氣をつけてご覽になつた。するといつものやうに、極く小さな手紙が結びつけてあつた。侍女どもも見て

賢木

三六七

と。  
 ○何事も後見聞えたまへる——何事についても御世話申して来たのだからあまり疎々しい態度をすれば、世人も變だと思ふだらうと、源氏の君は考へられて。  
 ○まかで給ふべき日——藤壺が東宮から御退出の日に御訪問なされた。

ゐるところなので、藤壺はこんな手紙を受けとつてはと、恥づかしさに顔色も赤くせられて、「まだやはりかうした戀文を送つて下さるやうな源氏の君の御心こそ、本當に疎々しいものである。あたらしい哉、源氏の君は思慮深い人であるのに、思ひがけなくも、かうしたことどもを、時々やりなされるので、世人も不思議がるであらう」と、藤壺はいやに思召されて、その紅葉を瓶にささせて、廂の間の柱のもとに押しやらせなされた。通常の事で、東宮の御事に關係したことなどならば、藤壺は源氏の君をたよりとしてゐられるやうに、眞面目な御返事もなさるが、さうでなく、戀文のことになると、中宮は頗る用心深く、何時も逃げてしまはれると、源氏は恨めしく思召される。けれども今日までは藤壺のことについては、何事も御世話申して来たのであるから、今急に疎々しい態度をすれば、世人は却つて變だと思ひ咎めるだらうと、源氏はお考へになり、藤壺が東宮のもとから御退出なさる日に参内なされた。



○まづ内の御方に——源氏が、まづ朱雀院の御前へ。  
 ○御容貌も院に云々——帝は御容貌も大へんよく故桐壺院に似通うてゐらつしやつて。  
 ○なごやかに——温和に。  
 ○かんの君の御事——體

まづ内の御方に参り給へれば、のどやかにおはしますほどにて、昔今の御物語聞えたまふ。御容貌も、院にいとよう似奉り給ひて、今少しなまめかしきけ添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします。かたみにあはれと見奉り給ふ。かむの君の御事も、なほ絶えぬさまに聞しめし、氣色御覽する折もあれど、「何かは、今始めたる事ならばこそあらめ。ありそめにけるこ

月夜侍と源氏の君との交情も、まだ絶えないやうすを、帝も聞き知つてゐられ、そんな様子も御氣づきであるが、  
 ○今始めたる事ならばこそあらめ——今始めての事ならばともかくとして、これはずつと以前からの關係であつたのだから咎めるにも及ばない。又二人の間も相應した身分のほどでもあると。

となれば、さも心かはさむに、似げなかるまじき人のあはひなりかし」とぞ思しなして、咎めさせ給はざりける。

源氏の君は先づ主上朱雀院のもとに参内せられると、帝は恰度御暇でゐらせられる時であらつしやつたから、昔から今までのいろ／＼な御物語をなされた。帝の御容貌は、亡くなられた父桐壺院に大へんよく似てゐられ、その上今少し美しい所が添うて、人なつかしう温和なさまでゐらつしやる。御二人とも互に亡き父の御面影として、身に泌みて見かはしなされる。源氏と朧月夜の侍との關係は、今日もまだ絶えないやうである。帝はお聞きになり、又さうした二人の様子も事實ご覽になる折もあるが、「何もさう咎め立てをする必要もないだらう、かうした關係が今始つたといふのならば、ともかくであるが、既に昔から行はれてゐたことでもあるから、そのままにして置いてよい。又さうして二人がお互に交りをなすにも、不釣合な身分でもない間柄である」と帝も思しめされて、咎めなさることもしなさらなかつた。

よろづの御物語、文の道の覺束なく思し召さるる事どもなど、問はせたまひて、又すき／＼しき歌がたりなども、かたみに聞えかはさせたまふ序に、かの齋宮の下りたまひし日の事、容貌のをかしうおはせしなど、語らせ給ふに、我もうち解けて、野宮のあはれなりしあけほのも、皆聞え出でたま

○問はせたまひて——帝が源氏に。  
 ○すき／＼しき歌がたり——色めいた歌の話、戀歌のことなど。  
 ○かの齋宮の下り——齋宮が伊勢へ下向なさつた日の有様。

○我もうち解けて——源氏の君もうち解けて。  
○野宮のあはれなりしあけぼの——御息所をたづねた時。

○中宮の——藤壺の今夜東宮のもとから御退出になるのを。  
○遊などもせまほし——この月影に音楽でもして遊びたいと。  
○院のの給はせおくこと侍りし——桐壺院の御遺言もあるし、又私源氏以外には御世話申す人もございせんから。  
○春宮の御ゆかり——東宮の縁につれて、藤壺の宮も御いとしく存じますので。  
○春宮をば云々——春宮を今上(朱雀院)の養子にせよなどと桐壺院から御遺言もありましたから。

○取りわきて心ざしものすれど——格別に私は春宮を大切に思つてゐますが。  
○殊にさしわきたるさまにも——特別な待遇をすべきでもないだらうと思つてゐます。  
○年のほどよりも御手など云々——宮冷泉院は御年の割けよりは御筆蹟などは際立つて御立派であられるやうだ。  
○何事にもはかしくしからぬ云々——何事につけても、しつかりとしたことのできなない私(帝)の面目となる方でありませぬ。  
○まだいとかたなりになむ——まだ十分と整うてゐない。  
○大宮——弘徽殿皇太后。  
○頭の辨——大后の甥にあたる人。藏人頭で太政官の辨官を兼ねた人。

ひてけり。

帝はいろ／＼な御物語や、學問上の不審に思しめされる點などを源氏の君におたづねになつて、又色めいた歌の話などを、お互ひに語りなされる序に、帝が、彼の齋宮が伊勢に下向なさつた當日、その御容姿の美しくおられたことどもをお話になつた。すると源氏の君も打ちとけて、自分も野宮に御息所をたづねたあけがたの様子を、つつみ隠すこともなく申されてしまつた。

二十日の月やう／＼さし出でて、をかしきほどなるに、「遊などもせまほしきほどかな」とのたまはす。「中宮の今夜まで給ふなる、とぶらひにものし侍らむ。院のの給はせおくこと侍りしかば、又後見仕うまつる人も侍らざめるに、春宮の御ゆかり、いとほしう思ひ給へられ侍りて」と奏し給ふ。「春宮をば今の皇子になして」など、のたまはせ置きしかば、取りわきて心ざしものすれど、殊にさしわきたるさまにも、何事をかはとてこそ。年のほどよりも、御手などのわざとかしこうこそ物し給ふべけれ。何事もはかしくしからぬ、自らの面起しになむ」とのたまはすれば、「大方し給ふわざなど、いと敬くおとなびたるさまに物し給へど、まだいとかたなり

になむ」と、その御有様など奏し給ひて、まかてたまふに、大宮の御兄の、藤大納言の子の頭の辨といふが、世にあひ花やかなる若人にて、思ふ事なきなるべし。

二十日の月がやうやくにして山の端を離れて、まことに面白い夜のさまであるので、帝は、「管絃の樂でもして遊びたいほどよい景色だ」と仰せられる。さて源氏は「藤壺の中宮は、今夜東宮のもとから御退出になりますので、おたづねに参りたいと存じます。故桐壺院の御遺言もありますから、お訪ねせねばなりません。なほ又、私以外には誰も御世話申す人もございませぬやうですから、東宮の御世話などもいたしてゐます。その東宮のゆかりで藤壺中宮をも御いとほしく思はれます」と申しあげなされる。すると帝は、「故桐壺院は、「東宮を猶子としてくれ」などと」御遺勅もあつたのだから、格別に東宮を大切に思つてゐるのですが、さればとて殊更特別な待遇をすべきでもないだらうと思つてゐます。東宮は御年齢の割合よりは、御筆蹟などの際立つて立派でゐらせられる。何事についても、しつかりとしたことの出来ない自分(帝をさす)にとつても、大へんな面目となることでもあります」と仰せられるので、源氏は、「すべて何事をなされても、頗る英明で大人びたさまでゐられますが、それでもいまだ十分整うてゐられません」と、東宮の御様子などを奏上なされて御退出になる。

このとき弘徽殿大后の御兄の藤大納言の子の頭の辨をつとめてゐる人がある。この人、おのが